
続・テミスの像「ダークマター」

なしか 空

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・テミスの像「ダークマター」

【Zコード】

Z93800

【作者名】

なしか 空

【あらすじ】

巨悪の王に挑んだ田川の侠客、城島元特捜部検事は、返り討ちにあって刑務所で暗殺され、愛妹民子も留置場で兄の潔白を叫んで縊死した。

悪魔のように残忍に晒い、魔女のように冷酷に微笑む、インター セックスの刺客、青山姪臣と刺し違えるようにして果てた彼らであつたが、それで事が済んだわけではなかつた。

運命は、散らばつた塵を集めて内部圧力を高め、核反応を起こして第一世代の星が形成されるように、新たな火種を灯していた。

アメリカの国益であり、戦後、法務・検察を牛耳ってきた巨悪の王に向かつて、再び侠客の血統がリベンジに立ち上がり、壮絶な聖戦が始まる。

希代の謀殺請負人「青山姪臣」がなお生きているかのように死んだのは愛と正義の弁護士、一覧性双生児の姉・根岸ともみの方だつたのか——今再び殺戮と陰謀渦巻くピカレスク・ファンタジーの幕が切って落とされたのだ。

予言の書

兄弟たちよ。

深いイドの底をのぞき見たことがあるかい。
じつと、眼まなこを凝らして、のぞいて見るがよい。

光 という名の、闇の影が消失した時、
深淵の彼方かなたから、

じつと、此方を窺う見知らぬ眼差しに出会ひだらつ。
だが、あわてることはない。

じつと、待てばよい。

光芒ひかりが放たれた方が、シャドーなのだ。

た枝葉を重ねた雑木林が、鬱葱と頭上に覆い被さつて、暗くなる。

所々に防犯灯が黄色く淡い光を放っているとはいえ、こんな薄気

味悪い所、夜一人で歩く酔狂はない。

それだからなおさら、後ろの人影が只者でない証拠 それをいえ
ば、自分もそうなるのだが 。

ある時、母がいった。

あんた達は そこに兄もいた 普通の者と思つてはいけん。
いつ何時、暴漢に襲われんとも限らん。そういう運命を背負つてい
るけん、気をつけんといけんよ。

まさに今が、その時か。

部活で遅くなる時の帰りは、いつも母がアルトで迎えに来る。今
日に限つて、県病に入院しているお祖父いちゃんがまた肺炎を起こ
したとかで、迎えに来られないからタクシーで帰るようメールが入
った。

なのに、部活の友達とチャリと一緒に帰つて来たのが、最初の過
ち。

一つ目の過ちは、それなら母がいつも車で通る道、夜半でも交通
のある美術館前の明るく広い道路を帰ればよいものを——その方が
近いし、適当に人家もある——いつも通り友達ん家がある桜ヶ丘経
由で帰ろうとしたこと。

というか、過ちとばかりはいえない。意に反したこととしたわけ
ではない。母のいいつけを守らなかつたことも含めて、きわめて恣
意的な選択であつた。もともと、そういう晝でも薄暗く、人通りが
少ない、薄気味悪い場所が好きなのだ。もつといえば、血の欲求で
もあつた。

人気のない墓地公園を通る時のゾクゾクした気持ち、お墓や密林
から何が飛び出して来るか、考えただけでもゾクゾクする。お化け
屋敷やゼットコースターのゾクゾク感に似ている。

光子は生来そういうゾクゾク感がたまらなく好きなのだった。冒
険家のように、危機的状況を求める気持ちが、その場になつたらき

つと後悔するだらうけど 今のように、そういう気持ちが、押さえ難くあるのだった。

恐がりの兄は今でもジェットコースターなんか絶対に乗れないし——城嶋後楽園のジェットコースターは木組みの上を走るので危ながしいことこの上なく、スリル満点なのに——幼ない時分、楽天地の象の背中にさえ怯えて乗れなかつた。そういう时光子は、何かにつけ優秀で、両親の誉れである兄の風下に置かれている鬱憤を晴らして、得意満面だつた。

そういうえば前にも一度、この墓地公園で血も凍るような恐怖体験をしている。

あれは中学一年生くらいの時だつたろうか、もう少し上の、雉飼^{きじか}場^ばと呼ばれる本光寺の下辺りは、背の高い広葉樹^{ひやぎゆ}が生い茂つていて、ドームのような暗がりになつていた。そこは暑い夏でもひんやりじめじめ湿つぽく、日中でも薄暗いくらいで、夕暮れ時ともなればもう、あの頃は防犯灯^{あやめ}がなかつたから文田^{あやまち}もわからないくらいの暗がりとなつた。

そこを中学生の光子^{ひかるこ}がやはり部活帰りに一人で歩いていると、光子のすぐ隣を、誰かが一緒に歩いている気配がした。人が動く濃厚な気配がするのだ。ペタペタという足音まで。

ゾツとして、心臓がバクバク、金縛りのようになつて、横を振り向いて見る勇気が、その時はなかつた。

それが悔しくて後悔でならず、あのゾクゾクした感覚をもう一度味わいたくて、今度こそ闇を透かして正体を見極めてやろうと、何度も同じ時間帯にそこを通つたものだ。これつて変態なのかなあ……などと思いながら。

しかし同じ夢をもう一度見たいと思つてもままならないよに、一度とそういうことは起きなかつた。

そんなわけで、母から迎えに行けないといつメールが入つた時、（シメタ！）と心の奥で思う心があつたことは確かだ。

しかし今は後悔している。掛け値なく恐怖が勝つている。あとに

なつてから、この恐怖心をもう一度味わいたいと思うことになるかも知れないけど、そうなればよいけれど、今は心臓バクバク。口からお尻が飛び出しそうだ。

進退窮<じんたいきゆう>またの冒險家もそうであるうか。滑落したロッククライマーも後悔する？ 処刑台の死刑囚も？ 火炙りになったジャンヌダルクはどう？ 家庭の中で、おとなしくぬくぬくしていればよかつたと思う？ ママの懐の中で。

「何んですか、若い娘が。そんな時間に、そんなところ、一人で歩くもんじゃありません！」

鼻でせせら笑っていた母の忠告が、現実のものとなってしまった。後ろをついて来る人影は、ただの気配などではない。角を曲がる度に、もう来ないだろ？ 今度こそ別の道に、という願いを一々しかしそうなつたらそくなつたで、「なあ〜んだ、つまんない」と落胆するだろ？ けど ことごとく裏切って、そいつは、月光に照らされ、あるいは暗がりから勃然と姿を現した。一キロ以上もそうやつてついて来る確かな存在である。

間合いを計つて一一いや、少しづつ距離を詰めて來ている。攻撃を仕掛けるチャンスを窺つている。

仕掛けて来るとしたら、逃げ場のない一本道の雉飼場か。

その前に、逃げるか——逃げるチャンスは何度もあつた——戦うか、決めなければ。

逃げるなんて！

こんな時の為に、下手な男には負けない体力と、武術を身に付けて来たのではなかつたか。

あの時、女を棄てようと決意したのではなかつたか。
だけど、この胸の高鳴り！

何せ、実戦経験不足で、ハートがまだできていない。これでは息が上がつて、身体^{からだ}が縮^{ちぢ}かんで、満足に戦えやすまい。

先手・後手自在の空手などの飛び道具と違つて、柔道はどちらかといえば受身からの攻撃となる。水のように冷めた目で、冷静に敵

の動きを見究め、打撃をもろに受けないようになしながら接近戦を制して、相手の懷に飛び込んでしまえば、掴まえてしまえば、こっちのもの。

胆力　が必要なのだ。肝つ玉が！

おまえは母の胎内に玉を一個置き忘れて來たな。

と、福岡の伯母にいわれたことがある。けど、一度なりとも修羅場を潜らないことには、肝つ玉は据わらない ジェットコースターも最初は恐かった。

ならば今がそのチャンス。天恵の試練。伸るか反るか。
光子は、腹を決めた。

「」の先、墓地が途切れた所に、墓地を挟んだ一通の道路が出合つ所がある。そこは道が広まって平らな、ちょっとした広場になつて、鋭角に左に上る狭い道と、真っ直ぐ雉飼場から本光寺に向かう広い道に分岐する。そこで一戦を交えよう。

そう腹が決まると、そこには並みの少女ではない。田川の侠客の孫であり、娘である。光子は自転車を小脇に佇んで、坂道を上つて来る人影を持った。

「」さんなれ 福岡の伯母の口癖である。

どんなやつか現れるか、ゾクゾクした。

しかし、その広場の片隅に、フルスモークの黒いセダンが止まつていることには気付かないでいた。無理もない。それだけ迫つて来る怪人に気を取られ、悲壯な決意に興奮してもいたのだ。

後方でカチャという音がしたので半身振り返ると、防犯灯に照らし出されて、のつそり車から迷彩服の男が出て来るところだつた。そいつは同じ色のツバ広帽を被つてサングラスをかけていた。デンジャラスな男であることは、仁王立ちしたその全身が物語ついた。運転席からも頭の禿げた男が姿を現す。こいつはサングラスも帽子も被つてないけど、亀のように顔の半分を黒いハイネックセンターに埋めていた。やはり、アーミーグリーンの軍服のようなブルゾン姿。

「何なんのよ？ これ。……こんなのがり？」

下腹がキュッと締まつた。

前門の虎、後門の狼である。これでは勝ち目はない。

(ママ、助けて！)

光子は心の内で叫んだ。

その時。

「ヒメ！ わしの後ろに！」といつて、いつの間にやつて來たのか、

長い棒を持つた魔法使いが、光子と男らの間に割り込んでしわがれ声で叫んだ。

けど、いかにも苦しそうに、肩で息をしている。中腰になつて、棒でよじやく体を支えているよつた有様。フード付きジャンパーにて、夜目にも鮮やかな赤いニッカ・ポッカ姿。

その声ですぐにわかつた。三、四年前から屋敷の納屋に住み着いている片腕のテキヤだった。中味のない右袖をブラブラさせている。八十はとっくに超えた老人である。

「何んな。松つあんな」

「こげなこともあらうか思つてな」松吉は男らに向き直つて、「おい、おまえら、何者んじやい！」といった。

男達は顔を見合せた。

「ヒメに手を出すと、五徳のマツが承知せんぞ！」

「ちつ！」と、男らは舌打ちして、バタン、バタンと、セダンに乗り込み、「ジジイ邪魔だ、どけ！」

といつて、恐ろしい勢いでバックし、タイヤを鳴らしてコーナーインすると、一通を逆走して下つて行つた。

「ふあはふあふあ。へコカルイどもが！」

へコカルイとはフンドシ担ぎという意味である。今でもタオルで手製のフンドシを拵えて締めているテキヤの松吉は、弁慶のようにな棒を突き立てて、一本しかない黄色い墓石のような門歯を見せて高笑いした。

「ああ、助かつた。けど、松つあん」光子は自転車のスタンドを立て、松吉の傍に行つた。「脅かさんでよ。松つあんの方がよっぽどオジ（怖い）かつたは。魔法使いみたいな格好に見えたんじやもん、怪しい人か思うた」

「あいつらよりか？」

「あいつらの方がまだまし。可愛い顔してたじyan」
「ほほほっ。ようゆうわい」

「でん、こんことは、内緒にしていてね。ママが心配するといけん

けん

「よか。よかばつてん、ヒメもこげなとこ、暗うなつてからは通らんようにせねばな。わしがおつたからよかつたものの。ママが聞いたら卒倒するばい」

「つかかてむざむざやられはせん！」

「おおー、これは頼もしい。したら、腹ば、括つとつたとか。

うーむ。血は争えんのう……」

あとでわかったことであるが、母の遼子にはすつかりお見通しだった。おとなしくタクシーで帰るような子ではない。だから松吉を迎えて行かせたのであつた。光子の性格と日常の行動を知り抜いている遼子は、桜ヶ丘の楊志館高校の前で待つていればよいといった案の定だつた。

しかし、懸念が現実になつたことまでは知らぬが仏となる。それは松吉と光子だけの秘密となつた。

「なあ、松つあん。あいつら何者やうつ？」自転車を押して歩きながら、光子が訊いた。

「学校の先生には見えんかつたな。パーマ屋の親父にも見えんかつたじやうつ？」

「まだうちら狙われてるんやうつか？」

「さあ。　　ばつてん、五のヒメ。若いオナゴが、こげな時間に、こがんとこ通るんは、真つ裸で歩くんと同じことぞ」

「もうー、わかつたけん、いわんで。それに、いいかげん、その、時代がかつた、ヒメ、いうのもやめてくんない」

先代親分の代から城島家の娘をそう呼んで仕えて來た松吉であつた。何度もそう注意されるけど、改める気はない。

雉飼場の樹木のトンネルを抜けると、道がまた三つに分岐して急坂になる。左に行けば本光寺、榎原家の入母屋造りの屋敷は、右手に上つて暫らく行った所の高台にある

その日遼子は午前様になつて帰つて來た。

とりあえず娘の部屋を覗いて、光子がベットにおとなしく寝ている タヌキ寝入りであつたが のを確かめてから電気を消し、キッチンで、有り合わせのもので夕食をとつた。

納屋にはまだ電気が点いていた。ボディーガードを任じている松吉はまだ起きているのだろう。いつもながら、遼子の赤いアルトがガレージに納まるのを待つてからでないと、決して寝ない。

キッチンの窓からポツリと納屋の電気が消えるのが見えた。今は女しかいない一軒家。九十近い老人とはいえ、心強いボディーガードである。もう一人若いのがいたけど、今は畠中の刑務所に入っている といつても、まだ拘置区で未決拘禁の身であるが 。

ドモリのタツという氣立てのいい青年だつたけど、ちょっとしたことで強盗・傷害の罪に問われている。根岸先生は何とか恐喝・傷害程度で執行猶予をとれないものかと頑張つてるけど、どうなることやら。

一人とも福岡のお義姉さんの差配によるもので——離縁した夫は三年前に獄死、子供らは父親と死別して、遼子としてはもう城島家とは縁が切れたと思っているのに——「光子と竜平は血を分けた可愛い姪子と甥子、どうして放つておけるもんね」といつて、ややもすれば光子を養子に欲しがつた。迷惑な話だつたけど、今はよかつたと思う。

さつき見たら、ガレージと家の間に光子の赤い自転車が停めてあつたから、やはりタクシーで帰らなかつたのだろう、松吉に迎えに行つてもらつてよかつた。松吉は植木の手入れや、板壁の補修、屋根瓦の防水ペンキ塗りなど、ほかにも屋敷の細々としたメンテナンスにも気を配つてくれて、本当に助かる。

だけど光子には困つたものだ。

コーヒーを入れながら思いは光子に移る。親のことを少しも聞かない。小学生高学年の頃からもう自分より背が高く、中学生になつたら見上げるようになつて、叱るのにも迫力がない。

特に今は進路のことで険悪な関係にある。できれば近くで平凡なOLに納まつて欲しいのに、警察官になるといつて利かない。公安職はこりごり。それだけはどうしても譲れない。大学に行けばまた気が変わるかもと思って、経済的には苦しいけど進学を強く進めるが、駄目。進路指導の先生に相談しても埒があかない。

困り果てて、光子が一番恐れている、福岡の竜子お義姉さんに言い聞かせてもらおうとしたら、これがとんでもないやぶ蛇になつた。「光子を警察官なんぞにさせたら絶対いけん。警察も検察も裁判官も刑務官もみんな親の敵。かたき」光子をうちに預けんしやい。光子は普通のオナ「」におさまるような子じゃなか。一つ道をば違えたら、大変なこつづやらかす娘こばい」

といって、テキヤの跡継ぎにしようという腹なのだ。明治以来の名門の門流、光子の祖父の代から始まつた「天門屋一家」が不景氣で衰退し、後継者問題に揺れている時期であった。

法律事務所開きの時に、一度だけお目にかかつたことのある木之元の親分は、今や耄碌もうろくしていて、毎日中から焼酎を飲み、倍賞千恵子の「下町の太陽」や「さくら貝の歌」を聴きながら涙ぐんでいる有様とか。今は竜子義姉さんが支えているけど、将来を考えば、一家十五人、家族を合わせれば五十人余りの川筋者の命運は、創業者直系の孫娘、光子にかかるといふのだ。

冗談じゃない。光子は榊原家の愛娘、テキヤの親分にするくらいなら、まだ警察官の方がまし。遼子は早々に逃げ帰つたのだった。だけど親の目から見ても、竜子がいうように、光子はちょっと変わっている、何を考えているのかわからない。遠くを見つめるような目をして、何かに向かつて突き進んでいるように見える。だんだん男のように猛々しくなつて、顔は丸顔で似てもいなければ——親

の欲目かも知れぬけど、誇らしいほどキリッと引き締まつた好い顔をしている——しかしその女豹のような精悍な眼差しは、ハツとするよう別れた元夫に似ている。

頭が悪いので検察官にはなれないから、警察官にならうといふのだろう。警察官になつてどうじょうと云うか。元夫のようにまた正義に殉じようというのか。

そればっかりは。何とか普通の〇〇で傍に引き留めておく手立てはないものか。親に少しも甘えることのない子で、あれよあれよという間にもう頭を撫でてやることも、抱き締めることも憚れるほど、大きくなってしまった。

そこへいくと竜平は——「コーヒーを飲みながら遼子の思いは東京で大学生活を送っている長男の竜平に移る。

一時、心がなごむ。疲れた体にコーヒーの甘さと苦味が心地よく染み渡った。

光子より三つ年上の竜平については申し分ない。大学進学も一発で東大理学部に合格し 法学部でなくてよかつた、生物科学を専攻して着実に学者への道を歩んでいる。

元々内気で学究肌の子だつた。榎原家の血を引いているのか、父も母も祖父も教師だつた。大学教授にでもなつてくれたら万々歳。福岡のお義姉さんには、「しゃきっとしんしゃい、しゃきっと」といつもいわれていたけど、親思いの優しい子で、学費や生活費は全部バイトで賄い、お誕生日にはきっとプレゼントを贈つて寄すし、月を置かず電話やメールで気遣ってくれる。

女の子一人しか儲けなかつた父・母にとつても、竜平は待望の男の孫であり、自分が離婚してからは、榎原家の跡継ぎができると大喜び、優秀な孫を、一人とも目を細めて見やつていた。

そこでまた、なごんだ気持ちに不安が入り込む。

今度は父親の容態のこと。肺ガンで入退院を繰り返している父親の史朗は、今度が最後の入院となるかも知れない。肺炎を起こす度に、命の炎を小さくしている。三年前に母親の菊を見取つたばかり

であつた。

前に続く

思えばここ五年は、両親の看病や介護であつた間に過ぎた五年だった。子供らも難しい時期で、手を焼くことが多かつたし、親族を含めて入学・進学・婚礼・葬儀など、通過儀礼も日白押しだった。

その間に再婚話もあつたのだが、元夫とは愛想が尽きて別れたわけじやなし……。

しかしその思いも断ち切られ、貴重な女の時期をも逃してもう四十も半ば、更年期障害を抱えた遼子はのろのろと立ち上がり、後片付けを始めた。

そして大儀そうに左右に揺れながら寝室に向かい、布団を延べて、光子が寝ている一階を見上げて電気を消し、疲弊した体をじろじろと横たえた。

光子は胎児のように丸まって爪を噛んでいた。そうしながら船を漕ぐように体を揺すっていた。

あれしきことで、あんなに去えるなんて。松つあんが怪しい不審者に見えてしまってん。

何と弱々しい心！

体は鍛えられても、心はそっぽいかないのか。体と心は一体ではないのか。

あいつらと一戦交えていればどうなつていただろう。拉致されたいたか。メタメタにやられていたか。それとも撃退していただろうか。

タフにならなければ。もつともつと心身ともにタフにならなければ。

“明日からまたあのベルトを巻こう”

三年前、突如、巨大な隕石が落ちて来て、世界が真っ暗になり、
暗澹たる心に、瞋恚の焰が灯った。

あの時の悲嘆と憎悪は今なお少しも衰えてはいない！
そうなのだ！

国家権力を手に入れなければならないのだ。

国家の中の国家、権力の中の権力と対決するには、権力を手にしなければ。でなければ、テロリストになるしかない。
権力を手放した為に、父は国家権力によって惨たらしくなぶり殺しにされたのだ。 むざむざと。

きつとそいつらに悪の焼印を押してやる！ ソドムのように、神の火で焼き滅ぼしてやる！

きつとそうしてやる！ そうしないでおくものか！

いつしか光子は夢現の中を彷徨っていた。

光子は戦士だった。

額に銀の鎖で編んだバンダナを巻き、黒い面頬めんほおを被つて、鎖カタビラの上から丸い肩の鎧を纏つた短いスカートの少女戦士は、右手に両刃の剣を持っていた。

剣を持つた右腕と左足の太腿には、聖職者が巻く黒革のトゲトゲの付いたシリスベルトが巻かれてあつた。

少女戦士は右膝ひざを立て、シリスベルトを巻いた左膝を折り曲げて膝頭を地に着け、お祈りのポーズをとつた。左膝ももにトゲトゲが食い込んで血が滴り落ちる。剣を持つた右腕を折り曲げた。同じように血が滴り落ちる。

少女戦士は勇ましく立ち上がり、剣を振りかざして、鷹のよごに甲高く叫ぶと、地平線に向こうの暗黒に向かつて、広野を突っ走つた。

行く手を阻む様々な怪獣やモンスターを打ち倒し、突き倒し、斬り倒して、突き進む。

行く手には、暗黒のマントを纏つた魔王が聳え立ち、マントを広げると、無数の銀河がきらめいた。

アンドロメダ銀河辺りに金色の目が明き、M51に赤い口が開いて、電子音的な囁いが雷鳴のように轟いた。

闇の軍勢が甲冑具足の音を立てながら西から東から南から北から黒々と天空を行進する。

閃光が闇を走って、マクロコスモスに闇の軍勢と、暗黒の魔王を隅取る。

光子は暗黒の魔王に向かつて泣き叫びながら剣を振り回した。突飛、払い、振り下ろしたーー。

その熱狂はいつまでも続いた。

母親に抱き起こされても泣き叫び続けた。

抱き竦められても泣き叫び続けた。

母親は癪の強い娘がついに発狂したのではないかとおもおひして、頬をペタペタ叩き、呼びかけ、赤ん坊をあやすように膝の上であやした。

我が娘の初のテンカンの発作に、その熱く濡れた頬に頬を押し当てる強く抱き締めるより成す術を知らなかつた。

強い怒りによる絶叫によつて、舌を噛み切らずに済んだのは、眞に幸運だつた。

光子は白目をむいて抗い、仰け反り、激しく痙攣しながら、なおも泣き、絶叫した。

「――お・お・お・お――　――お・お・お・お――　――お・お・お・お・お――　――お・お――」

その子を愛^めで、
その子を慈^{いつく}しんで、育^{はぐく}むがよい。

そして、

その血を、捧げもの 生贊^{いけにえ} とせよ。

その一 ××とメメの子 タツオ

村上カメの孫娘メメが彦山川の河川敷で父無し子を産み落としたのは一九八六の五月のことだった。

まだ中学生のメメは、気丈にも後始末をちゃんとして、赤子を彦山川の水で清めた。台風が通り過ぎたあとで、空は真っ青^{さお}、景色は目が覚めるようにみずみずしく、清らかであったが、川の水は濁つていた。

赤子はしかし産声をあげることなく、仮死状態で産まれており、産婆なら尻をバシバシ叩いて泣かせるだろうけど、幼いメメにそんな知識はない。ぶよぶよした赤黒い肉塊を持て余して、タオルの上に横たえた。途方に暮れて香春岳を見上げる。

近くで草を食べる牛がのどかに鳴いた。

犬猫の子なら可愛いのだけ残し、ほかは目が開かないうちにズタ袋に入れて川に流すのが常だったから、そうしようかと思った。家に持ち帰れば、バアバにどれだけ叱られるか。

赤子はもう死んでいると思った。丸めた小さな口に皺んだ目、握り締めた小さな手、足の腹を見せた細い足、力んでいるように見えるが、ピクリとも動かない。

そこへ。

サツと一陣の風が吹いて、ビニからともなく天使が舞い下りて来て、赤子に命を吹き込んだ。

赤子が弱々しい産声を上げたので、メメが振り返つて見ると、一匹の黒い大きなアブが、アブが赤子の尻にとまっていた。

村上カメは、我が娘がメメをひり出した時のことと思わずにはねなかつた。相手は富山のクスリ売りで、毎年宿を貸してやつていたのがアダとなつて、三七歳の箱入り娘がクスリ売りの子を孕み、置きグスリと一緒に子ダネまで置いて行つたヤクザなクスリ売りを追い駆けて、娘は産まれて間もない赤児を置いて家出してしまつたのだ。

何という因果であろうか。

今度はその手塩にかけて育てた孫娘のメメが、年端もゆかないメメが、母親と同じ過ちを犯して、塩垂れて帰つて來たのだ。道端で子猫でも拾つたかのように、タオルで包んだものを抱えて。

何んば問い合わせしても、メメは頑として憎き狼藉者(うぶすな)者の名をいわなかつた。が、ともかく、生まれた子に罪はない。産土の神の授かり者である。便所にひり落とした者もいれば、ゴミと一緒に棄てる者もいる。よくぞ亡き者にせず連れ帰つたとカメは、叱られるのを覚悟でうなだれている孫娘にいつた。

しうのなか！ 早よ、風呂場を行つて、体ば、洗つてこい。赤子は小さな手足を動かし、そねぐりばつて、力強く泣いた。九十一歳のカメは、九十度近く曲がつた腰をトントン叩いて、手て渾(ばな)を飛ばしてから赤子を抱き取つた。

おお、よしよし。どげんした？ お尻の痒いとか。オシメば、すけてやらんばね。まだまだ、バアバも死なれんわいね。おほほほ。といつてあやした。

仮名文字しか書けないカメは、今度こそ間違わないようと、ボールペンを舐め舐めしながら用心して、「タツオ」という名前を書

いて出生届けを出した。竜太郎親分の竜の一宇をもらつたけど、竜夫という漢字が書けなかつたのだ。孫娘の時は「ナナ」と書いたつもりが「メメ」になつていた。博多で「メメさん」といえば何の愛称であるか、知る人ぞ知る。

その一 ドモリのタツ

メメの子タツオは大きくなつて「ドモリのタツ」と呼ばれた。ドモリのタツが十一歳になつた時——カメはもう鬼籍に入つていが——「ネエネエ」とか、「メメさん」とか呼んでいた母親のメメは稼業先で事故に遭い、それが元で若死にした。

天蓋孤独になつたタツオを引き取つて面倒を見たのが「片腕のマツ」こと、五徳の赤峰松吉であった。

ために、タツオは松吉のタネではないかといふ者もいたが、それは年齢からして考えにくい。むしろ、「後家殺しのマツ」とも異名をとつた松吉と、戦争末亡人のカメがいつ時人も知る仲であつたから、その辺の義理からと考えるのが妥当なところだろう。

タツオは赤峰松吉によつていつぱしのテキヤに仕込まれた。

その「片腕のマツ」と、「ドモリのタツ」が、大分の榎原家に食客となつて身を寄せた時には、まだ先代親分の長男、城島竜一は名古屋刑務所に服役中の身であつた。離婚した元妻、当家の遼子お嬢さんと、二人の間の子供は、籍を榎原に移していくけど。

若親分——彼ら一類はそう呼んでいつの日か竜一が一家に戻つて来てくれるこことを切望していた——が刑務所で非業の死を遂げると、復縁の望みもなくなり、彼らは食客からちゃんと家賃を支払う間借り人になつてケジメをつけた。だけど、危険はさらに高まつたと、なおも居座つたのである。親子は死別したけれど、甥・姪の血の絆は切れないという博多の意向であった。松吉も居心地がよかつたのだろう。

ドモリのタツが初めて傷害事件を起こしたのは、榎原家の居候から間借り人になつて何年か後のことである。

齡二十二で、見かけトッチャン坊やのタツは、体格もよく、強靭

な体力を持ち合わせていたにもかかわらず、軽く見られがちで、吃音をバカにされたり、よくケンカを吹つかれたりした。

けど、墨を入れたり、強面を作つたりするのは性に合わず——それこそが稼業人にとって無用な争い事を避ける一番のことなのに——一笑つて受け流した。

見かけ通りの温厚な性格で、争い事を好まなかつたから、これまで大した問題も起こさずに来られたのだが、内心はそうとう無理をしていた。

中学時分に一度ケンカに巻き込まれて相手方にケガを負わせたことがある。そこで学習したのが、ケンカは高くつくということ、人間は感情的になつたらおしまいだということ、自分は意外と強いといふことだった。何より義のないケンカをしてメメちゃんや、バアバを悲しませたことが、心優しいタツオを後悔させた。

以来、虚勢を身に着けるより、愚鈍を装おい、辞や腰を低くすることで無用な争いを避けるといつ、防衛機制を働かせるようになつたのだ。決して気が弱いわけではなく、爆発的エネルギーを内に秘めていただけであつた。

それがとうとう臼杵市^{うすき}の城址公園桜祭りでの商いの際に爆発した。タコ焼き代金を踏み倒して逃げた高校生の不良どもを、袋小路に追い詰めて殴つたことから、臼杵署に傷害の現行犯で逮捕されたのである。

それが単なる傷害事件では收まらず、強盗・傷害という大変なことになつてしまつたのは、強引に代金を徴収したからである。タコ焼き代五〇〇円を意に反して徴収したことが、強盗罪を構成する要因となつた。

だが、逮捕直後のタツはそうはいつていない。「威嚇したわけではなく、代金五〇〇円は向こうから投げて寄こしたものであり、殴つたのは小刀を構えて挑みかかつて来たからだ」——と、警察官への弁録では抗弁していた。

しかし、諸般の事情から検察官は「強盗・傷害」容疑で起訴し、

刑法一四〇条を適用して、懲役七年を求刑したのである。タツも警察・検察に攻め立てられて前言を翻し、検察官の調書では、ほぼ警察の捜査通りを供述している。肝心な小刀が出て来なかつたのと、目撃者の証言があつたからである。

その三 根岸法律事務所

「この事件の弁護を受けたのが、元城島法律事務所のイソ弁だつた根岸ともみ弁護士であつた。

城島法律事務所は、ボス弁の城島弁護士の刑が確定したことから、弁護士会から免許剥奪の懲戒処分を受け、閉鎖された。

根岸ともみ弁護士は、この地に根を下ろすことにしたのか、そのあとを居抜きで借り受けて「根岸ともみ法律事務所」を立ち上げたのである。事務員もそのまま榎原遼子と、大分大学の学生当時からのアルバイト・東トシ子を雇い入れたから、表向きには経営者が代わつて看板が変わつただけだつた。

東トシ子は、大分大学を卒業してなおも弁護士をめざしているけれど、司法試験は高いハードルのようだつた。半ば諦めているのかと思ひきや、左にあらず、実務から先に勉強して、司法試験合格後は速やかに法律事務所を立ち上げられるよう田論んでいた。実家が佐賀関で水産会社を営む資産家であるから、資金面の問題はないとしたチャッカリ者である。

城島竜二と別れてからも城島法律事務所の経理事務に通つていた榎原遼子は、かつては使用人だった者から使われる身になつたけど、経済基盤が維持できて有難く思つていた。

おまけに、高校を卒業してブラブラしていた娘の光子まで助手として雇つてもらつてゐる。根岸ともみとは色んな経緯があつたけど、二人の友情はいささかも揺るぎはしなかつた。

案ずることもなく、光子は何度警察官採用試験を受けても、合格することはなかつた。やはり親が犯罪者であり、祖父がテキヤであつては、ムベなるかな。

根岸ともみが苦笑いしているのを、「じゃあパパはどうして検察官になれたの」と、光子は口を尖らせる。

「その点は、検察官はわりかし資格が緩やかなのよ」と根岸ともみ

はこう。「でも、司法試験に合格しても、危険な思想にかぶれたりすると、裁判官や検察官には採用されない場合もあるけれどね」光子は逆立ちしても司法試験に合格するような頭はない。遼子は頭の悪い子に生んでもよかつたと、光子がいない所で根岸ともみにいつて笑つた。

「どうして光子ちゃんは官憲にこだわるのかしら?」

「さあ。……あの人の血を一番引いているからじゃない」

「大学で柔道を極めればよいのに。九州でも無敵なんでしょう?」

「福岡に田村という強いのがいるらしいけど、軽量級だからお姫様抱っこにしてしまえば、カメを裏返したようなもの、空中で絞め落とせば——なんてえらそうなこといつてるけど」

まだ光子が小学校低学年頃から可愛がつていた根岸ともみは、今や自分と同じ目線になり、自分より逞しく成長した光子を、そういうながら手元に置いておきたい風であった。

光子の方も幼い時分からカツコイイ根岸に憧れ、姉のよつに慕つていたから、助手の仕事もまんざらではないのかも知れない。何でもいい合える気が置けない姉妹のような二人の様子を、遼子は目を細めて眺め、これが最良だと思った。ずっとこのままであればどんなによいかと。

その四 面会

機会を捉えて光子は根岸ともみと畠中の刑務所へ行き、面会室で久方振りにタツオに向かい合つた。

前に一度、母親と松吉と三人で差し入れ方々面会したことがあるけど、その時は法律事務所に勤めていたわけではないので、立ち入ったことは何も聞かなかつた。

しかし今は切羽詰つた状況である。最終弁論が近づいているのだ。このままだとタツは五、六年の実刑を食らうことになる。弁護人の根岸ともみの危機感がひしひしと光子にも伝わつてくる。

根岸ともみ弁護士の弁論戦術は罪一等を減じて、何としても執行猶予を取ることだった。その為には検察サイドの事実認定を覆さなければならぬ。傷害の事実は歴然としているので、それに至るまでの過程 タツの方が身の危険を感じたことを証明しなければならない。

目撃証言を覆す為にはどうしても物証が必要だつた。今や挙証責任は被告人の方にあるのだった。

光子は、三つも年上のタツオに、凜とした声で訊いた。

「タツ！ ほんとはどうなん？ 相手は小刀を持つてたん？ 持つてなかつたん？」

「……んんんんん」と、ドモリのタツはアクリル板の向こうで低く唸つていたが、百メートル先にいたフランス人がいきなり目の前に現れたかのように、「もも持つてた！ ひ、肥後守の、くくく、黒くて、おおつ、大きいやつ！」と急き込んでいった。

「なら、なんでそういうわんの…」

「いいいつた。いつた！ けけけけど、き、聞いてくれんぢや」

「ほんで、認めたん」
タツはうなずいた。「そ、裁判官には、き、きつと、聞いてもらえる」

「バカ！裁判官も検察官も同じ法律家つたい。いつたん認め
てしもうたらおしまいたい」光子は相手によつて福岡弁になつたり、
大分弁だつたり、ごちやまでになつたりする。「ほんなら、小刀を
持つて向かつて来たんは、間違いないんやね！」

タツはうなずいた。うなずいて、「ヒ、ヒメ！」といつて身を乗
り出して來た。

「な、何んな？」

いきなり濃い顔が近くに寄つたので光子は少し引いた。

「……じ、……じ、じじじじ自分があそ、あそ、お傍におれんで
しきしき……しきしき、し、心配で、心配で、

「あなたはひとの心配より、自分の心配をしちょきよ！」

ラビット関根のような大きく円らな黒い瞳の中で星がいっぱい輝
いている、切実な顔のタツオに、光子はぴしゃりといつた。
根岸ともみは苦笑いをしていた。

その五 事件現場

そんなことがあつてから光子は三度事件現場を訪れた。

一度目は週末の金曜日に、ボス弁と、社用車のエブリイを免許取得して間がない光子が運転して出掛けた。コースは一九七号線を通つて坂ノ市有料道路から臼杵に入るコース。

さすが運動神経抜群の光子、少々スピード出し過ぎであったが、危なげない運転であつた。

「たったの五〇〇円、しかも代金を取り立てただけじゃん。懲役七年はちょっと酷くない？」光子が訊いた。

「たとえ一〇〇円でも、脅しつけ、自由を奪つて、意に反して強取すれば強盗罪になるのよ。恐喝との境目は難しいけど。つい先だって同じような事例の判決があつてね、食い逃げの客を、居合わせた客が取り押されて、殴つて代金を払わせただけなのに、やはり強盗・傷害罪に問われて、懲役六年の実刑にね」

「へー。法律つて変なとこに厳しいんだね」

「法は変らないわ。それを適用するかどうか、構成要件をどう判断するかによるのよ」

強盗罪は「暴行又は脅迫を用いて、他人の財物を強取したり、財産上不法の利益を自分で得たり他人に得させたりすると成立する（ウイキペディアより）」ということなので、状況は極めて不利である。現実に暴行を加えて全治一〇日間のケガを負わせているのだしこれについては病院代はもとより、慰謝料一五〇万円を支払つて

いる。

これに対しても根岸弁護人は――。

一、自由を奪つたかどうかについて、「袋小路といつても屋敷と屋敷の間に九二センチのブロック塀があつて、逃げようと思えばそれを乗り越えて隣の敷地に逃げることは可能だつた。相手は一人、自由を奪われたことにはならない。

一、「脅迫について、「被告人がヤクザであるかどうかも、イレズミを見せて脅したわけではなく、被告人はイレズミをしていない、見た目普通の人と変わらない、むしろ、気が弱く善良そうに見える、もしヤクザだという認識を抱いていたのなら、少年らが、『おっちゃん、イカのタコ焼き、ないんかいな、イカのタコ焼きちょうどいいなどと茶化したり、長らく長椅子を占拠して、寄つて来る小・中学生を睨み付けるなどして営業妨害的な振る舞いをしたり、代金を支払わないで逃げたりしない筈である。

二、「強取について、「被告人は代金を手にしていない。代金は知面にばら撒かれていた。これでは財物を占有したとはいひ難く、既遂していない。

四、「暴行について、「それらの行為のあとに暴行が行われたのであり、これは少年の供述から、そして目撃証言からも明らかである、暴行によって、少年を畏怖させ、自由を奪い、その意に反して財物を強取したものではない」と主張。

これに対しても検察は、「弱そうなヤクザだからからかってやろうと思った」という被害者の少年達の供述を取り付けており、最高裁判例の「社会通念による」という判示を持ち出して、必ずしも、自由を奪われたかどうか、脅されて畏怖したかどうかの証明は必要としない、ヤクザというだけで畏怖し、反抗の気力と、逃げる自由を奪われる、しかも暴行まで受けているのだから、強盗罪の要件は充分満たす、という主張。

「で、どうなの？ 勝ち田はあるの？」あらましを聞いて、光子が訊ねた。

「今のところ劣勢だわ。少年達の証言を翻させるか、ほかの証言者を見つけるか——それでもやはり、小刀が出て来ないことには難しいでしょうね」

「だって、指定暴力団にも指定してもらえない、仲間内でハバを利かせるためにだけ突っ張つてるような、たった一五人しかいない弱

小組織だよ。今時の不良の方がよっぽどヤクザだよ」

「テキヤというだけでそう思うのが社会的通念なのよ」

「目撃証言は何とかならないの?」

「そうなのよ。崩すとしたら、そこからだわ。小刀の方は警察の人海戦術で見つからなかつたんだから、たつた二人で探し出すのは……」

「ね。もう一年以上も前のことだし」

車は臼坂トンネルに入った。暫らく一人は前を向いて黙った。

長いトンネルを抜け、明るくなつた所で光子がいった。

「大勢だから見えなくて、一人ふたりだから見えるってこともあるんじゃない」

どこまでも自分の都合のいいように考える、能天気なアスリートの光子の向こうに、根岸ともみはある人物を思い描いた。

「だって、世間はテキヤはヤクザだと見るけど、あたしなんかタツをそういう目で見たこと一度もないもん。少年達だって、きっとそうだよ。だからいたずらしたんだ」

「だといいけどね」根岸ともみの心はよそへ行っていた。

臼木市には一一時前着いた。

なので、天気もよかつたし、今橋口から城址公園に車を乗り入れて、お昼までのひと時をぶらつくことにした。

多目的広場では着膨れた年寄りがゲートボールをしていた。花金なので若いカップルの姿がそこそこに見られたし、観光客がそぞろ歩いていたり、家族連れも桜の木がまばらに生えた芝生で子供らを遊ばせていたりしている。

そこへ現れたスタイルのいい背の高い一人の女は、それらの人々の目を引かずにおかなかつた。

栗色の髪が面長で端整な顔を流麗に縁取り、黒いウールのハイネックが覗いたダークスース姿の根岸ともみは、とても三十九歳には見えなかつた。黒っぽく踵の低いパンプスを履き、襟に金色の弁護士バッヂが光つているのを除けば、今日は黒ずくめ衣装で決めている。そのまま結婚式場の係員にもなれるし、葬儀場にも行ける。

片や光子の方は、若くはちきれんばかりの上体をラベンダー色のTシャツと青いジージャンで包み 着は出したまま、やはりはしきれんばかりの下半身をリーバイスが女の子らしい曲線を描いている。靴は赤い線が二本入った白いスニーカー。

圧巻なのは肩パットを入れていてるようなたくましい肩と二の腕、そのわりには小振りの丸く形のいい頭と一頭に筋肉は付かない一凛々しい顔が、その上に置かれたように乗っている。髪は後ろで一纏めにして緑色のゴムで縛っている。

光子は幼い頃のように根岸ともみの腕を取り、ぶら下がるようにして歩いた。背丈はもう同じくらいになつていて、若干光子の方が高いくらいだ。それでも気持ちは前のままだから、頭を根岸の肩に乗せて、抱えた根岸の腕をぶらぶら揺すつて歩く。

無遠慮に一人の顔を覗くように見て通る者がいた。振り返つて見

るカップルもいた。

二人は空濠の方へ歩いて行つた。桜祭りの際には左手に桜が咲き誇り、両側に屋台店が軒を連ねていた筈である。

濠端に来て、「あそこ。村上タツオの屋台があつたのは」と根岸ともみがいった。銀杏の大木が一本生えている辺りを指している。「ふうん」といいながら光子は、それなら人の流れからすると、本通りから外れているなと思った。光子は中学卒業の時と、高校生になつてからも一回、友達と桜祭りに来たことがある。

その時の様子では、古橋口から大門櫓おおもやぐらを通つて来る、または行く客の流れは狭いこともあって、少なかつた。ショバ割りで貧乏クジを引いたことになる。ショバ割りを仕切る地元の親分がしつかりしてないと、それでよく悶着が起きるのだと、松吉がいついていた。

二人はそれから両側に空濠を見て本丸に向かつた。といっても、本丸らしき形跡はどこにもなく、草が生えた中に桜の木がまばらに植えられているだけ。

亀首櫓じゅくばながあつたという突端は断崖になつていて、そこからの景色は絶景だつた。臼杵湾いづなわが一望できる。

残念なことに、かつて潮干狩で賑わつた崖下の海は広大に埋め立てられて——岸壁はフェリー乗り場や、船付場になつていて、埋め立て地には市役所や、消防署や、警察署など官公庁の建物が寄り集まつてゐる、民間の建物や家屋も密集していて——臼杵城が丹生島という島に構築された島城であつた昔の面影は微塵もない。

根岸ともみは初めて見る景色でもなかつたが、海風に髪をなびかせながら、その絶景に見入つていた。

左右に出入りの激しい海岸線があり、湾の中央にお碗を伏せたような津久見島がポツカリ浮かび、その向こうにも一つ、光子の知らない名前の島があつた。

「あそこに見える」光子は左手の海岸線の出っ張りの向こうを指して、「あれが若林水軍の海賊城だつた黒島、そしてその先っぽに見える小っちゃな島、三ツ子島のうちの一つだと思うんだけど、あの

辺りにほら、ウイリアム・アダムスのオランダ船「リーフテ号」が座礁してね。日本に初めてオランダ人が上陸したんだ

光子は大分弁と福岡弁と標準語を使いわけるマルチリングガルである、根岸ともみと話す時だけ標準語になる。

「ウイリアム・アダムスつて、みつゅあんじん三浦按針のこと？」

「そう！　さつすが、あつたまい！」

「でも、そうだった？　豊後国というのは間違いないけど。ここだつた？」　ウイリアム・アダムスはイギリス人なのよね」

「知りらない。でも大友宗麟公が大砲をもらつてるんだから、ここに間違いないよ。その大砲飾つてあるから、あとで見に行こ」

その「国崩」と命名された日本初の大砲「佛狼機砲」のレプリカ本物は靖国神社に展示してあるといふこと、大友宗麟公のレ

リーフを見てから、根岸ともみが感動したのは同じ作者による銅像「廢墟」の方だった、そしてそれらはもう前に一度見学済みであった、臼杵トキワ三階のレストランで食事をした。

二人ともカニピラフ。育ち盛りの光子だけそれにハンバーグを追加した。根岸ともみは食後にコーヒーを飲みながら、光子の旺盛な食欲を見入っていた。

「タバコ、やんないの？」光子が顔を上げて訊く。

根岸は、今日はまだ一本も吸つてなかつた。少なくとも光子の前では。

「ここ、禁煙みたい」

そういうえば、他の客は誰も吸つてない。入り口に「店内禁煙」の札が下がつていたのだ。

ロングピースを咥えて、ボーと立つてゐる根岸ともみの姿は、魂がどつかに行つてゐみたいで、でも、何んて、二ビルで、カツコイんだろうと、光子はよく思う。

それで、中一の時にこつそり父親の部屋からタバコを盗み出して、鏡の前で真似して吸つてみたことがある。でも様にならなかつた。やはりオリーブ色の肌をして、美人で面長で、ちょっと男っぽく、

外人のように彫りが深い顔でないと、浅黒く日焼けした肌の丸まつちい顔では様にならない。だから、タバコは大人になつてからも吸おうとも思わない。

「どうしたの？」根岸が訊いた。

今度は光子の方が根岸を見つめていたようだ。「ううん。何でもない」

時期によつて、根岸ともみの様子ががらりと變ることには、もう慣れている。戸惑うことはない。けどやはり見つめてしまう。

（……今はオスカルモードだ）

顔つきがそつだし、柑橘系のコロンと、アフターセイブローションの匂いがする。そういう時だけタバコを吸うのだ。

前に続く

食事を済ませると、二人は事件現場に向かった。

事件現場は城南地区港町、一の丸の城壁に、一列になつてへばりつくように建ち並んだ民家のうちの一軒の敷地内だった。

城壁といつても、崩落防止用コンクリ壁であるが、ちょうど多目的広場の南側、樹齢一四〇年といわれる、約三〇メートル高のモミの木が一本生えている斜面の下辺りである。

今度は根岸ともみが案内役になつて、検察から開示された証拠を検証しながら、ドモリのタツが少年らを追い駆けた通りの道順を辿ることにした。

車はトキワの駐車場に置いたまま歩いて向かつた。古橋を渡つて急石段を息を切らしながら上り、大門櫓の城門を潜り抜けて一の丸へ出た。大砲やらがある脇の小道から城壁の上へと出て、大人三人掛けでも抱きとめられないような一本のモミの木を見上げながら――そこからはしかし事件現場は見えなかつた――光子が自慢気にいつた。

「六年前のクリスマスにはね。この一本のモミの木にイルミネーションを飾り付けてね。三〇メートルの高さの、日本一高いクリスマスツリーが夜空に輝いたんだよ。友達と見に来たんだ」

確かに、日本一という認定書が案内盤に記されてある。超有名ミニージシャンの肝いりだと根岸も承知していた。

「あそこが、ほら、グローブのケイコの実家の料亭『山田屋』と光子が指差した。

港町商店街の中程を指しているけど、見えるわけではない。そこから「両親はどんなに誇らしく夜空に輝くツリーを見上げたことだろ?」。根岸ともみは今ようやくタバコを取り出して口に咥えた。ぽつてりした小振りの光子の唇と違つて、引き伸ばせばじこまでも伸びそうな薄い唇である。

煙を吐いて、目を冬枯れた山に向けた。暫らくボーと山々を見つめていた。左程高くもない里山である。一番高い鎮南山にしても五〇〇メートルもあるまい。根岸の国のアルプスの山々に比べれば、瘤のようなものだろうと、光子は思った。

根岸の魂が舞い戻つたようなので——根岸はタバコを靴先で踏み消した——二人はまたゆっくりと歩み始めた。そこからすぐのところに、ドモリのタツのタコ焼き屋台があつたのだ。そこにもモミの木と同じ位の太さの銀杏の大木が一本聳えていた。まだ黄色い落ち葉の絨毯に混じつて、黄色い果肉が所々に散らばっている。

そこから二人はタツになりきつて歩き始めた。広場では老人達のゲートボールに加えて、少年野球の少年達の嬌声もしている。野上八重子記念碑の前で年配の観光客五、六人が記念写真を撮っている。本丸に渡ると、右手に鉄門櫓跡の石垣があり、それに付随した小さな公園のような広場がある。それと茶店のような建物との間に右に折れる小道があつて、少年達三人はまずそこへ逃げ込んだようである。

そこを行くと、すぐに左手に卯寅稻荷神社うとのいなりじんじゃがあり、そこからは例の赤鳥居の林立となり、それは狭い急坂を——滑り止め簡易舗装されている——鋭角に折れ曲がりながら卯寅口うとのぐちの踊り場まで続いた。

そこの正面高くに卯寅口門脇櫓があり、その踊り場から一人だけ左に折れて井戸丸の方に逃げ下つた。あの二人はそのままそこからは階段になっている下つて港町方面に逃げた。タツはそつちを追いかけて。

階段を下り切つた所で、今度は、一人は狭い路地を左に税務署の裏手の方さへ逃げ、あと一人は反対に右に折れて逃げた。股裂きになつて躊躇したかどうか、しかしタツは右手に曲がつた少年の方を追いかけた。

両側に民家の塀が連なる狭い路地を一〇〇メートルばかり行つた所で、少年はとある民家の敷地内に逃げ込んだ。門扉のない、広い間口の屋敷で、家の玄関から右手は庭と菜園になつていて、左は駐

車場 縦並びなら三、四台は停められそうなコンクリート舗装の屋根付き駐車スペースが城壁まで続く一一になっていた。

隣の民家とは高さ九一センチの蒼生したブロック塀で仕切られている飛び越せない高さではない。建築ブロックを積み重ねた塀で、上部が小さな屋根のような形をしている。

少年はそこに追い詰められて、開き直ったのである。一〇〇円玉五個をばら撒いた。そして懷中の小刀、長さ一〇センチ余り、刃渡り一〇センチくらいの折り畳み式ナイフ、肥後守ひごのかみという刻印のある黒っぽい小刀を構えて向かって来た。「おっちゃん、やるんな」といつて。

そこで格闘になり、ナイフをもぎ取つて、タツは少年を殴りつけた一一というのが拘置場でのタツの言い分だった。根岸はともかく光子はそれを信じている。

それを、道を隔てた斜め向かい側の民家の老婆が、台所の窓から見かけて110番通報した。五分もかからず臼杵署からパトカーがサイレンを鳴らして駆けつけた一一時には、タツオは立つたままで、少年は口から血を流して倒れていたと、調書ではそうなつていて、根岸はいつた。

目撃者の老婆は「少年はナイフを持ってなかつた」と証言し、駆けつけた警官も、ナイフなどはどこにもなかつたといつてある。根岸と光子は、路地から事件現場を覗き込みながら、その様子を頭に思い描いた。

「少年の身体検査はしたの？」

「勿論、一人ともね」

「その通報者のおばあちゃんは？」

「このお家のおばあちゃん」と根岸が振り向いて指差した。

「今居るかなあ……」

「お話をもう聴いているけど、あとでもう一度お邪魔して聴いてみる? それで気が済むのなら」

「うん」

再び現場の方を向いて、少年が咄嗟にナイフを処分するとしたらどうするか考えた。

考えながら光子はそれを確認するよつこ口に出していく。「まず、床の下が考えられるよね。それから……駐車場の屋根が途切れたところからあ……」駐車場の屋根は半透明のビニールトタンで、城壁から三、四メートル位までしかなかつた。「城壁の上までは無理だから、駐車場の屋根の上か、母屋の屋根に投げ捨てる?」「うん」そんなことは根岸も考えたことである。警察も当然捜索した筈。

「それから……一番ありそうなのはお隣の敷地に投げ捨てた」誰もが考えたことである。「お隣の屋根つて随分傷んでるじゃない。瓦は曲がりくねつてるし、苔も草も生えてる」

「そうね。黒っぽいナイフなら見えにくいわね。でも警察もそれくらいはわかるから、念入りに調べてると思つけど」

「屋根を越えたってことも考えられるんじゃない?」

隣の家は平屋だった。勿論、可能だ。

「その向こうにはコンクリート舗装の駐車場になつてゐるよ」「何だ、それならすぐ見つかるか……」光子はくるりとまた向きを変えた。

路地を隔てた向かい側の家並みを見た。投げて届かない距離ではないけど、あまり大きな動作だとタツに気付かれていた筈である。下手投げ程度の動作なら、パトカーに気を取られている隙に、ひょいと投げられる。そうなると向かい側にまでは届くまい。

「うーん。それくらいかなあ……考えられるのは。庭木に引っ掛かつてゐる——つてこともないか」

光子探偵は腕を組んで考え込んだ。人が変われば視点も変るからあるいは——と期待したけど、やはりどうしようもないかと根岸はモミの木を見上げた。求刑から一割落ちが相場だから、五年と半年、よくて五年の実刑は免れまい。

「これじゃあ、タツでなくとも、申し開きできないよねえ……」

「取調べ現場というのは、よほどしつかりした者でも持ち堪えられないほど、厳しい所なのよ。いつさいから隔離されて、国家権力と個人が向き合うのだからね。だからアメリカなんかだと、弁護士が傍についていて、不利なことは喋らなくていいと、いえるんだけど」「ほかに田撃者は？　この家とお隣の家にはその時誰も居なかつたの？」

「運悪くね」

見たとこ、家主に断つて中に入れてもうまでもなく——家主は留守のようだつた。

「警察の捜索は万全だつたのかなあ……」

「と思つけど」

不思議そうな顔をして根岸ともみは光子を見た。「まだ村上タツオの言い分を真に受けてるの？」と、その顔はいつていた。弁護人からは口が裂けてもいえないことだけど、犯罪者というのは自分の都合のいいようにいい繕つものである　といふか、そう思い込んでしまつている者もいる。

それがわかつていってもなお、依頼人の最大限の利益を確保しようとするのが弁護人の務めである。根岸ともみは村上タツオの言い分を丸々信じているわけではない。

法廷は必ずしも真実を明らかにする場ではない、両者の言い分に合理的な線引きをする場である。真実なんてものは藪の中、当事者以外には、神にしかわからない。従つて、ヘビのような頭をした力メや、カメのような尻尾をしたヘビがうようよ存在する。中には、「——よつて、おまえはヘビだ！」と宣告され、途方に暮れるカメもいる。

だけど、光子は一点の曇りもなく、芯からタツオの言い分を信じている風である。そこが根岸にはわからない。純真過ぎる。もう少女ともいい難い、二十歳前の女の子にしては。

やはり、同族のゆえだろうかと思った。部落民と差別され、虐げられて来た一族の、血の結束は固い。

熊谷といつ表札のある田舎者の家の呼び鈴を押してみたが、応答はなかった。留守のようだ。

なので、納得しない光子にせがまれて、警察署に歩いて向かう。

その六 田杵警察署

「あんたどう、 ゆうそげんじゅうへ、 今頃になつち、 ゆうひ来るなえ」「ドン口のように色黒で大きい口をした警察官は田を剥いていった。

「抜かりあるもんかえ」

声も太いし、 体もデカイ。 そつやつて威嚇するよつに田を剥ぐのが癖になつてゐるのだろう、 サルなら歯を剥き出すだけ、 歯並びは悪そうだ。

「初めからそげなもなあなかつたんじや。 ヤー公の、 すもつくれんいいごち、 そういつまつてん、 へつりうひ、 おりむかえ」

「隣ん家も調べた?」 光子はさらに訊いた。

「ああ、 隣ん家も。 屋根も。 庭もじや」

「樋も?」

「トイ? ああ、 雨樋か。 …… 雨樋もじや」

マッチ箱を横にしたような三階建ての警察署だった。 人口四万五千余りの街にしてはこじんまりした警察署の、 免許証の手続きなどをする交通係りの待合室のこと。

かつての係官は、 今は交通係の主任をしていたが、 胡麻塩頭の初老の巡査部長は、 つるさそうに濁声でそういつた。

こいつを法廷に引つ張り出してきゅうきゅうに締め上げてやればいいのに、 という目で見る光子をよそに、「田撃者のじ老人には、少年が刃物を持っていたかどうか訊ねたのですか? それとも向こうから?」と根岸ともみは訊いた。

「そりやあ、 あんた、 こっちが訊かんで、 誰が訊くんかえ」

「そうしたら何んて、 答えたのかしら」

巡査部長は少し考えてからいつた。「そらあんた、 持つてねえもなあ、 持つてねえち、 いうがええ」

「あのおさあ」 光子が口を差し挟んだ。「もしタツガーアーいんね、 村上タツオがいうようにだよ、 少年が刃物を持ってたとしたら、 訊か

れる前に——いんね、一一〇番通報する時に、刃物を持ち暴れる！ とか、ケンカしよる！ か、いつよねえ、普通は——

「おお！ そうじや！ そうじや。ねえちやんこいことうじや ねえか。そん通りじや。緊急性をアピールする為に、せつとわうこう箒じや。じやけん、持つてなかつたちゅうことになる」

巡査部長は勝ち誇ったように根岸弁護士を見た。口から太い歯を覗かせて。

「ということは、よう見えんかったちゅうことじやないん。そん時の天気はどうなん？」

「何？ 天気？ 天気はおまえ……曇つちよたわい。ちゅうか、黒雲が山ん方からせり出しち来ち、薄暗れえくらいじやつた。グワリグワリグワリッ！ か、鎮南山ん上じ、ゴロンゴロン様が鳴りよつたけん、雨にならにやいいがち、思つたことじや」

「ああ……やつぱり」

「何がやつぱりじや？」

「じやけん、見えんかつた。暗くて見えんかつただけつたい！」

根岸ともみはくすくす笑い、「肥後守というナイフはどういうナイフですか？ ビニに行けば、手に入れられるでしょうか？」と訊いた。

「そんなもん今頃あるかいや。そら、わしらが子供ん頃んもんじや。男っ子ん、必須アイテムじやつた。それじ、木の枝を切つたり削つたり、女竹を切つたり削いだりしち、紙鉄砲やら水鉄砲やらを拵えたもんじや、鳥籠用んビゴをこいだりしたもんじや。

「うにことかいち、あいつが生まれる何十年も前ん、レトロな小刀を持ち出すとせ、すもつくれんやつちや」

「じやけんなおさり、真実味があるんと違うん？ その少年のおじいちゃんかおばあちゃんに訊いてみたん？ 不良仲間や、学校の生徒にも訊いてみたん？」

「何んじやこいつは——という顔で、巡査部長は光子を睨みつけた。しかしその為には仰ぎ見らねばならなかつた。立派なガタイはして

いても、背丈は一六〇センチそこそこしかなかつたからだ。

根岸ともみは光子の腕を取つて、巡査部長に会釈し、あわてて署を出た。

「うふふふ、光子つたり。でも、田の付どひは間違つてないわ。自分でやつてみなさい。わたしは悪いけど、一つの案件にばかり、かかりつきりというわけにはいかないのよ」

それはわかる。刑事は儲からないとママがよくいぼしていた。民事はお金にものをいわせて勝訴しようとする金持ちが多いけど、刑事案件を起こすような連中はお金に困っている者が多いから、下手すれば赤を打つこともあるし、その上弁護料を踏み倒されることもあるという。

まして、クライアントは弱小組織の天門屋一家。義理で受けたような仕事である。博多の竜子伯母ちゃんは口つるさこけど、ケチじやない、気前はいい——けど、ない袖は振れない。

（成功報酬なんてあるのかなあ……）

「まかしといで!」光子は元氣よく胸を叩いた。

その七 一度目は日曜日とした。その方が事件現場のお宅や、お隣さんも在宅だらうから、話が聽けると思つたからである。

一人で行くつもりだったのが、余計な者がついて来た。事務員のトシちゃんである。三〇歳のトシちゃんはまだ独身で、でも少しも焦つている様子はない。せつかくのお休みの日なのに、のこのこついて来るぐらいだから、お付き合いしている人はいなかもと光子は思う。

まだ学生気分が抜けないようなところがあり、見た目もそう一今はグリーンのカシミアセーターにインジゴブルーの冬用ジーンズ、その上に赤い襟のブルゾンを羽織つている。色はネイビー。舌足らずな、可愛い子ブリッコ。その甘え声を聞くと、松田聖子といつしょくたに（一緒に）絞め落としたくなる。

あまり好きではないけれど、子供の頃よくお菓子をくれたので、なついてはいた。

今回は光子の方がシックな出で立ち。何しろ「根岸ともみ法律事務所・助手」という肩書きの入った名刺を携えて、事務所を代表して事件調査に赴くのだ、国家警察を向こうに回して。

だからそれなりの衣装を調えた というかいただき物である。

ダークグレーのパンツスーツに黒革靴姿。白いシャツの襟は出している。肩パットは入れてないのに、マイケルジャクソンのように肩が張つて見える。どことなく、衣装に着られた感ありだが、タップがあり、足が長いので、颯爽としていて、何より初々しい。それと、髪はひつ詰め、後ろでバレッタで止めている。

高校卒業祝いにもらったそれらを、ようやく身に付ける時が来たのである。シャツは男物、ベルトや金色のバックルも女物とはいひ難いほど太目だし、本皮の靴も先がスクエアになつていて踵は低い、二七センチサイズともなるとほとんど男物 それが内股を開

くようにして、柔道やつてるから仕方ない、ズボンの裾をはためかせて歩くのだから、ヤクザも真っ青。

「ねえねえ、光子ちゃんたらあ、何だか恐い筋のお兄さんみたい。

——でも、素敵。カッコイイ！」

東トシ子には受けたけど、母親の遼子は顔をしかめて「お義姉さんたら！」といって舌打ちした。光子はまんざらでもなかつた。女子高の運動会では、学ランを着て勇壮に空手踊りをしたものだ。男物を着ると身が引き締まつた。

そんな二人は、にぎやかにグローブやアミの曲を歌いながら臼杵に向かつた。

途中、トシ子の実家がある佐賀関に寄つたので、随分大回りになつた。けど、雄大な佐賀関精錬所の煙突や、豊予海峡を左手に眺めながらの、曲がりくねつた、景色のいい海岸線を走るのは爽快な気分だつた。

ひなびた漁港の風景というのは何処も同じ。とある漁港の岸壁に車を停めて、小休止。海辺に佇み、思わず知れず前屈みになつていた姿勢を伸ばして、腕も広げて、潮風をいっぱい吸い込んだ。冷たい空気が口の中に舞い込む。

「関アジ・関サバつていつてもさあ、臼杵湾で惰眠を貪つてたぶよぶよのが、サメに追われて関まで逃げて来て網にかかつた途端に、ブランド品のレッテルを貼られて、値段が何割も跳ね上がっちゃうんだから、いい加減だよね」

「そんなこと関でいつたら、殺されちゃうわよ。伯母ちゃんにもらつた弁当食べたらわかるから。海峡の急流にもまれた、肉が引き締まつてて、歯ごたえがあつて、ほかとは全然違うんだから」

「確かに大分のお刺身は美味しいよね。東京の冷凍マグロなんか、今なら食べられないよ」

光子は幼い時分東京にも住んでいたのだ。

「光子ちゃん、幾つまで東京にいたんだつけ」

「小学一年 一年だつたかな?」

「ふ~ん」

光子は田を細め、海を見るとはなしに見て、暫らく物思いに耽つた。その間上の空で、トシ子が話しかけたことには空返事をしていた。

「 もう! 聞いてるの?」

トシ子が苛声じらうじやくを出したので、我に返る。「 え? 何が?」「 根岸先生とおんな同じね。時々魂たまがどつかに行つちやうんだから。もう、いい!」

トシ子がふくれたので、何となく氣きまずくなつて車に戻り、発進させれる。

「誰かが結婚するつて? そうじつた?」

「誰かじやなくて、あたしよ!」

「えつ? トシちゃんにそんな人いたの?」

「失礼ね。いるわよ、一人やふたり」

「そなんだ。で、いつ?」

「だから迷つてるのよ。もう三十一でしょ。司法試験もあるし「迷うことないんじやないの。結婚けつこんしちやえれば」

「うんもう一 他人事だと思つて。人生が決まつちやうのよ。自分が、自分だけのものじゃなくなるのよ」

「どういう意味、それ?」

「光子ちゃんはどうなの? 彼氏かれしいるの?」

「いない」

そこで二人はそれぞれの思いに耽つた。

事件現場には九時半に着いた。その辺りは道が狭いので、車は城址公園の——公園内に決まつた駐車場はない——ドモリのタツの屋台があつた辺りに停めて、歩いて来た。途中の急坂・急階段ではハイヒールのトシ子が何度も転びそうになり——（だいたいジーンズにハイヒールなんておかしいわよ）と光子は思う——黄色い声を上げて、光子に取り縋つた。——ミリでも背を高く見せたいというのが低い者の心理。光子にはわからない悩みだった。

事件現場となつた吉岡邸では、日曜日とあつて初老の「」夫婦が庭先の菜園で、何やら土いじりをしていた。大根や白菜などが植わっている。茄子の茎は秋茄子の収穫を終えて剪定されていた。家の前の路地では小さい子供らがボール遊びをしている。

「あのう、すみません」と光子がブロック塀の所から家主夫婦に声をかけた。

メガネをかけた亭主が怪訝な顔を上げた。

「何んですか？」といつて、首に掛けたタオルで口の辺りを拭いながらやって来た。

塀はあつても門扉がない開放的な玄関前の庭の方に向かつたので、光子らも回り込む。

「こういう者です。少しお話を伺いたいのですが……」初々しい手つきで光子が名刺を差し出した。

当家の主、吉岡貞三は名刺と一緒に等分に見てから、「ああ、あん時んことですか。まだ何か？」と怪訝な顔をした。

「ええ、そうです。あの事件のことを」

「あんときや、家内も私も留守しちょりましてな。何も話すこととはないけどな」

「翌日に警察が小刀を捜索しに来たと思つんんですけど、その時はどなたか立ち会われたのでしょうか？」

「ええ、ええ、それは私が立会いましたよ」

「その時の様子はどうでした?」トシ子がメモ帳を取り出してメモを取る構えを見せた。「何人位の捜査員が来たんでしょうか?」

「四人じゃつたね。青い服着たのが三人、私服が一人じゃつたかな?」

「四人? たつたの四人ですかあ」と、トシ子が素つ頓狂な声を上げた。

「で、どういつた所を?」

「まあ、その辺をつぐじり回しよつたですがねえ……」

「床の下なんかも?」

「ええ、長い懐中電灯で覗き込みよつたですよ」。

「屋根へは上がつて?」

「いやいや、脚立でね。駐車場ん屋根は脚立を組んでね。母屋ん屋根は脚立を伸ばして。二階ん屋根には及ばんかつたですけん、ほれ、あん梯子を貸してやつたんですよ」駐車場の側面に長い木製の梯子が掛けられている。「屋根に上がるちゅうんで、私が断つた。雨漏りん原因になるけんちゅうて」

「それじゃあ、屋根には上がらなかつたんですか……!。雨樋なんかはどうでした?」

「覗きよつたみたいですよ」

光子は「ちよつといいでですか」といつて駐車場の方へ入り込んだ。吉岡貞三もついて来て、「ヤクザのゆうことを、あんた方、信じちよるですか?」といつ。依頼人はヤクザじやありません。テキヤです。依頼人がいつには、少年がナイフを向けて来たそうですから、身を守る為にしかたなく応じただけで……わたしたちは、そのところを、とことん調べて、はつきりさせたいと思うのです

光子は茶色い雨樋を点検しながらいつ。縦樋は上から覗き込むよりほかない。覗いたところで途中に引っ掛けっていた場合、見えるかどうか。樋を外して調べたかどうか主人に聞いた。「これ、外し

て調べましたか？」

「いいやあ、上から覗いただけですよ。失礼じやけど、あんた、お幾つかね？」

「一九です」

「ふうむ。うちの聰子より一いつも下か……、しつかりしておいでのかようじやな。うん。よしー もつ一度心おきなく調べてみるかね。大工か左官なら、屋根に上がつてもらつても構わんよ」

「本当ですか！」

「いやなに、私もね、ケンカの両者とも、一面識あるんじやわね。夕口焼き屋さんは、孫に買つてやつた時にね。見かけは確かに好青年に見えた。けんど、ああいうのが実は怖いんじやと、思つたりしたけどどな。……そつかえ。

でん、高校生の方は、コンビニや駅に屯するたむらしまたつかん悪じや。公園の広場ん中をバイクで走り回るは、女ん子には片おないつ端から声をかけるは。この狭まい路地も、茶や黄色の髪をしたのが、何台も連ねち、ギヤンギヤンいわせち通りよる。おりおり、孫らを遊ばせられんもせんほびじやつた

その孫と思しき男児と女児をまとわり付かせて、奥方も傍に来ていた。

「そう願えれば助かります。それじゃあ、田を改めて大工さんを連れて来ますんで、その時は、どうかよろしくお願ひします」と光子は頭を下げた。

「見よ。いちごんもねえじやねえか。まだ一九と」と吉岡貞三が奥方にいつ。「聰子もこげえあつちくるればいいんじやけんど」奥方は小柄で上品な顔をしていた。田を細めて光子を見た。光子は照れて、「それじやあ」といつて立ち去つとした。

そこへ、隣の家の勝手口が開いて、七十年配の老婆が顔を出した。「おつ、ミサちゃん。ちょうどよかつた。ちょっと来ないき」吉岡貞三が声をかけて手招きした。「来ないぢや」

「何んな? 何事な?」と、つくも髪の老婆は手三毛猫をぶら下

げて塀の方にやつて來た。猫はまだ大人になりきれてないよつな子

猫で、後首を掴まれて心ならずもおとなしくぶら下がつている。「

こん奴がどつかこつかから入り込んじ来ち、悪さをするんじや」

老婆は猫を庭に放り投げた。猫はネズミ花火のように走り去つた。

「ミサちゃん、ほれ、去年のヤクザ者んのケンカーーあ、いや、タ

「焼き屋さんと、高校生の悪ガキとの」

「おうおう、あれか、あれがどげえかしたかや?」

「あん時んこつう今、弁護士事務所ん氏が調べに来ちよるんじや。警察はあんたんとこも調べたなえ」

「ああ、小刀じゅう。ヤー公のこつちやけど、一応、捜索させちくれんね、ちゅうて、庭やら屋根やら見回しつた」

「もう一回、調べさせて欲しいちゅうんじやけんど、あんたん方、どげえかええ?」

老婆は光子らを皺んだ顔で見た。光子は名刺を出して渡した。「あ

とでお宅にもお伺いしようと思つてました」

「こん、ねえちゃん達がかやーー?」

「いんね。大工を連れち来るちゅうけん、屋根を傷める心配はねえんじや」

老婆の家は平屋だつた。江戸時代から建つていたのではないかと思われるくらい古色蒼然としていた。屋根瓦は不揃いに歪んでいたり、はみ出していたりして、所々に草が生えている。

「そら構わんが」と老婆はいつた。

「有り難う」やこます」といつて光子は頭を下げた。

「おい」と吉岡貞二は奥方に向かつて声をかけた。「おケイちゃんを呼んじ来んか。今おるじゅうな

「おるけど、何しな?」

「いいけん、呼んで來い!」

上品な顔立ちの奥方は、いわれて路地の方に向かつた。孫一人も路地で遊ぶ子供らの所へ行つた。

奥方に呼ばれて來たのは、目撃者の熊谷ケイといつ、やはり七十

年配のメガネをかけた老婆だった。瘦せて腰が曲がっていて、意地が悪そうな顔をしていた。トリコットのバーシャツの上に綿入りの半纏を着ている。

「あんたどう、何事な？」

熊谷ケイはみんなを見回し、光子とトシ子に視線を戻して見つめた。

「ケイちゃん。おまえが証言したタコ焼き屋の兄ちゃんがな、論告求刑じや、懲役七年を求刑されたんちよ」吉岡貞三がいつた。「気の毒な」

「ヤクザじやけんしかたあるめえよ。代金を踏み倒しち逃げたガキんちょも悪いが」

「ところがそうじやねえちゅう話じや。実際そつは見えんかった。寅さんもテキヤじやけんじ、ヤクザじやあるめえ。わしらは考え違ひしちょつたんかも知れん。

おまえ、そこにあるメグミが、手に何を持つちゆるか、わかるか？」吉岡貞三は、路地で遊ぶ子供の方を向いていつた。

みんながそつちを向く。青色のボールを小脇にした小学三、四年生位の男の子と、一、二年生位の女の子が一人、それに三輪車に乗つた男児と、その傍に女児が立つっていた。

メグミといふのはその女児のこと。三つ位か。さつきまで吉岡の奥方によつていた小さい方の孫娘。ベージュのセーターの袖口から覗いた手には、小さな裸の人形が握られている。

「何んちや、メグミが？……ありや何んかい？」熊谷ケイはメガネを持ち上げて目を細め、裸眼で見つめて、「何んも持つちよらせんわい。ありや指じや」といつた。

従姉弟の熊谷ケイが白内障の手術を受けたのは何十年も前のことで、それから徐々に視力が落ちてることを吉岡貞三は知っていた。光子とトシ子は顔を見合せた。一〇メートルと離れてないといふのに、髪も肌色の人形とはいえ、開いた口が塞がらなかつた。

何もかもが一時に片付いた。

おかげで昼前には城址公園東の突端、亀首櫓跡の所で、藤棚の下の石のベンチに腰掛けて弁当を開くことが出来た。日杵湾を眺めながらの、爽快な気分で弁当を食べる。

眼下の造船所ではまだ巨大クレーンが一基、小さいのが数基、警報音を発しながらわしなく腕を動かしている。一万トン級の船が二艘並んで建造中であった。

フェリー乗り場にはフェリーが接岸していた。広い岸壁には海洋科学高校の練習船と漁船がちらほら。

海は一人の心持を反映しているかのように、明るい色にキラキラ輝いている。

食堂・仕出屋・弁当屋を嘗むトシ子の伯母さんにもうつた「関サバどん弁当」は美味しかった。「リュウキュウ」という、新鮮なサバの切り身を、「ママとネギとニンニクが入った醤油汁に浸しておいたものを、ご飯の上にのせてある。惣菜もサバのテンプラに煮物などサバ尽くし。名物鳥天もえた豪勢な弁当であった。

「美味しいには美味しいけど、もう誰とも話しきれないじゃん」と光子がいつたほど、ニンニクが利いていた。

「ニンニクの焼いたの、食べたことある?」トシ子が訊いた。

「ない」

「これが美味しいんだよ。ほくほくして。でも、吐く息は勘弁して欲しい——って感じだけね。百年の恋も冷めちゃう」

光子は焦げ目のある炒ったギンナンは大好きだった。ギンナンの果肉も耐えられない臭いがする。植物もそれなりに子孫繁栄の為の防御をしているのだろう。

「どうか、そういう防衛をしているからこそ生き残り、種の保存がなされていると、ダーウィンならこうだろ。今ある生物はみな、

勝ち組なのだ くらいの知識は筋肉少女の光子にもあった、授業中はいつも居眠っていたけど 。

思いはドモリのタツに向かった。タツがウソをついているとは思えない。あのウサギのような目は——少なくとも自分にはウソをいわないという確信があった。

小刀が見つかればよいが、でなければ、タツは青春の一一番いい時期を、刑務所で過ごすことになる。そんなの可哀想だ。

「ねえ、ねえ、光子ちゃんたらあ」

「 何？」

「お好み焼き食べたばかり——と思える人とキスしたことあるのよね。無神経だと思わない？ ひと用くらい、気持ち悪さが消えなかつた。勿論その人とはそれっきりよ。光子ちゃんキスしたことある？」

「 ない」

(彼氏もいないのにどうやってキスするのよ) と光子は心の中で毒づいた。

その八 小刀捜索

国家警察は、ふんだんな予算と人海戦術で大搜索をして証拠物を押収するけど、弁護人はクライアントの財力に見合った搜索で、新証拠を見つけ出さなければならない。

初めからフェアではないのである。いつたん容疑をかけられたら最後、99・98パーセントの有罪率のベルトコンベアーに乗せられて、手際よく壇の中まで運ばれる。その手際よさで、警察官も検察官も裁判官も評価されるのだ。

光子の搜索要請に対し、ボス弁は腕組をして歩き回っていたが、ふいに受話器を取り、ダイヤルを回した。先方に事の仔細を告げ、大工か左官を雇うことになるけど、どうかと訊いた。

博多の竜子伯母の声が受話器から漏れ聞こえ、ボス弁は黙つて聞いていたが、「わかりました」といつて受話器を置いた。

明けて月曜日の朝早くに、一人の男が薄汚れた白い軽トラでやって来て、朝靄が這う上野ヶ丘の森の外れにある榊原家の門を叩いた。一人は鳥打帽を被つた中肉の背の低い男、もう一人は頭の薄い、中背で痩せた男だった。いずれも六十年配と見え、ともにグレーの作業服を着ていた。

エラの張つた鳥打帽が通称「大工のトメ」、その名の通り大工で、薄い頭とヤギ髪を生やしたヘチマ顔が「左官の太一」であった。

博多御所が差し向けた二人を出迎えたのは、彼らの大先輩であり、伯父であり、養父でもある赤峰松吉。「大工のトメ」と赤峰留よまるは松吉の甥子であり、「左官の太一」とこと、赤峰太一は、先代親分の城島竜太郎から預けられた養子であった。この時松吉には志津というれつきとした女房がいたので、それは仮初めの固めの盃ではなく、正式な養子縁組であった。太一は幼少のみぎり、相次いで両親を流行病で亡くしているのである。村上カメの遠縁にもあたるから、タ

ツオとも血の繋がりがある。

早速、松吉は遼子に二人を紹介した。遼子は、また変なのが増えた——という顔をした。そこへ、光子が現れて、母親に事情を説明したので、ひとまず納得はしたようだつた。

ともかく小刀の捜索は、大工のトメと左官の太一と光子、それに赤峰松吉を加えて、総勢四名で行われることになつた。員数だけでいえば臼杵署員と同数であるが、意氣込みはまるで違つ。

その日の午前九時から、吉岡夫婦と、田中ミサ立会いのもとで、捜索を開始した。寒冷前線の狭間だとかで、風があり、行き交う雲間から薄日が射す寒い日だつた。

一〇時になると、目撃者の熊谷ケイが、お茶とお茶菓子を持って様子見に現れた。

一五分間の休憩を挟んで行われた吉岡家の捜索はしかし空振りだつた。午前中に片付いた。腕組みをして見守る吉岡貞三を始めとする一同に、失望の色が漂つた。熊谷ケイはホッとしていた。

お昼を食べて行けというのを遠慮して——どうも吉岡貞三は光子に深い思い入れがあるようだ、アメリカに留学しているという娘に寄せる思いを、光子に向いているのだろう——気兼ねのないレストランにて昼食。例の臼杵トキワ三階のレストラン。

異様な雰囲気をした老人達に囲まれた若い女を、怪訝な目でウエイトレスらは見た。

しかし光子には何の違和感もない、初対面でも馴染安い老人達だつた。それぞれの体に掘り込まれた青い絵を見せられても、きっと驚きはしないだらう——もつとも、もはや色は薄れ、模様は皺んで、大蛇はしょぼくれたヘビのようになつてゐるけど。

光子には、川筋者と蔑まれ、部落民と差別されて、迫害されて来た一族の血が流れている。祖父　城島竜太郎は一族の柱であり、父　竜二は一族の誉めだつた。城島の家の子供は、男は若と呼ばれ、娘は姫と呼ばれて、かしづかれて來た。

ゆえに、「一族の弱か者んをば、守るとぞ」と、城島の血を引く者はその宿命を背負つている。

そういうことを、幼い時分から伯母の竜子に、懇々と言含められて育つた光子であった。その言靈は光子の血となつて流れている。「いやあ、ヒメも大きく立派になられたの?」

「ほんなごじつう、若を見るようじや」

孫を見るように田を細めて、トメと太一がいった。いうまでもなく、この場合の若とは、兄・竜平ではなく、父・竜一のことである。「ふおつ、ふおふおつ！」それだけ、おまえらの先が短こうなつたちゅうことじや」と、松吉がビールの泡がついた顔でいう。

「オジキにいわれたかないわい」とトメがグラスを振つていれば、「オヤジと違ごうて、わしらにやまだ」「三十年はゆうに先があるばつてん、これからが楽しみみたい」といつて太一がビールを呷る。「バカちん！ わしもなんだ、それぐらいは生きるわい」

「もう！ あんたらそんなに飲んだら、屋根に上がれんようになるよ」光子がたしなめた。

老人達はもう赤い顔をしている。今にも、——「月が~出た出た一月が~出た」とやりかねない手付きた。

午後からは隣家の田中ミサの家と庭の搜索。

これにはミサは勿論、庭いじりをしながらの吉岡夫婦に、近所の年寄り子供も加わって、ギャラリーは賑やかだつた。

ミサは後家の独り暮らしで、築六〇年という家は老朽化しており、方々で雨漏りがするというだけあって、屋根瓦の傷みは酷かつた。為に、急遽左官の太一は漆喰を練り、補修しながらの搜索となつた。樋もついでに新しいのと取り替えた。光子と松吉は排水溝や家の周り、植え込みの中などを搜索した。

午後三時には今度は吉岡婦人がお茶とお茶菓子を振舞つてくれたので、一五分間休憩した。

「何せ一年も前のことですからなあ……」と、吉岡貞二が見つから

なかつた時のショックを和らげるようによつた。

あと残るは反対側、向こう側の屋根と、屋敷内だつた。それより向こうはブロック塀を隔てて駐車場になつてゐる。大方そこいらまでが、下手投げで飛ぶ範囲だつた。上手投げでもそう大差はなかろうけど、そういう動作ならタツが気付く筈だつた。

光子はまだ諦めてはいなかつた。今までの所で見落とした部分はなかつたか、お茶をいただきながら見回した。鼻の頭と、産毛が生えている人中周辺に汗の玉を浮かべている。顔は火照つて赤らんでいた。

ぱつてりしたわりにはきゅつと締めた形のよい唇、テキヤの老人達は、そこに在りし日の、四のヒメの面影を見出していた。こんなに人を集めて、偏見も差別もなく、お茶菓子まで振舞つてくれる、持つて生まれたカリスマ性があるのだ。このヒメはきっと一族の柱になつてくれるに違ひない。

「さあ、やるばい」と太一が立ち、「おうさ」とトメも立つた。しかし、八時間かけた搜索は徒労に終わつた。結局、小刀は発見できなかつたのだ。夕闇が迫り、見物人達は去つて行つた。

光子らは後片付けをして、吉岡夫妻と田中ミサに礼を述べて、氣の毒そうな顔をした彼らに見送られて現場をあとにした。熊谷ケイは用事があるといつて四時前には姿を消していった。

家に帰り着いてからも光子はぼんやりしてゐた。

「残念だつたわね。一年も前のことだから、誰かに拾われたのかも知れないね」

遼子が慰めるようにいつた。「これで納得?」といわれた方が正直でいい、どうせ信じちゃいないんだからと、光子は返事もしなかつた。

夕食も早々に一階に駆け上がる。

蛍光灯も点けずに、ベットにひっくり返つて、そのまま爆睡した。遼子に搖り起こされるまで。

「 いけない！ もう朝？」

「 バカね。まだ夜の一〇時前よ。電話」

「 電話？」光子はケー・タイを捲した。「 ケー・タイどこだっけ？」

「 そこに放り投げてるじゃない」ケー・タイは枕とベットヘッドの間に挟まっている。「 家の電話よ」

「 家の電話？ 誰から？」

「 熊谷ケイつていう、おばあちゃん声だけだ」

「 ああ、そう。それなら知ってる」

光子はドタドタと駆け下りた。「 ちょっと階段壊さないでよ」といつで遼子も続く。

電話機は居間の窓側にある。息を弾ませて受話器を掴み取る。

「 お待たせしました。わたしです。根岸法律事務所の榎原光子です」

「 あんたな、熊谷じやけど……」

「 ああ、おばあちゃん。どうか、しましたか？」

「 いんね、小刀のことじやけどな」

「 ええ、残念ながら見つかりませんでした。」馳走になつたのに、お礼もいわないで

「 いんね、それがな、そんことじ、わし、ヒラソウズん兄弟氏ん孫にたんね 訊く 行つちよつたんじや。あん、ガキンちよと同じ学校に通つよる子が、マサルいつんじやけど、何か知らあせんか思うてな」

「 すみません、そんなことまで……」

「 それがあんた！ あんガキが肥後守を持つちよるんを見たゆうんよ。たまがつた（驚いた）がええ」

「 えー！ 本当ですか？」

「 ああ。それじ、それを見せびらかしち、下級生やら同級生やらを脅しち、小遣い銭を巻き上げよつたらし」

「 わあ！ ホントに？」

「 何？ 何て？」遼子が耳を寄せて來た。

「 わかりました！ それじゃあ、とにかく 明日また伺いますんで、

その時に詳しいことを教えてください

丁重にお礼をいって光子は受話器を置いた。

「だからいつたでしょ！ママなんか、信じてなかつたんだから！」

「小刀が見つかったの？」

「ううん、相手の高校生が、肥後守を持つてるとこを見た子が現れたらよ」

「そう」と遼子は意外にも冷静だつた。

「何よ、どうして喜ばないの？」光子は不満と/or/怒りに近い感情で母を見た。

「そういうのを、伝聞証拠といってね、残念だけど、証拠能力はないのよ。『伝聞証拠排除の原則』つてのがあって」と、水を注すようになつた。

文字通り光子は水を注されて喜色を失つた。

「でも勿論、その子が法廷に出て、直接裁判官の前でそう証言してくれれば、それはもう裁判官の心証をよくすることは確かだわ」遼子はとりなすようにいった。「根岸先生に電話してみなさい」

だがもう光子は焼いた餅のようにふくれ上がつていた。「知らぬい」といつて、二階に駆け上がつた。

そして、自分の部屋からケータイで根岸ともみに電話した。

けど、例の音声が素つ氣なく繋がらないことを告げた。

翌日、八時に出勤、東トシ子にトシ子は西中島の大分川土手沿いのアパートからチャリで通つて来る、昔、根岸ともみが住んでたアパートだ。七時半には来ていて掃除を始めている 訊いた。

「先生と連絡が取れないんだけど、どうしたのかなあ？」

トシ子は机を拭きながら、「そーお。じゃあ、また始まつたんだ」という。

「何が始まつたのよ？」

「月のもの」

「月のものーーって？」

「それが始まるとな、四、五日はエスケープして、居所が掴めなくなるんだよう」

「ふ〜ん」光子は生理かと思った。

そういうえば以前にもそういうことが何度かあったなど光子は思いつた。長い時は一週間も一〇日もある。その時は出張だらつと思っていた。別人のようになつて姿を見せることがあつた。

「きっと、何ともいえない香水の甘い匂いをさせて帰つて来るわよう。オスカルモードもいいけど、オハラモードも素敵、憧れちゃうトシ子は宝塚ファンのようだ。指を組み合わせた手を胸に当て、うつとりした顔をした。実際、トシ子は筋金入りのヅカファンであった。イイチコ・グランシアタで公演があつた時などは、まだ幼い光子を連れて、いの一番に駆けつけたものである。

「オスカル」というのは、池田理代子の漫画『ベルサイユの薔薇』の主人公で、男の子のように育てられた男装の麗人である。その人気漫画を舞台化した宝塚の『ベルバラ』は、一大ブームを巻き起こした。「オハラ」は勿論『風と共に去りぬ』のスカーレット・オハラ。これも宝塚劇団で公演されて人気を博した。

その主人公になぞらえてのトシ子の表現であるが、云い得て妙であつた。片や男装の麗人であり、もう一方は気性の激しい南部女で、やはり男役のトップスターが演じた。実際そのように、根岸ともみは、ガラツと人が變つたようになるのだ。

「ああ……あたしも、あたしも変身して、誰も知らない、どつかで、羽を、羽を思いつきり、伸ばしたいなあ」と、東トシ子はお祈りポーズで、夢見るよろに虚空を見つめて頭を振る。

(アホか!)と思つてゐると、「ねえねえ、光子ちゃん、そう思わない?」とキラキラした目でいう。

「思わない」と光子は井戸の水をかけるようにいって「それじゃあ、先生がお帰りになるまで、どうすればいいのよ。勝手に思うまま仕事していいの?」と訊いた。

「勿論、その間のボスはあたし。決済はあたしに仰ぎなさい!」ト

シ子は急に立ち上がり、真顔になつて、両手を腰に当て、胸を反らした。

光子は吹き出しそうになつた。「んじゃあ、チーボス。少年が肥後守を持つていろいろを見たという者が現れたんだけど、どうします?」

「えつ? ホントに? 誰なの、それ?」

「同じ高校の生徒。目撃者のおばあちゃんが見つけて来ててくれたの。責任を感じたんだね」

「ふうん。そうなの。……光子ちゃんで、何だか不思議。徳人なんか……。普通そんなことまでしてくれないよう。慣れ親しくもない者にお昼食べてけともいわないし、お茶やお茶菓子まで。あんなボロボロの屋根にも上がらせてもらえたし……」

「あの辺の人は人情が厚いんだよ」

「それだけとも思えないな。警察でさえ屋根には上がらせてもらえないなかつたんだから。それで、今日にもその証言者に会つつもり?」

「そ。よかつたら、今から電話しようかと思つて」

「うーん。でも相手は未成年だからね。まず親の了解を取らないと。学校は卒業しちゃつてるの?」

「ううん。今三年生」

ケンカ相手の少年らはもう卒業していた。ところが一学年下ということになる。

「そつかあ。法廷で証言してくれるといいんだけど……」

「証言してもらつても、決め手にはならないって、ホント?」

「そう。物証がないとね。だって、頼めば偽証だってできるでしょう。偽証かどうかなんて判断は難しいし。でも何もないよりはね。最終弁論が迫つてゐるしい」

光子は熊谷ケイにケータイ電話で、電話した。ケイはすぐに出了た。

「あ、おばあちゃん。根岸法律事務所の榎原です。先程はどうも。これからお伺いしてもいいですかねえ。一時間くらいで行けますけ

ど。……はい。はい、わかりました」カチャリとケータイを閉じて、

光子はいつた。「待ってるから、おいでって」

「そう。じゃあそろしなさい。気をつけね」

「はい。チーボス！」

そこへ、事務員の遼子が出勤して來た。遼子は八時半出勤である。勿論自家用アルトで。光子は朝は足腰を鍛える為に、チャリで二十分かけて通っている というか車を持たない。

母娘はすれ違ひ様に、ちらりと目を合わせたけど、言葉を交わすことはなかつた。

熊谷ケイの計らいと取り成しで、親の了解を得て、高校の休み時間に、上田正也という高校生に会うことが出来た。

高校は三重町（現大野市）にあった。そこまで熊谷ケイを乗せて三〇分かけて行つた。

昼休み中の一〇分間程度の面会だつたけど、小刀の特徴 握りの部分に刃が収まる折り畳み式で、刃元に大きな刃こぼれがあつたことなどを話してくれた。坊ちゃん刈りの氣弱そうな上田正也は、ほかにも何人も見ている筈だともいつた。

しかし、裁判で証言するとなると——親にそう言い含められたのかどうか——仕返しを恐れて尻込みをした。

連中は高校を卒業してからも、O.B風を吹かせてちょくちょく学校にバイクを連ねてやつて来るし、臼杵や津久見に住んでいて、建設作業員やトビなどをしながら働いているといつ。

責任は感じてゐるようだつた。ほかの子らもきっとそうだらう。法廷で証言するのではなく、裁判官が個室で尋問するのだといっても、逃げるようになつて行く上田正也を、黙つて見送るしかなかつた。

光子は熊谷ケイを家まで送り届け、丁重に礼をいつてから、相手の少年らの家族に直接ぶつかつてみることにした。

その日のうちに、直接のケンカ相手の少年「板井健吾」の家をまづ最初に訪れた。民事の示談は済んでいた。軽度の傷 害だつたら、告訴しないということで事は収まつたと思ひきや、それでは警察の方が納得しなかつた。

母親と 彼は片親でほかに兄弟もいなかつた 祖父とが居て、この母、この祖父にしてこの子あり、と思わせる態度で、いきなり暴言を吐いた。

スズメの巣のような赤髪をした母親は「示談が済んだけんち、ま

た何か、因縁をつけに来たんか！」と喚き、祖父に至つては、「孫に妙ないい掛かりをつけると、許さんぞ！」と、袴纏の袖から太い腕をまくり出して見せた。肘の下まで、薄青い絵が描いてある。歳は幾つか知らないが、老人にしては頑健な体つきをしていた。顔も潮焼けか焼酎焼けかした厳つい顔である。

光子は知るよしもなかつたが、この家は津久見で名うての鼻つまみ者一家。家業は土建業で——といつても民間からは相手にされず、もつぱら小規模な公共工事　　水道局の水道工事や教育委員会が発する学校関係の營繕工事など　　が主体、「板井土建」が入札に参加すると、ほかはみな引いてしまうので、わが者顔でのさばつていた。

さりとて市当局も指名業者から外すこともできず　技術力がないので等級は低いから、大きい工事からは排除できても　何かあるとすぐに怒鳴り込んで来る厄介な、どこにでもいる始末が悪い、担当泣かせの業者であつた。

社長をしていた健吾の父親・大吾は四年前に病死、再び創業者の坪根　八十二歳　が現役復帰していたのである。

近所の住民や関係者は、「冗談ではなく、この一家が死に絶えるのを願つていた。知らないで隣の土地を買って家を建てた者がいて、一年と経たずにその家を安く叩き売つて越して行つた者もいる。それを買って次に入居した者も、色んな迷惑行為にいたたまれず出て行つて、現在その家は新築の空家となつてゐる　ばかりか、敷地の一部は板井土建の資材置き場にされていた。
ち
地の者は家屋敷を抱えて逃げ出すわけにもいかず、ひたすら我慢して坪根が死ぬのを待つているのだが、その願いも空しく、中学生になつたあたりから、孫の健吾が坪根のあとを継ぐように、傍若無人に振舞うようになつていた。

畢竟　ひつきょう、取り付く島もなく光子は追い払われたのである。

あとの二人の少年の家は留守だつた。世界の外といわれる山の中、西河野の「足立洋介」の家は、夫婦共稼ぎのサラリーマン家庭で、

両方ともいなかつた。泊ヶ内の「南幸太郎」の家には、夜間訪ねたけど、呆けた婆さんが一人留守番をしていて、「へえ、ただ今漁に出ております」といった。

臼を改めて何度も出直し、どうにか会うことができたものの、だけどいずれも不良の息子に手を焼いてる風で、厄介なことには係わりあいたくないのか、やはり取り付く島はなかつた。

最後にどうにか会うことができた南幸太郎の家族もそうだつた。

漁業組合で訊いて、ようやく漁から帰還したところを掴まして、父親に訊くも、「肥後守か、肥後守の小刀なら、ジイやんの代の遊び道具じや。「うちんジイはどうに死んじよる。ほかん氏に訊いてみなんしい」と、すげなく邪魔者扱いされた。母親は顔を振るだけ。口が不自由のようだつた。

一度に渡つて臼杵から海岸線をくねくね半島のどん詰まりまでやつて来たけど、空しく引き上げるしかなかつた。

そればかりか、帰る途中の坂の上で、くだんの三人組の不良少年らの待ち伏せにあうという、落ちまで付いた。

すぐ傍に白波を立てた津久見島を望める絶壁の上に車を停めると、帶電した雷雲のようにフラストレー・ショーンを極限まで溜めた光子は、道路を塞ぐようにバイクのクツワを並べた三人組の方へ、自らゆっくりと歩いて向かつた。

その九 初の勲章

板井健吾は細身の男だった。背も光子よりずっと低い。一六五センチもあるまい。ズズメの巣のような茶髪の具合が母親にそっくりクセ毛なのだろう、顔の造りもよく似ていて、名乗らずともすぐわかつた。顔はしかし今流行りのイケ面だった。レーサーのようなツナギを着て、ホンダのスクーターに跨つてニヤニヤしている。両側の足立洋介と南幸太郎はデブとノッポだった。足立はカーキ色の作業服に黄色いヘルメット姿で、巨体に似合わずスズキのチョイノリに被さるようにしてニヤついており、黒い革ジャンに黒革ズボン、黒革ブーツと黒ずくめの南は、カワサキの125ccから長い足を伸ばしていた。

板井健吾と南幸太郎は、藍色の丸いヘルメットは後ろにまわして、自慢の茶髪を海風になぶらせて、近づいて来る女にフエロモンを発していた。

族？　にしては、何ともお粗末なバイクではないか。そんなチシケなバイクを連ねて街中・狭い路地をギャンギャン練り歩く？
——アホか！

と独りごちながら光子は、同じ年の少年らの前に、堂々たる立ち姿で立つた。押しても引いてもびくともしないように、肩幅より少し足を開いて、二七センチの靴でしつかり大地を掴み、重心を地球の中心に据えている。

そして板井健吾を女豹のような目で睨み付けた。

いいか光子。見切り千両ぞ。位取りで負けたら、犬のように尻尾を巻け。勝つたら器量で押さえ込め。無用な争いはご法度、ご法度。

博多の竜子伯母の言い草だ。

(——何なんだ？　こいつは)

板井健吾はニヤついた顔をヤンキー顔に変じて、女相手にマジで

メンチを切つた。

そして、「おまえか！ 小刀が、どうたらこうたらいつて回りよるんは」と巻き舌で体を揺すりながらいつ。

「あんたが、板井健吾？」

「そうじゃあ。それがどうした」

「あんたらのおかげで、タコ焼き代金くらいで、村上タツオは懲役七年の実刑を受けるかも知れん。それでいいん？」

「自業自得じや」

「なら、何の真似？ 滅多に車が通らないからいつて、天下の公道。邪魔だから、どいて！」

そういうつて光子は踵を返した。

「待て！」

三人はバイクを降りて、バタバタ雁首を揃えた。ニヤつきながら、三人とも、松の針葉を掲げて見せた。

「さつき、クジ引きをしてな。ご覧の通り、足立の奴が一番クジを引いた。おまえ、なかなかハクイ女だな」といつて板井健吾は、一番長い針葉を持つて得意然としている、太つた作業服男を顎で示した。「こいつ、一週間も十日も風呂に入らん汚ねえやつちやで。おまえ、嫌ならバスしてもいいんだぜ」

「どういう意味？」

「へへへ……」黒焦げのサンマのような南幸太郎が、スマートな姿態をアピールするようにシナを作つて、「なに、これからあんたをマワシにかけるちゅうこいつちや。俺は毎日、朝シャンに夕風呂は欠かしたことないでえ」

「そんかし、インキンタムシ持ち」

足立が茶化して、三人とも下品に笑つた。掘り切りの上の小道に引っ張り込んで——という算段はできていたのだ。そうやって何人の女を毒牙にかけたことか。素性を知つて誰も告訴しないのをよいことに。

光子はもう我慢ならなかつた。

「あんたら」蔑むように二人を睨みつけて、「三人ともお断りだわ。ほかを当たつてくんない。あたし、面食いなの。雑魚を相手にする気ないから」

「何っ！ こいつーー」プライドを傷付けられた板井健吾が怒り狂つた。「足立！ やつちまえ！」

足立洋介がヅカ、ヅカやつて来て、光子の胸倉を掴む——か掴まないうちに、一〇〇キロを超す巨体が宙に跳ね、裏返しになつて、砂利で固められた地面に叩き付けられた。

あつという間の背負い投げだった。手を離していたら頭を打つて、大怪我をしていただろう。だけど、尻と腰は強か打つたので、転んだ馬のように立ち上がろうとするも、願念叶わず、もがいた。

その様子を呆気にとられて見ていた二人は、光子を驚きの目で見返した。

それでも男のメンツがあるので、ノッポの——といつても一七八センチある光子と同じ位の背丈にして瘦せつぼちの、南幸太郎が素手で向かつて来た。

無暗にパンチを繰り出しだが、紙一重でかわされ、右ヒジを掴まえられたのが運の尽き、すぐに左肩を掴まれて体勢を崩され、大外狩りで投げ飛ばされた。

もう見栄も外聞もない、非力な板井健吾は折り畳み式ナイフを取り出した。残念ながら肥後守ではない。南も素手では適わんとばかりに、バイクに仕込んであつた警棒のようなものを、四、五十センチくらいに引き伸ばして向かつて来た。

それに、遅ればせながら足立洋平も立ち上がり、ヘルメットをアゴヒモで振りまわしながら戦列に復帰した。

こうなると多勢に無勢、素手の光子に勝ち目はない。警棒で叩かれ、ヘルメットを打ちつけられて、ナイフでも腕に二、三箇所の防御傷を負い、腿にも一箇所、深い刺し傷を負つて遂に片膝をついて動けなくなつた。

あとはもう頭を防御するのが精一杯、殴る蹴るの暴行に任せること

か手はなく、ボコボコにされたのだった。

ようやく通りかかった車に助けられて、臼杵市街の病院まで運ばれて手当を受けた。それほどの深手を負つていながら一刺し傷は深さ三センチにも及んでいた——光子はけろりとしていた。診断書は書いて欲しいけど、警察沙汰にするつもりはないというので、「これはもう被害届云々のレベルじゃない。傷害事件だ」と医者は呆れていった。

しかし向こうも骨折その他の痛手を負つている筈、ケンカ両成敗だし、面倒臭いからといって、医者には納得してもらつた。医者が大袈裟にいうほどには痛みは感じず、痛みに鈍感な体质であることを、この時初めて光子は知つた。英雄気分の方が勝つっていたのである、一つ修羅場を潜つたことへの。

そして、やるからには情け容赦なくやらなければ、こうこうことになるのだと学習した。下手すれば命取りになるのだという教訓を得た。最初の一撃で再起不能にしておくべし。

以前正月によく博多の祖母の家で顔を合わせた、木之元というテキヤの親分は、右手の小指から中指までの三本がなかつた。それと左手の小指も。第二間接から先が綺麗にぶつ切りになつていて、それぞれそこに金銀の指輪を嵌めてあつた。

痛くないのかなあと思いながら恐々覗き見たものだけど、痛覚に鈍い者が実際いるんだなあと、寒感できた。祖父も体中傷痕だらけだつたというし、松つあんは片腕ごと切り落とされてるし、きっと自分も同じ種類の人間なのだろうと光子は思った。

しかし痛々しく包帯を巻いた姿を見せたくない。けどそういうわけにはいかなかつた。顔も体も内出血で黒ずんで、あるいは腫れ上がつていた。さいわい骨折はなかつたけど。骨太でもあつたのだ。

案の定、母・遼子は悲鳴のような声を上げた。大声で松吉を呼んだ。飛んで来た松吉も氣色ばんだ。

「ああ――……何といふことぢや―― ヒメ―― 誰にやられた

！ わしが付いて行かなかつたのは一生の不覚！」

「たいしたことないつて。 それより、根岸先生から連絡なかつ

た？」と光子は遼子に訊いた。

遼子は動転していいた気持ちをよしやく落ち着かせ、「……ないわ」と震える声をよしやく絞り出した。

「」飯にして―― といつて光子は一階に向かつた。

今回はさすがに、いつものように駆け上るというわけにはいかない。竜子伯母からの頂き物であるビジネススーツはズタボローのちにそれを見て城島竜子はうんうんと頷きながら目を細めたものである――明日から何を着てこつかなどと思ひながら、用心して階段を一步一步上つた。

日を置かず、宵のうちに榎原家に一人の訪問者があつた。

応対に出た遼子は、二人の風体にまず恐れをなした。が、手に菓子折りを提げていたので、謝罪に来たのだなど安堵した。いわすと知れた板井坪根と孫の健吾であつた。

二人を居間に通し、お茶を入れた。ナフタリンの臭いをブンブンさせたよれよれの背広姿の坪根が、仰々しく畳みに手を突き、頭を下げていった。

「この度は、家の孫が、仲間にそそのかされちかり、お嬢さまのお嬢さまに狼藉を働いたそうで、真に申し訳ありませんでした。この通りお詫び申し上げます」

「い、いえ」遼子は恐縮した。

「こりや！ ワレも、お詫びせんか！」と、後ろでやはり頭を下げている健吾を振り返って、坪根はドスを利かせた荒声で怒鳴った。

遼子はビクッとした。無理もない。孫を叱ると見せかけて、実は遼子に脅しをかけているのだ。ヤクザ者の常套手段である。

「すいませんでした」と健吾もしおらしく頭を下げて見せる。

坪根は身を起こして遼子を見据えた。

「これの連れがもう一人おつたんじゃけんど、一人ともお嬢さんに投げ飛ばされて——いや、お嬢さんが柔道の黒帯だとは知らなんだもん——ヒジや、尾？ 骨を骨折しておりますてな、ケンカ両成敗、謝る必要なんかない、などと勝手申しておるものだから、それらに代わつても、私からお詫び申します。許しちゃんない」

慄懾無礼に、そういうながら坪根は、遼子の体を舐めるように見て、左手で右手のヒジ下を搔いた。すると袖口からチラチラと青いイレズミが見えた。

遼子は「そ、それは」「寧に——」といふのがやつとだった。身を硬くして、目を伏せ、瞳を泳がせた。離れに明かりが点いている

から、松吉は居るのだろうけど、呼びに行くわけにもいかない。光子がないのはもつけのさいわいだった。

「まあ——こいつもこのように反省しておりますけん、許しちゃんない！ これも一人じゅ何んもできんのじゃけんど、悪い仲間があると、空元氣を出しよる」

謝つているのか、告訴したら承知しないぞ！ と脅しつけてるのかわからない。

そこへ——。

スーと障子が開いて、長身の着流しの老人が現れた。とび色の黄八丈である。

老人は、驚いて見上げる板井坪根と健吾を見もせずに、座卓の横にやつて来ると、パン！ と着物の前をさばいて、どっかりと胡坐を搔いて座つた。

そして、一度ばかり両腕を怒らすように張つて、武士が羽織をさばくような仕草をした。

それきり、背筋をピンと伸ばしたまま、肩を張つて膝に手を一片だけ 突き、坊さん頭の、赤嶺松吉は動かなくなつた。

この異様な雰囲気の老人の出現によつて、空氣はガラツと変わり、重たくなつて、意外にも、さつきまで厳つい顔でシオマネキのように肩を怒らせていた板井坪根は、度肝を抜かれたかのように、肩を落として、皺んだ目の中で、とび色の瞳を右往左往させた。

そこへ、追い討ちをかけるように、パツと松吉が上半身のもう肌を脱いだ。青い絵を見せる為ではない。素人を脅しつける為でもない、そこに刻まれた無数の斬り傷・突き傷・刀傷 田川の侠客の生き様を見せる為にある。

自分の為に負つた傷など一つもない。義の為、弱い者を守る為に負つた侠客の、「勲章」をとくと身よ！ 城島竜太郎親分に斬り落とされた——という右腕の先っぽを、振つて見せた。骨は肉に包まれてはいるが、斜斬りにされたままの、肩から五センチくらいしかない腕。

これは効いた。

小役人や素人衆を脅す為のチンケなイレズミをした板井坪根は、尻をすぼめて、「そ、それじゃあ、奥さま、ほかの者は口を改めて、謝罪に伺わせますけん、今日のところはこれで……」
といって、いざるよろに去つて行つた。

「ふおつ、ふおつふおつ！　ヘコカルイめが！」松吉は位取りに勝つて高笑い。この世界ではハッタリも必要なのだ。斬り合には高くつく。

確かに無数の傷跡は歴戦の勇士の勲章には違ひなかつた一一けど、肩から下がない右腕は、斬り落とされたのではなく、実は生まれつきなかつたのである。どこを捜してもなかつた。覗いて見たわけでもないけどなかつた。みんなにはちゃんと一本あるのに、どうして自分には一本しかないのか。恨めしかつた。これが引け目になつた。それでイジメられもした。

さいわい中学生になつたあたりから、体が急激に大きくなり、あつという間に背丈が一八〇センチ近くになつた。もう誰もイジめるやつはいなくなつた、ばかりか、逆にイジめる側なつた。特に強そうなやつ、強がつているやつを、好んでイジめた。

イッパシの悪になつて一一それは片腕の代償だつた一一お決まりのコースを辿つて博徒系のヤクザになつた。テキヤ系ヤクザの城島竜太郎と斬り合つたのが縁で、同族でもあつたし、その器量に惚れて子分になつたといふ次第。

子供好きの松吉は子供らを集めて一一また子供らの方から集まつて来た一一子供相手によくダボラを吹いた。城島家の子供らはみんな松吉のダボラを聞いて育つた。

子供はしかし残酷である、きっと片腕のことを訊く。「松つあんな、何で片方の腕がないと？」そういう時松吉は、「竜太郎親分に斬り落とされたとばい」といつて、子供時分のマイナーな気持ちを晴らした。

— 何で斬り落とされたん？

ピストルば握つちよつたけんたい。だけん、斬り落とされた腕ば担いで、すたこら逃げたっぢや。ピストルば持つて帰らんと親分に叱られるけん。

子供らはゲラゲラ笑うから興にのつて。

途中、松ノ木に叩き付けてみたけんが、これが真剣握つちよつちえ放せんのよ。

この話は小さな子供らに大うけにうけた。けど、少し年がいった子らはこれでは納得しなかつた。

お医者さんに行けばくつ付けてくれるんと違うんね？

おお、そうたい。ばつてん、ピストルば放さんけん、神経を繋いだ途端に、ズドン！ とやられちゃかんわんゆうて、お医者が、反対向きに縫い付けたんじや。背中搔くのには便利なばつてん、寝るとき邪魔くそつてな。

ここで子供らは腹を抱えて大笑い。姫君たちにまちよつとエッチな「潜水艦」の話をしたりした。

松吉は右腕の先っぽを動かしながら、その時分のことを思い出してニヤついていたが、ふと、遼子と目が合つて、遼子お嬢さんを怖がらせていたことに気付いて、あわてて着物を羽織った。

「こ、これは、はしたないとこうを——」

年甲斐もなく赤くなつた。若親分のお上さんでなければ——今はヤモメとはいへ——後家殺しの松としては垂涎の的のような遼子であつた。

「いいえ、おかげで助かつたわ。松吉さんがいと、本当に心強いわ。あつ！ そそう。ちょっと待つててね」

といって遼子は松吉を座敷に残したまま、居間の方へ立つた。座敷には石油ストーブが焚かれていて寒くはなかつた。けど、居間に通される仲になりたいものだと松吉は思つた。恐れ多いことだとすくに恥じた。

えらいヒマがかかつた。松吉は何度も首を伸ばして廊下の方を見

やつたり、足を崩して胡坐を描き、フンドシの前下がりを引つ張つたりして、そしてすぐにまた正座して威儀を正したりした。

やがて廊下に足音がして、遼子が障子から顔を出し、「遅くなつてご免ね。用意ができたから。居間の方にどうぞ」といった。

「えつ？」

松吉は呆けた顔をした。頬が凹んで、いつそう老けた顔になつた。「遠慮しなくていいのよ。お酒の用意をしたから、今夜は一緒に飲みましよう。これが飲まずにおれますか」

居間の飯台 電気炬燵である には刺身の盛り合わせと熱燗が用意されていた。

赤嶺松吉にとつては、そこは眩しいような聖域であつた。勿論一度も通されたことはない。アンティークな家具・調度に囲まれた六畳間で、昔ながらの寛ぎやすい典型的な日本間であつた。

しかも、炬燵に足を入れてみてわかつたのであるが、年寄りに優しい掘り炬燵。

しかし、古びて、ほの暗く、色褪せた觀は否めなかつた。子供が成長して巣立つてしまふと、どうしてもそうなつて、華やかさを失つてしまふもの。蛍光灯がほの暗くさえ感じられる。子育ての時が一番活氣があり、部屋の隅々にまで光が行き届いて、一番苦しい時でありながら、一番光輝いていた時期でもあつたのだ。

遼子は一人子であつたけど、同じ年頃の従兄弟 従姉妹 が近所に大勢いたから、この部屋はいつも賑やかだつた。その痕跡が壁の落書きや家具に貼られたワッペンなど、随所に見られた。

赤嶺松吉は杯を受けながら感慨深げに部屋を見回した。彼にも志津という石女の女房がいて、貰い子ばかりだけど、川ベリの貧しい苦屋での子育ての時期があつたのだ。

「いただきものなの。冷凍室に凍らせてあつたんだけど。尻腐れといつ別府湾で釣れるモイカなんだけど、おいしいわよ」

イカソウメンにしてあつた。大皿にはマグロやサバ、そして珍し

くタチウオの刺身が盛られてある。

清酒『西の関』の熱燗を相互に注ぎ合つて飲んだ。

遼子はベージュのナイトパンツに濃紺のセーター姿で、艶やかに横座りしていた。セーターだとどうしても胸の膨らみが強調され見え、いやがうえにも四十女の色香が漂つて、赤嶺松吉はもうくらべていた。目と鼻の辺りに煩惱が如実に表われていた。
そこへ光子が帰つて来た。

まず光子の目に飛び込んで来たのは、未だかつて見たこともない母の艶やかな姿だった。白い襟足えりあしの後れ毛と、横座りしたふくよかな腰つきに、厭らしい女を見た。

「こんな時に、よくお酒なんか飲んでいられるね」

その気持ちはそんな言葉になつて表れた。松吉を睨み付けた。

松吉は赤い鼻をして崩していた姿勢を正した。

「しあわってには、タツが懲役六、七年の刑を宣告されることになるかならないかという、大事な裁判を控えて、いい気なものね」

その村上タツオに面会に行つて、どうしようもない自分の非力を詫びて來たのだ。

「何てこというの！」遼子も姿勢を直して、言葉を返した。「松

吉おじさんのおかげで、助かつたんだから」

しかし飲みつけない酒を飲んで、しどけなく顔は赤らんでいる。

「どういうこと？」

「板井坪根というヤクザ者が脅しをかけて来て、松吉おじさんが追つ払つてくれたのよ！」

「告訴するなつてこと？ そういうに來たの？」

「そうよ。少年と二人で。怖かつたわ。松吉おじさんがいなかつたら……どうなつてたか

「ちくしょう！」

光子は唇を噛んだ。

松吉はそそくさと座を立つた。「したら、わしさこれで——」

「まあ、ゆつくりして。ゆつくり飲みましょうよ、おじさん」
だがもう松吉は下人のように姿勢を低くして障子まであとずつ、濡れ縁に出て、ひざまずいて、障子を閉めた。

それから光子は不機嫌な顔で夕食を食べた。このところ親子の会話は必要最小限しかない。食器の音が空しくするだけで、テレビを

見ながら食べ、食事が済むと、すぐに光子は一階に駆け上がりつてしまふ。今日は臼杵の現場に出掛け、治療を受けた病院へも寄つて、そして畠中の刑務所でタツオと面会　　という予定行動が予定表に記されていたから、そのことと傷の具合を一、二質問したけど、返つて来たのは生返事。

いつものようにじ飯が済むと一緒に上がつてしまつた。お風呂にはもう三日も入つてない。ケガがあるからとはいえ、シャワーくらい浴びてもよさそうなものだ。女の子なのに。部屋に洗濯物が山になつてゐるに違いない。

恨めしそうに食器を抱えた遼子は階段を見上げて溜息をついた。

光子はベットにひっくり返つて、先ほど見た母の姿を想い浮かべていた。白い襟足の後れ毛が憐れであった。このまま年取つてしまふのは何とも不憫。しかし、母に新しい男ができることなど、考えただけでも厭らしい。断じて受け入れられない。松つあんにさえ嫉妬したくらいだ。

寝返りを打つて、今度はタツオのことを考える。このままではタツは五、六年の実刑を食らうことになる。タツでさえ救いきれない自分に、これから何ができるか……。

一ヶ月前の論告求刑公判で、検察は、冒頭陳述通りの公訴事実で、懲役七年を求刑しているのである。この公訴事実を覆すには小刀という反証が是非とも必要だった。

そういうた根岸先生はどこで何をしてゐるのか。あと正味一日しか時間がないといふのに。所詮、先生にとつてタツはクライアントの一人でしかないのか、それも儲からない客に過ぎないのか。別に手を抜いてるわけではないけど、もう少し切実になつてくれてもよそをうなものだと恨めしく思つ。

一、目撃証言は崩した。

一、肥後守の小刀は確かに存在していて、少年が所持していたこ

とが確認された。

三、その物証の痕跡でも現場に残されていれば――。

今日またタツに詳しく述べたところによると、警官が駆けつける前、つまり、パトカーのサイレンが聞こえて来た時、板井健吾は立っていたという。それがパトが横付けされた時には這いつくばつていた——というのだ。

ほんのちょっとした隙である。その隙に一
体どーぐ?

「そん時、板井健吾はどうに立つてたん？」

…………… ふ、プロック塙の横。うん。そそ

ニシムラ

プロック塀にはどこにも異状はなかつた。かなり古い建築プロックで、苔生しており、上には屋根状の蓋が付いていた。どちらのものか聞かなかつたけど、それが境界線になつてゐることは確かだ……

色々考えをめぐらしてこむつゝ、ふと。

こん奴が、どうかこつから入り込んじ来ち悪さをするんじ

「 という田中ミサの言葉が蘇つた。もしかすると、猫が入り込む隙間に小刀が入り込んだのでは！」

その一〇 新証拠発見

翌朝、朝早くに光子は社用車のエブリイを駆つて、臼杵の事件現場に向かつた。左太腿に深さ三センチ、二五針も縫う大怪我を負っているというのにである。

昨日はタクシーを使つたけど、タクシー料金が一万五千円余りかかつた。海坊主みたいな運ちゃんが、待ち時間を、メーターを止めていてくれたのにも係わらず。

さすがにもうそんな経費は気が引けて使えない よくよく考えるその経費は天門屋一家に請求されるのだけど。だから、うるさいチーボスが出勤して来ない内に出掛けることにしたのだ。

勿論、家から事務所まではタクシーを使つたので、母親の遼子とてそんな無謀は知らないし、知つていたら許しさしかつただろうし、それを素直に聞く光子でもなかつたけど、あの赤い鼻をしたエロジイジイをお供につけるくらいの妥協は余儀なくされただろう。

(ママに手を出したら承知しないから)

光子は松吉のよからぬ噂は子供時分に——その時は何のことやらわからなかつたけど——嫌というほど聞き及んでいた。

だいたい、親分の木之元薰にしてからが——大人になつてからようやくその意味がわかつて——顔を顰めたくなるような噂が光子の耳に入つていた。その噂を、子供らが傍にいるのにも係わらず、平気で吹聴していたのが松吉だから、眞偽のほどはわからないにしても、どつちもどつち。

二人とも下の方の癖が悪いのだ。そして二人は仲が悪い。松吉は祖父・竜太郎の舎弟だし、木之元薰は小倉の房前一家では祖父と兄弟分だった。そして祖父は独立して天門屋一家を興し、それを松吉にではなく、木之元薰に譲つたのだった。

その辺のゴチャゴチャした事情が、盆正月や冠婚葬祭の折に、決まって話題になり、竜子伯母が話すのを、光子ら子供らは聞くとは

なしに聞いて育つたのだ。

あん奴は命懸けでないと燃えん男よ。小指はおまえ、兄貴分の女に手を出した時のもので、薬指はオジキの妾、中指は親分の愛娘、左手の小指を詰めたんは——親分の親心で絶縁は免れてじゃな、人吉の鶴丸親分のとこに預けられたばつてんが——鶴丸親分どこの男所帯、女といえば賄いの八十過ぎのばあさんと、メスヤギが一頭おるだけ、よもや間違いは起こすまいとの親心を——あんバカちんが、あらうじことか、今度は若頭に手を出してしまい、見境のねえ野郎だ、おめえは一物を詰めるか、首を詰めるか、どつちかにしろい！

ちゅうことになつたのよ、ふふあふあふあふあ。

見てみい！ それぞれに貰つた指輪をば、勲章のごつ、それぞれの指に嵌めくさつてからに、いい気なもんたい。

という松吉のダボラを聞いて大人たちは大笑い。子供らは年齢に応じた反応を見せ、光子は傍の民子姉に——民子姉は本当は叔母だけど歳が近いからそう呼んでいた イ・チ・モ・ツつてなあに？ と無邪気に訊いたものだ。

そんなことを思い出しながら光子は、「松の奴、ママに手を出したらただおかないから」と、今度は声を出してつぶやいた。だんだん不安な思いが膨らんで來ていたのだ。

それにしても、どう覇^{ひき}傭^{きめ}目に見ても、父方の一族には変なのがかりがいる。この間来た左官の太一も、体がくの字に曲がつて傾いているところから、福岡の伯母 叔母 らからは「片ギンタンの太一」と呼ばれていたし、大工のトメは、いつも目を白黒させてクギを口の中^{もとあそ}で弄^なんでいる変人だった。

それでも彼らに愛着を感じてしまうのはなぜだらう？ どうして自分はやつきになつてタツを救あうとしているのだろう。光子の疑問はいつもそこに落ち着いた。

車はいつも違つて国道一〇号線を走つていた。途中から県道に入つて、臥竜梅で有名な吉野を通つて日杵に向かうコースである。

「何んな、また、何」とな?」

無理もない、昨日の今日である。訪る田中ミサヒ、光子は急き込んで訊いた。「おばあちゃん、猫 野良猫だけど、どうから家に侵入して来るの?」

「ああ、あれか。あん奴は——」といつて、光子を手招きした。玄関から庭の方に回つて、縁側の雨戸の上を指した。梁の上の板壁に猫ならどうにか通れそうな破れ穴があつた。

「まずはあつこじやな。ジイが修繕するするちゅううち、とうとうせんまま死によつたけん、そんままじや。屋根があるけん、別に困りやあせんけんべ」

光子は隣の吉岡家との境界ブロック塀の所まで下がつて見た。残念ながら、そこからは軒^{のき}が邪魔して見えなかつた。ということはナイフを投げても、屋根に阻まれるということ。家は棟^{むね}から両側に同じ長さの軒を伸ばした、典型的な安普請の切り妻造りだつた。

光子はがつかりして、そこからほかに猫が入り込めそうな隙間を捜した。

「やつぱり、駄目か……」といつて田中ミサもやつて来て横に立つた。

「このブロック塀はどうちらのもの?」と、ふいに光子が訊いた。高さ一メートル足らずのお粗末な建築ブロックだから、隣の家とは不釣合いと思った。

「こらおまえ、うちの境界線じゃあ。隣の吉岡さんとは何十年もあとに越しち来ち家を建てた。まあ、あらためち塀を築ぐのもイヤラシイけんぢ、遠慮しちくれちょんのじやううで。代わりにマキの木を植えただけじゃけんべ、品がいいの見よ」

光子はブロック塀を一跨ぎして隣の庭に、少年が立つていたという辺りに立つてみようかと思つたけど、さすがにそれは憚られた。だから塀ぎりぎりに立つて、それに腰掛けて眺めようとした——ところ。

「ああ、駄目ぢやー」

と、田中リサが急に声を出した。

「えつ？」

「塀に腰掛たら屋根が外れるやつやー。」

「屋根が？ これ動くの？」

「ああ、古ついたんで、コンクリート剥がれたり、とつきなたまに動くやつが出る。そんたび修理しようのじや。」

「…」

「これがおまえ外れたら、すぐ修理せよど、じきじやあ、水が溜まつかけ、塀が痛む」

「ど、こりことは何 もしかして、あの時も動く屋根があつたかも知れなことこり」と…。

「そらまあ、どうかの…」

「屋根をずりして、隙間から小刀を落とし込んだらどうなるの？」

「そらおまえ、建築ブロックちゅうのは中がウト 空ひになつち

よるけん、一番下まで落つるがええ」

「け、警察はこの屋根を調べた？」

「そんなもん調べるかええ。脚立を立てひ、家ん屋根の上を覗いただけじや」

「それなら、あの事件のあと、この塀の屋根を修理した？」

「ああ、そらまあ、何箇所かはな」

「 お、おばあちゃん！ このブロック塀新品にやり換えない？」

「なしか？」

「ねえ、もつといこのにやり換えよつよ！」

「バカんじゅうこつ、そげな金がどこにあるとかえ。年金じ、ようつ暮らじよるわちゅうこつ」

「まかしとこで、左官の太一にやいひかのからー。」

その田たたに田川から急遽例の一人組を呼び寄せ、大勢のギャラリーが見守る中、ブロック塀が取り壊されて、遂に「錆びたナイフ」が発見された。

勿論、肥後守である。刃元に大きな刃こぼれのある、待望の新証拠が発見されたのだ。

吉岡夫妻や目撃者の熊谷ケイ、近所の住人達や子供ら、そして、得意然としている田中ミサなどの祝福を受けて、光子は青空のようなすがすがしい気持ちになつた。

そして何気に振り返つた所に、根岸ともみが立つていた。

雪のように白いハイネックのセーターに、暖色系のタータンチェックのスカート、その上からブラウンのジャケットを羽織つて、そして何と、スカートの裾から伸びたシームレスの足には、ハイヒールの靴がーー。

オハラモードだ！

光子は駆け寄つて、ハンカチに包んだナイフを突き出した。そして湧き上がつて来る感情のうねりを、鼻の奥から口腔内に滲み出来る液体と一緒に飲み込んだ。

根岸ともみはそれを受け取り、広げて見て、「……やつたわね」と低く小さくいつただけで、ギャラリーのみんなに会釈して、そつちへ向かつた。

光子は取り残された。肩透かしを食つたような気分で。こんなに苦労して、やつと見つけたといつのに。それが「やつたわね」の一言だけとは！

(そんな……のある？)

子供時分のよう、頭を撫でたり、抱き締めて褒めてくれとはいわない、気分はそうでも、もうそんな歳でもないからーーでも、肩の一つも叩いて、「凄い！ よくやつた！」と、感激してくれても

いいじゃない。裁判に勝てるかも知れない重大な証拠物を発見した
というのに。

それに、口角の青タン見て何もいわないなんて——。

だいたい自分は何なのよ！ どこで何してたのよ！ 男と会
つてたなんていつたら、承知しないから！

光子は心の中で何度も毒づいた。

正月が過ぎてからもう一ヶ月近くなるけど、光子は正月餅のよう
に膨れ上がった。

根岸が戻つて来て、「あんた、プロック塀を無償でやりかえであ
げるそうだけど、博多のア解は取つてあるの？ 三〇万はかかるそ
うだけど」といつても、ブイとよそを向いた。

「知りらない」

家に帰つてからも光子の機嫌は悪かった。

遼子のスカートにまでイチャモンつけて、「ちょっと派手なんじ
やないの。離れにはエロジジイもいるんだし。それにあたしのセー
ター着るのやめてよね」と珍しく夕食後に居残つていう。

「もう着ないつていつたでしきう」

「だからといつてママが着ることないじゃない。もう歳なんだから
「歳、歳つていわないでよ。それでなくとも、老け込んでしまいそ
うなんだから。少しば若作りしたらつて、よくいわれるんだから」

「誰に？」

「お友達なんかによ。みんな若々しい格好して、カラオケだ、飲み
会だと、……この頃つづく思うのよ。ママの人生は何なかつて。
このまま年取つてしまふかと思つとやりきれない……」

何だか辛氣臭いことになつて來た。光子は逃げ出そうとした。

「根岸先生のことだけ……」それを察知した遼子が引き止めるよ
うにいった。「先生が時々居なくなるけど、それは大目に見てやつ
てね」

自分の心を見透かしているのかと光子は思った。それがイライラ

の原因だというのを。

「先生はいうにいわれぬ問題を抱えてるのよ」

「どうせ、男に会いに行くんでしょ」

「バカね。そうじゃないわよ」

「だつて、すつごく香りのいい、くらべりあるような香水の匂いがしたもん」

根岸ともみの秘密を知る者は養父母を除けば、この世に一人しかいない。根岸の夫宛の手紙を検閲した刑務官と、夫の遺品の中にあつたその手紙を読んだ遼子の二人だけである。

検閲官は守秘義務を守っていると見えて、その事実が世間に漏れることはなかつた。遼子もその手紙を焼き捨てた。なので獄死した夫を含めたら三人だけになる。

「じゃあ、どこで何してるのよ?」

「さあ、それは知らない。けどね、人には人の事情があるから、そつとしておいてあげようね」

「そつはいかないよ。タツのことは放つぱらかして、あたしが新証拠を見つけ出さなかつたら、タツは五年も六年も刑務所暮らしだつたんだよ。それが正義の味方の弁護士といえる」

「いえるわよ。あんたを信頼して任せたんだから。根岸先生が一生懸命やつても発見できたかどうか。先生が信頼したあんただからこそ出来た。だから先生がやつたのと同じ。人間にはみんな向き不向き、不得手があるの。その人にしかできないこともあるのよ」理屈では適わない。感情のわだかまりは解消しないけど、もういい返す言葉がなかつた。

「だから、お風呂に入らうね、ママが洗つたげるから。怪我して洗いにくいだろうから」

「お断りします。体くらい自分で洗えます。でも入らない。最終弁論が終わるまで、入らないって、決めたの」

「——ちよとやめてよ」

その一 最終弁論裁判

一月二十四日。午前一〇時。

大分地裁小法廷にて、最終弁論裁判が開かれた。

天気が悪いせいもあるまいけど、傍聴人は、榎原家の母娘と赤嶺松吉のほかは、捜査関係者と思しき者が数人、板井家の者は誰も来てなかつた。マスコミ席も、地元テレビ・ラジオ放送局と新聞社が一社だけ。

閑散とした法廷に、弁論要旨を滔々（とうとう）と読み上げる根岸ともみ弁護人の声が響く。その前の長椅子には、刑務官に挟まれた村上タツオの姿があつた。

新たな展開に驚く検察官を尻目に、根岸弁護人は次々に人名をあげて証人申請をした。

「よつて、板井健吾、板井坪根、上田正也、熊谷ケイ、田中ミサ、吉賀虎子 の証人尋問を申請します」

「不同意！」検察官が凜とした声をあげて立ち上がった。「その必要はないかと思います。いたずらに裁判を長引かせるだけです」

はからずも検察官も女性であつた。それも、いざれ劣らぬ長身の美形、裁判長は見比べるように一人を見て、「吉賀虎子というお方は？」と訊いた。

女性検事は珍しくもないご時勢、しかし両人とも目を見張るような美人でもあつた。

「臼杵警察署の警察官で、階級は巡査部長です。ちなみに虎子といつても、虎の子と書いて虎子 女性ではありません。まず最初に現場に駆けつけた警察官です」

「ほう、それはまた珍しいお名前ですね。それで弁護人はそれらの方々から、どういう証言を引き出したいわけですか？」

「勿論、被告人の主張する事実と、検察官の主張する公訴事実との違いを明確にする為です」

「裁判長！」東浜明美検事が発言を求めた。

「許可します。どうぞ」

「物証のない不毛の証人尋問はもうさんざんやつて来たことであります。その人数をどれだけ増やそうと、書証以上の証言が得られないのは明らか、これ以上は時間の無駄かと、重ねて申し上げます」

「裁判長！」

「弁護人の発言を許可します。どうぞ」

「それではここで、検察官お望みの物証を、お目に掛けいたしましょう」

何という心憎い演出であろうか。初めから披瀝するのではなく、ここぞという時に——その効果は絶大であった。

根岸ともみ弁護人は、肥後守の小刀が入った透明のビニール袋を高々と掲げ、「これがその被告人が主張する肥後守という刻印の入った小刀であります」といつて席を離れ、向かい側の検察官席に行き、それを見せ、そして、中央の事務官に手渡した。

それは事務官から裁判長に手渡され、裁判長と右陪席裁判官と左陪席裁判官が顔を突き合わせて眺めた。

やがてお三方はうなずき合つて、鈴木是政裁判長は厳肅な顔を正面に向けていった。

「証人申請を許可します」

それから三者　弁護人と検察官と裁判長　の話し合いにより、

次期公判の日取りが決められて、閉廷となつた。

外はしとしと冷たい雨が降つていた。

ちょうど昼時であつたので、裁判所から東にちょっと行つた所の法曹会館の横のカフェで軽食を食べることにした。

赤嶺松吉もついて來たそうな顔をしていたが、光子に睨まれてすぐ城崎の事務所に歩いて向かつた。事務所といつても天門屋一家の事務所で、ビルの一室を借りて「大分営業所」という看板が掲げてあり、中九州一円をカバーする拠点である。今はシーザンオフ

なので松吉の遠縁にあたる本庄純一が一人で寝泊りしている。

カウベルを鳴らして店に入り、三人は窓際の席に腰を下ろした。

先客は三名、たいてい法曹関係者である。そのうちの一人と根岸ともみは会釈を交わした。

店内にはタンゴの調べが静かに流れている。光子はこういうところは初めてなので、雰囲気のいい店内を見回して、大人になつたような気分がしていた。

南方系の顔立ちと色合いをしたウェーテーがオーダーを取りに来たので、それぞれ決めてあるものを光子が注文した。

「APUの学生さん?」と遼子が訊いた。

「はい。そうです」

「だと思った。どちらから?」

「ミヤンマーから、です」といつてウェーテーは照れて、三人の視線から逃れるようになつて行つた。

「ママつたら、すぐそやつてオバサン丸出しで知らない人でも話かけちゃうんだから」

「いいじやない。別にナンパしてゐわけじやないんだから」といつて遼子は、「何とかしてよ。小姑のように傍から口づるさくて」と根岸にいう。

根岸ともみは光子を見つめて「よくやつたわね」としみじみ褒めた。「おかげで、あの検事に目を付けられてしまつたわ。新人なのになかなか切れ者らしいわよ」

「そういえば、前の検事さんはどうなつたの?」遼子が訊いた。

「前任は去年の暮れに心筋梗塞で倒れたらしいわ。後任は大変だったと思う。膨大な公判記録の読み込みや何かで、そこにいきなりのカウンターパンチ。一生怨まれるわ」

「でも、板井健吾に坪根、それに上田正也少年、証人として出廷してくれるかなあ……」光子がいう。

「大丈夫、出て来なければ、裁判所の召喚状が出る。これは拒めないから」

「あたしが診断書持つて訴えたらどうなるかなあ、板井健吾の奴」「準強姦致傷などで、最低でも懲役三年の実刑は免れないわね。勿論そうなると執行猶予は付かない」

「わおーっ！　証言次第じゃやつてやる！　民事でも一、二三百万はふんだくれるでしょう、タツが一五〇万なんだから」

「勿論、おしとやかなお嬢さんの場合であればね」

「どういう意味、それ？」

「相手も診断書取つてるかも知れないということよ」遼子がいつた。そこに、料理が運ばれて来た。根岸も遼子も特製ランチで、光子はエビピラフに、ハンバーグだった。

一週間後に開かれた公判で、オスカルモードに切り替わった根岸ともみは、黒ずくめの衣装でクールに証人を追及し、検察の公訴事実を次々に覆す証言を引き出していった。

板井健吾と坪根は証人として出廷することになった時からもう、どっちが得か、損得勘定に聰い彼らのこと、観念していた。

板井健吾の尋問。

「証人は肥後守という刻印の入った小刀を見たことがありますか？」

「あります」

「どこで見ましたか？」

「蔵の中で見つけました」

「それは誰のものですか？」

「死んだ父のもので、祖父の代からのものです」

「それはどんな形をしたものですか？」

「刃渡り一五センチくらいの握りの部分に刃が収まる折り畳み式ナイフです」

「どんな色をしてましたか？」

「鉄の色そのものでした」

「ほかに何か、特徴はありませんでしたか？」

「刃元に大きな刃こぼれがありました」

そこで根岸ともみは証人席に行つて、「それはこれですか?」と
ビニール袋に入った小刀を掲げて見せた

「鋸びていますけど……そうです」

「間違いありませんか?」

「間違いありません」

根岸ともみは席に戻つてまた質問を始めた。

「証人は被告人を初めて見た時どう思いましたか?」

「たこ焼き屋の親父だと思いました」

「料金を払わずに逃げたのはなぜですか?」

「からかってやろうと思ったからです」

「民家の庭に追い詰められた時はどう思いましたか?」

「堀を乗り越えて逃げよつと思いました」

「それで?」

「堀に手を突いた時、ずるつと腰根が動いて、やつたらうかといつ
気が起きました」

「何をですか?」

「ポケットの中の小刀で脅してやううかと思いました」

「それからどうしましたか?」

「百円玉を五個ばら撒いて……やるんか、おっちゃんといって小刀
の刃を起こして構えました」

「被告人はどうしましたか?」

「真っ赤な顔で何かいおうとして、口を開けて、固まつてしまいま
した」

「それでどうしましたか?」

「立つたまま気絶したのではないかと思って、ちよつと突き刺して
みようと思いました」

「それからどうしましたか?」

「いきなりカミナリのような声を出したので、ビクつとしてしまい、
ビビッたところを殴られました。小刀をもぎ取られました」

「何発殴られましたか?」

「よくわかりませんけど、三、四発くらいだったと思います」「小刀をもぎ取られてからも殴られましたか？」

「いいえ」

「それからどうしましたか？」

「パトカーのサイレンが聞こえてきました」

「その時被告人はどうしていましたか？」

「道路の方へ歩いて行きかけて、立ち止まつていました」

「その時証人はどうしましたか？」

「ブロック塀の屋根が動いたのを思い出して、ヤバイと思い、小刀を拾つて、隙間に落とし込み、屋根を元に戻してから、地べたに這いつくばりました」

「警察官は何人来ましたか？」

「三人来ました」

「警察官はどうしましたか？」

「たこ焼き屋さんの腕を一人が掴み、一人が、大丈夫か？　といって抱え起こしてくれました」

「それからどうしましたか？」

「暴行傷害の現行犯で逮捕するといつてたこ焼き屋さんに手錠を掛けたパトカーに乗せて行きました」

「証人はどうしましたか？」

「あとから来たパトカーに乗せられて警察署に連れて行かれ、色々聽かれました」

「警察官にはどういって説明しましたか？」

「ちょっととかからかってやるうと思つただけなのに、むきになつて追い駆けて来て、追い詰められ、代金をよこせといつから払つたのに、殴られた——といいました」

そこで根岸ともみは「質問をおわります」といつて、裁判官に礼をして着席した。

廷内は静まりかえった。

食事休憩を挟んで午後からは、板井坪根と警察官の吉賀虎子を尋

問して 上田正也少年は個室で裁判官が尋問した、すべての証人尋問を終わり、最後に被告人・村上タツオの意見陳述を以つて結審、一週間後に判決公判があつて判決がいい渡されたことになったのである。

勿論、判決は満足すべきものだつた。完全無罪といつわけにはいかず、未決拘禁期間よりわずかに永い、懲役一年一月、執行猶予五年という判決で、社会的通念により、正当防衛は認められなかつたのである。五年もの永い期間弁当を持たせることもそのゆえか。ともかく、博多御所は大満足。「まだ福岡と熊本にも入つちよるばつてん、銭にやあ、何んぼあつてん、足りやあせん」といしながらも、上機嫌であった。

無論、判決公判には城島竜子と綱江も傍聴した。そのついでに神原家に立ち寄つたのである。

「光！ こたびは大活躍だつたそ（う）じやの（う）」
といつているところへ、遼子が持領のビジネススーツを持つて現れ、広げて見せた。「お義姉さんこれ見てください」「おほほほ。また派手に暴れたもんじやの（う）。うんうん。しかしあまだじやな。わしなら足腰立たんようにしてやるばつてん。
よか。よかよ。そげんなもん何ん何んあつらえちやる」「それにーーいつてくださいよ。最終弁論が済むまでは、なんていつて、一週間も一〇日もお風呂に入らないんですよ」
「何んが。家のハルなんか中学生時分は「ハル」というのは謀殺された次女の芳江の娘のことで、竜子が養女にしている光子より二つ上の従姉妹、春奈のことである。「それぐらいなもんじやなかばい。コケと脂で黒光りしよつたちや。その方が悪い虫がつかんでよかつたい」

「 もひ、お義姉さんたら。家の光子は二十歳前の娘ですよ」
離れの納屋では、松吉や本庄純一やタツや太一にトメなどがドンちゃん騒ぎをしている。炭坑節が聞こえて来る。

光子は隙を見て一階に逃げ出そうとした。

「こら待て！ 光子。どこ行きよるか。久ぶりに会つりや。ここ来て座りんしゃい。伯母ちゃんの横、ば」

「何よ。疲れたけん眠たかよ」

仕方なく、竜子の隣の掘り炬燵に足を入れて座つた。八人がゆつたり座れる掘り炬燵である。

「いいか、光子。おまえも親父に似て、錢に疎い。三〇万もあれば、ムショでお勤め中の者の家族に、三家族に手当ができるとぞや」

「ばつてん、あれは伯母ちゃんがいいつてゆつたやん」

「おまえが三〇万くらいかかるからちゅうけん、 そつか、ちゅう

うたつた。一〇万といえば、一〇万で済む。話しあは持つて行きよ

うたい。どこの世界にただで三〇万もくれてやるバカがあるか

「お義姉さん、それはちょっと酷いんじやありません。光子は——

「遼子さん。ここは肝心なとこばい。錢のケジメをば、性根に叩き込んでおかねば、上に立つ者にはなれん」

光子は膨れた。上に立つ氣などない。しかしこの伯母は怖い。おとなしく聞いているしかない。

もう一人の叔母の姿が見えないと思つたら、離れのドンちゃん騒ぎの中から声がしている。絹江伯母は四十過ぎて独身だった。

竜子は光子の頭を荒々しく手で撫で回して、「ばつてん、こたびはようやつた。上出来たい」といつて、上機嫌で、笑つた。

その一一 見晴台変死事件

その名の通り、そこから眺める景色は絶景である。

遠くに国東半島を眺め、その手前のライトブルーの帶びは別府湾、左にパーンすれば、原始風景さながらの荒々しさで、ゴシゴシ隆起した鶴見岳や由布岳など千メートル級の山々が望まれ、そしてその山裾には日本一の湯煙を上げる、「湯の街・別府」が煌めいており、更に日本一のサル山である「高崎山」から大分市街へと展望される。しかし絶景なのは夜とて同じである。

夜ともなれば、眼下に突如として大小様々光の海が現出する。まさに、まぼろしの百万都市が立ち現れるがごとくにある。

初めて見る者は、その夜景に感動と驚きを禁じえないだろう。日を奪われるに違いない。そして見晴台の住民は、昼夜の絶景に天下を取つたような気分になるのだろう。

その正体は昼ならなんでもない、臨海コンビナートの灯であつた。とりわけ新日鉄が凄い。それだけ、夜でも大勢の労働者が働いているということであり、その団地内で発見された変死体もその労働者の一人であつた。

そして、その事件の容疑者として逮捕されたのも同じ職場で働く同僚であり、その容疑者の母親が根岸法律事務所に弁護を依頼して来たことから、その奇怪な変死事件が俄然身近なものとなつた。

それまではテレビニュースを観ながら「何? どういうこと?

嫌だ!」と、あれこれ評論していた光子らであるが——新たなクライアントがやつて来てボス弁と長らく応接室で話し込んでいくと思つたら——やがて根岸ともみが休憩室に現れて、目の前に映し出されている事件の担当を命ぜられたのであるから、光子が呆気にとらわれたのも無理はない。テレビからいきなりサダコが現れたようなものだ。

ボス弁の根岸ともみは、相変わらず民事の方で忙しく、自然、刑

事案件は光子が担当するようになったのである。お手柄を立てたばかりだし、当然光子が張り切つたことはいうまでもない。

しかし、接見を申し込んでも断られるし、当面やることといえば、家族から事情聴取して、新聞・テレビなどのメディアによる情報と突き合わせて、事件の概要を把握することであった。

その事件は春爛漫の、四月一八日の午後一時三五分に、110番通報により、所轄の大分中央署・高城交番が駆けつけて、認知された。

事件現場は、見晴台団地の最上部に位置し、築四年・建坪四〇坪ばかりの一階建て家屋。遺体はその家の一人住まいの独身男で、守山孝明 34歳。死後四、五日経過しており、寝室六畳間でのその態様はまことに奇怪なものであった。

通報者は、第一発見者の清水紀夫 四一歳。ガイシャとは職場の同僚であり、無断欠勤が続いていたことから様子見に来て発見。玄関の鍵はかかっていたので、近くのマンションに住むガイシャの母親を連れて来て開錠したものである。

諸般の事情から第一発見者の彼に嫌疑がかかり——おびただしい数の彼の指紋が現場に残されており、死亡推定時にアリバイがなく、二人の間に金銭トラブルがあつたことなど——一時は自殺説もあつたのだが、目撃者が現れしたことによつて、確かな物証がないまま、警察は逮捕に踏み切つたのだった。

しかし、清水紀夫は一貫して事件関与を否定し、確かな物証が得られないことから、接見はなかなか認められず、そのことで根岸ともみ弁護士と東浜明美検事との間で火花を散らしたこともある。裁判所の前で偶然行き会つたことから生じた小競り合い。

同行していた光子が口尖らせて、「タツのことで根に持つてるんでしよう」と検事に食つてかかったので、さすがに根岸ともみは失礼を詫びて、光子を引っ張つて去つた。男性の事務官が傍にいてあきれて見ていた。

道路を横切りながら、「彼女、まだ若いし新米だから、警察に遠慮してるのよ。何といっても実際に動くのは警察なんだから」と根岸はケンカつ早い光子にあきれていった。

そして歩道に差し掛かった所で「ふふふ」と笑ってタバコを取り出し、カツコよく火を点けて、たつた今の応酬は何だったのかと思わせる穏やか顔でタバコをふかすのだった。

今時、女が歩きタバコするか？ 男でもしないのに——という顔で光子は根岸を見る。

でもカツコイイ。彫りの深い外人のような顔に孤独の色を湛え、クールに目を細めて、どこを見るともなく見ながら、紫煙を吐ぐのだ そこには一かけらの幸せも見出せない侘しさがある。

光子はそれをときめいて見つめ、そしてすぐに、人が変ったように変身した時の、ウエットな根岸を思い出して、戸惑う。

その時は嫌悪ともジエラシーともいえぬ、理解し難い感情にとらわれる 男に抱かれて来たな、などと思つてしまふのだ。

それはきっと、自分だけヒイキにして可愛がつてくれた同性の先生が、お嫁に行つてしまふ時に感じる女生徒の、淋しい気持ちに近いのではないか。

根岸先生はどうしてそこに立っているのだろう？

父と民子姉 叔母 とによつて、双子の弟を殺されたといつのに。謀殺人であり、父と民子姉に酷い仕打ちをしたにしても、自分は弟の仇の娘であり、姪子ではないか。母はその妻だったではないか。そしてまた根岸先生は父の仇、悪の帝王の手先の姉でもある。なのにどうして自分はこうも先生に魅かれてしまうのか。先生が男なら、抱かれたいなどと——。

そこへ「光子」と、ぼそつと根岸がいった。

「何？」

「分ぶん大だい」に行つて、客員教授の野島氏に会つて来て

「それはどういう人？」

「新聞見なかつたの？ 元警察庁の鑑識課長で、退職時は審議官だ

つた人、検死の専門家。その教授だけが、自殺説を唱えている
「そんな偉い人がどうして？ 現場に臨場したとでもいうの？」
「らしいわね。詳しいことは知らないけど」

そういうわけで、光子は午後からエブリイを運転して日野原の分大学に向かつた。

一人余計な者がついて来た。いわずと知れた東トシである。分大は母校だから是非とも案内せねばと張り切つてゐるからしようがない。子供時分にはお菓子に釣られて、どこにでもついていったけど、今はそのハイテンションについていけない。正直鬱陶しいけど、そんなひとの気持ちなんかどこ吹く風。

「ねえ、ねえ、光子ちゃんたらあ

「何？」

「井田教授のケーススタディーだけどお。旦那が奥さんを殺そうと思つて拳銃で撃つたんだけどねえ、弾が逸れて天井に潜んでいたドロボウに当たつてしまつたのよね。それでドロボウさんが死んじやつたんだけどお、 これつて、殺人罪を構成すると思う？」

「知らないよ、法律なんか勉強してないんだから」

「そつかあ。でも、素人考えではどおお？」

「殺意はあるから、でもほかの人に当たつたんだから、業務上過失致死がなんかになるんじゃないの？」

「やっぱそう思つ」

「違うの」

「う～ん。どうだつたかな～？ ほんといふとね。もう何年も前に勉強したことだから忘れちゃつたの。問題自体そんな問題だつたかどうかも……」

「はあ～。そんな頼りないことでいいん？」

「ほんといふとね。司法試験は五年以内に三回失敗すると、もつ受験資格なくなるんだ」

「で、トシちゃんは？」

「えへへへ。　二回」

「え？　じゃあもう資格ないの？」

「そう」

「何だ。空念仏だったのか。じゃあ、さっせと結婚しちゃえば
ほんといふとね」

「何？　まさか相手もいないつてんじや？」

「ピンポーン！」

光子はドアを開けて蹴り出してやるつかと思つた。

まあそんなこんなで、道中退屈せずに済んだけど、婚期を逃したトシちゃんが少しかわいそうな気がしないでもなかつた。キャンパスに着いてから懐かしさをハイテンションに騒ぎ立てる姿を見て、そんな気はすぐに失せたけど。

しかし、アポをとつていたにもかかわらず、教授は学部にはおらず、ニキビだらけの学生がやつて来て、「急用ができる、挾間の医科大の方に出掛けたから、そっちへ行つてくれ」という。

何じゃそらーーと思つたけど、致し方ない。どれだけ大物か知らないけど、えらく勿体ぶつてくれるじゃないかと、光子は黄色い声で騒ぎ立てるトシ子の襟首を掴んで、猫のようにぶら下げて車の中に押し込んだ。

そして来た道を戻つて医大に向かつた。

狭間の小高い丘の上に医科大学 のちに大分大学に統合されて医学部となる の建物群が、夕陽に白くきらめいていた。

それを目掛けて坂道をグンと上り詰めた所に門がある。一人とも何度も訪れたことのある病院。光子の祖父は県病に入院しているけど、最初の検査はここでした。

教授は医局の方にいるということなので、そこで待つよついわれていたので、外来患者や家族で賑わう待合室で待った。

一〇分ばかり待たされてようやく白衣を着た痩せ型長身の教授が現れた。

といつても野島教授の方は中央に立つてキヨロキヨロするばかり、光子があたりをつけて近づき、「失礼ですが、野島先生でいらっしゃいますか?」と声をかけたから、「ああ、そうだよ」といった。

「根岸ともみ法律事務所の、榎原光子と申します」といつて名刺を差し出した。

野島教授はそれを受け取り、それと光子の顔を交互に見た。随分長い顔だなあと、横で東トシ子が教授の顔を測るように見ている。

「君、どこかで会ったことがあるかい?」

疲れぼつたく、こんもりした上田蓋に押し潰された垂れ目のわずかな隙間からじっと見ていった。

「いえ? お会いしたことはありませんけど……?」

「あそ。ぼくもこちらへ来てまだ間がないんだけど……そうだな。学生以外で君のような若いお嬢さんに会う機会もないな。 で、見晴台事件でぼくに訊きたいこととこのは?」

「ええ、先生の」

「まあ、ここじゃ、なんだからーーついて来なさい」

といつて野島教授は受付脇から入った所の小部屋に一人を案内した。ちょっとした会議室のような部屋で、衝立で仕切られた所に革

張りの応接セットがあつた。

そこに落ち着いて、まだ何か引っ掛かるような顔で光子を見る教授に、光子は続きをいった。

「先生の『ご見解をですね。検死のエキスパー』でいらっしゃる先生の自殺説のことを、詳しくお訊きしたくて」

「ということは、被疑者の弁護人ということだね」

「はい。そうです」

野島は最早警察官僚ではない。自由にものがいえる立場だった。しかし、事件現場に臨場できたのは県警の検死官の配慮であつたから、捜査に係わる迂闊なことはいえない。

第一報が飛び込んで来たのは、おりしも全日空ホテルで九州管内の検死官を集めて講演をしている時だつた。いや講演はもう終わつて、県警の連中と一階の食堂で食事をしていた。

担当検死官の釤宮警視が、「先生もいかがですか?」と誘つてくれたので渡りに船と、またとない教材だと、数人の検死官と連れ立つて臨場したのである。

その時の情景を思い起こして野島教授は押し潰された垂れ目をいよいよ細くしてつぶやいた。

「……あれは自殺でもなく、事故かも知れないな……」

細長い顔中に老人特有の死斑のような染みがある。

担当検死官の釤宮警視ほか二名と、野島教授は迎えに来たP.Cで高城の現場に急行。すでに所轄の連中が規制線を張つて、現場を大勢で踏み荒らしていた。

「ああ……こんなにしちゃって! これじゃあ、台無しだよ!」と、玄関のタタキからつい現役時のような慨嘆の声を上げたので、「この氏は誰かえ?」と廊下に立つた中央署の権藤警部が声を荒げた。ダークスース姿の痩せ老人を無遠慮に見下ろして。

「警部、口を慎まんか。この方は元警察庁・刑事局の野島警視監だぞ。今は大分大学の客員教授に就任しておられる野島先生だ。現

警視庁公安部長の野島聰史警視監の御父君もある「

権藤警部は、これはたまたまという顔をした。が、根っからの横着な性格、それがどうした、という顔もした。

しかしもう、野島教授は彼の脇をすり抜けて、青い出動服の鑑識職員が忙しく立ちうごめく中を寝室の方に向かっていた。

六畳間の寝室では鑑識係員が変死体を下ろそうとしていた。

「あつ！ 君らー。駄目だよ、そのままにしておきなさい！」と叫ぶ。

「駄目だよ、君。現場は保存しておかなきや」

いわれた鑑識の主任が、「いやしかし、検死官に検死をしていただく為にーー？」勿論、充分な写真撮影はしておりますよ……？

このジイさんは何者か？

と、権藤警部と同じように怪訝な顔で中津留巡査部長は、続いて入つて来た三人のダークスーツの中に釘宮検死官の姿を認め、説明を求めるよつなりつきで、軽く敬礼した。

「この方のおつしやる通りだ、中津留君。我々の仕事は発見時までの状態から始まる」

「はあ……」

野島教授はもう天井からロープで吊り下げられた遺体の方にまわり、正面から、その奇怪なデスマスクを見つめている。真つ赤な色で塗られたーーあとでポスターカラーだとわかるーー奇妙な顔を。口は半開き状態である。

遺体は、部屋の中央に、天井を支える横木に滑車を取り付け、それに小指程の化纏ロープ 色は白 を通してーーそのロープの両端は輪になつており、重みがかければ締まるようになつているーーその輪の片方に右足首を、もう一方には首が絞まるよう前に嵌められていた。つまりエビ反りになつて窒息死していたのである。

但し、そのままで背骨が折れるか、横木の方が重量に耐えられなくなるだろうから、ちょうど腹部に木造丸椅子があてがわれていた。それが支点の役割りをしてバランスを取つていた。

両の手はどうしているかというと、約五〇センチ間に差し渡し

してあるもう一つの横木に打たれたフックに通した紐の両端を掴んでいる。飛行機の翼のように広げて、やはりバランスを取っている。という様態だった。そして遺体はネルの白地にグリーンの縦縞模様のパジャマ姿で、腹が露わになっているほかは乱れはない。腹は血液が溜まつて赤紫色になつていた。

「君。この丸椅子は倒れていたわけではなく、このように身体を支えていたのかね？」

野島教授が訊いた。

「はい」と鑑識主任の中津留巡查部長が答える。

「すると、この状態では窒息するほど首は絞まつてない筈だな」しかし首にはロープが軽く食い込んで擦れた痕がある。

「ふうむ」

野島教授は一步下がつて眺めながら考え込んだ。

「ムササビが滑空するような格好ですね」と傍で釤富警視がいう。「この状態で丸椅子を外したんじゃないですかね」と同行して来た検死官のタマゴがいう。楠木茂樹という二十代の警部。

「それだと、あの横木がもつかね」と、もう一人の検死官・坂田警視が言つ。「顔を赤く塗つたのはどういうことだらつ?」

「ホシが塗つたんでしょうかね」と楠木警部。

「あたり前だろう。ガイシャがそんなことするわけないだろうが」と坂田警視がいえば、「やつぱ他殺だろうなあ……」と釤富警視もつぶやく。

「釤富検死官、これを『ご覧ださ』」といつて、ジャガイモのようないつこつした短髪頭の権藤警部が、「ペー用紙を差し出して見せた。

そこにはワープロ文字で、“ロシアより愛をこめて”と真ん中に打ち込まれてあつた。

何じゃこれは?

とみんなが見入る。

「このベットの上に置いてあつたんですよ」と権藤警部がベットを

指していう。

ベットは入り口ドアに向かつて左側の壁際にあり、右手は本棚と衣装ダンスと、押入れがあり、窓には壁色の分厚い遮光カーテンが引かれてあって、外からは見えないようになっている。

「これは怨恨や物取りというより、変質者の犯行じやわん。物色された形跡もないけん。まともな者がこげな妙な殺し方はせんだろうし」と権藤警部は自分の検視結果を述べた。本部が乗り込んで来るまでは彼が捜査主任だ。

「もうガイシャを下ろしてよいでしょうか?」と中津留巡査部長が誰にともなく訊く。彼より階級が上の者ばかりだ。

「まあ待ちなさい」と、民間人が口を出す。中津留はまだその正体を知らないからぶすくれた。「君、すまないけど、遺体のお尻を捲つてみてくださいらんか」

「え? お尻 をですか? ああ、死亡推定時刻を調べる為に、直腸温度を計るんですね?」

「いやそれはもう、相当口数が経つてるからそれはほかの方法でないと。お尻にキュウリが刺さってないかどうかと思ってね」

「へつ?」釘宮巡査部長は口をポカンと空けた。「キュウリ?」瘦せて小柄な男である。「それはまたーーどうじつことです?」

ほかの者もあっけに取られた。苦笑している者もいる。

「いや、何、どうもこの様態から、例のノーベル賞作家の小説をふと思いつけてね」と野島教授は真面目腐った顔で遺体の顔を見ながらいう。「小説では顔に赤いベンガラを塗つて、お尻にキュウリを刺したままーーそうやって主人公の友達だか何だかが死んでた」みんな無粋な連中ばかりで、文学にはとんと縁がないのか、「我國の作家だよ、君」といわれても何のことやらさつぱりわからない風。

「まあ老婆心ながら、一一どれどれ私が見てみよう」といつて教授

は遺体の寝巻きのズボンを捲つた。

けど、そんなことはなかつた。腹部とは裏腹に口ウのような色の

尻が露わになつただけ。

「どういつところからそんなことを？」と、さつきまで尊敬していたのに、という顔で釘宮警視が訊く。

「うん。顔がいってるからね」

「ええ。確かに逝つてます」

「いや、そうじやなく、エクスタシーのまま死んでる」

ここにようやく釘宮にも合点がいった。思い出したのだ。野島氏は現役時代は変死体の断末魔の言葉を読み取ることで有名だつた。それで幾つもの難事件を解決したという話を、歴代の本部長から聞いたことがあつた。病理学者でもあるからそつかなと思っていたのだが。

ほかの者も思い出したようだ 権藤警部と、中津留巡査部長など鑑識職員を除いて。

しかし、教授の講釈を聴いて、みんなアホらしくなつた。ご神託を有難く聴くものは一人もいなかつた。本当にこれが警察庁鑑識課で鳴らした男だろうかと、検死官連中は眉にツバをつける思いだつた。バカ面下げ五十余名の検死関係者が、遠くは沖縄からもやって来て、神妙に講演を拝聴していたのだから——いやはや。

「人間のね、最高の快感は絶息間際にあるのだよ。神の思し召しかどうか知らんがね。頸動脈を塞がれて危機感を募らせた脳細胞が、何しろ脳細胞の数は一〇の12乗、宇宙の星の数に等しいといわれている、それが新鮮な酸素を求めて痙攣し、脳内麻薬といわれるホルモンを乱放出して、だから首を絞めたり緩めたりして楽しんでいた者が、手加減を誤つて事故死するケースが結構あるのさ。

足でロープを引っ張つたり緩めたりして楽しんでいるうち、足がつったか何かしてね、そのまま究極の昇天をしたつてわけさ。何が他殺なものかね。

だけど、これを証明するのは厄介だぞ、君。まだ学説も定まってないしね。判事というのはコチコチの現実主義者だからね」

光子は穴の開くほど野島教授を見つめた。これが本当に病理学者なのだろうかと。

しかし、この縁によって、光子の運命が大きく変わることになるとは、当然なことだけどこの時は思いもよらなかつた。一二十歳前の乙女によくもそんなエッチな講釈をぬけぬけと垂れたものだと、忌々しく思つただけ。

「ねえねえ、光子ちゃん。……あの偉い先生がいうこと本当かどうか試してみない？」

と小鼻を膨らませていつトシ子を今度こそ大分川に蹴り込んでやろうかと思つた。

その一三 清水紀夫に接見

事務所には午後六時を過ぎての帰還だつた。

母親の遼子は当然もういなかつた。根岸ともみが一人で、執務机で静かに書面に向かつていた。

「あゝあ、疲れた」

光子は自分の机の所へ行つて、どつかりと椅子に腰を下ろすと、机に突つ伏した。光子の机は窓際にトシ子の机の次に並んでいる。トシ子はお茶を入れに給湯室に向かつた。

「どうだつた？」根岸が書面から顔を上げずに訊く。

「本当にあの先生偉い先生なの〜？」さも疲れた風に顔だけ向けていつ。心なしか目が潤んでいる。

「どうして？」

ガバと体を起こして。

「だつて変なことばかりつて、バッカじやないの。それにさ、あたしの顔じつと見て、どつかで会つたことないか？　なんてゆうのよ。ああやつて若い学生をナンパすんだよ」

根岸は書面から顔を上げた。そして光子の顔をじつと見た。それが男のような眼差しに見えて、光子はゾクツとした。

「それで？　事件のことは？」

「あれは自殺でもなくて、本当は事故だつて」

「事故？」

「それがおかしいんだよう」東トシ子がお盆を捧げて現れた。三人分のマグカップと砂糖のステイック入れが乗つていて。「ねええ、光子ちゃん」

それぞれのデスクにマグカップとステイックを配り終えて、自分もデスクに着く。

そして、「コーヒーを啜りながら、教授のいったままをボス弁に報告した。「遺族のことを思いやつて、一応自殺という所見を述べた

けど、本当は——そんな風な口振りだったよね、光子ちゃん

根岸はマグカップを搔き混ぜながら 声もなく 苦笑して、「そ
う」といった。「教授がそういうんだったら、そうなんだろうね
「あきれた」と光子はマグカップを乱暴に置いた。「先生もそう思
うわけ?」

「実績があるからね。検死の方の右に出る者はいない
「ホントに?」

「でも、映画なんかで女人人が絞め殺される時の顔つて、あの苦悶
の表情つて、あれは——あれだよねえ」とトシ子。

「そんなの演出じゃん」

「どっちにしても、本人に訊くしかない」

「え? 接見許可下りたの?」光子が驚いて訊く。

「勾留延長が決まれば、きっと認める。光子に恐喝されて、彼女ビ
ビッてたから」

「 もう!」

根岸ともみのいう通りだった。

五日後に裁判所から一〇日間の勾留延長が認められると、自供が
得られたわけではないけど、検事は接見禁止措置を解いた。
まず逮捕後一二日間は何やかやって接見を認めず、被疑者を孤
立無援においてガンガン攻め立て、一気に自供に追い込むのが
捜査機関の常套手段。罪の意識や家族のことや世間体や将来のこと
で混乱、動搖している時が狙い目である。
これが落ち着いてしまうと都合のいいウソで塗り固めてしまう。
まして弁護士に「都合の悪いことはいわなくてよい」などと防御
権を吹き込まれでもしたら。

それでもなお清水紀夫は微塵の揺らぎも見せなかつた。警察は、
いい逃れのできない確固たる証拠を突きつけることができなかつた。
ガイシャの守山孝明とは無一の親友であり、家にはしょっち
ゅう遊びに行つていたから指紋があるのはあたり前。

新築して間がない中古住宅が安く売りに出ていたから買ったというので、三百万ほど用立てたけど、確かに約束の分割返済が滞っているから急き立てはした。けどトラブルというとこまではいつてない。

死亡推定時刻に近い時間帯に催促に行つたのは確かだけど、そこを見られたのだろうけど、留守だったから引き返した。と、明確に、整然と、警察・検察での弁解録取書で抗弁している。唯一申し開きできないのが、“ロシアより愛をこめて”というワープロ文字で書かれたメッセージだった。これは彼のパソコンで打ち込まれ、彼のプリンターで印刷されていたのである。

任官から五年目と、検事としてはまだ一人前とはいえない東浜明美検事は、隔離しておく意味がないと判断したのであらう。「甘つちやろい！」と、権藤警部などは陰で毒づいたものである。

だけど、新米とはいえ検事という者がいかにビックな行政官であるか、赴任して来た時、県職幹部や税務署長や消防署長や県警幹部・警察署長らなどが、雁首揃えて出迎えたことでもわかる。

これが検事正クラスになると、県下の行政・司法の主だった幹部がみな表敬訪問する。「出迎えないのは知事と裁判長くらいなもの」と、元検事が語っているくらいだ。

そういうわけで、忌々しい思いをしながらも、ゴンタクレの権藤警部も小娘のような東浜検事に頭が上がらない。指揮書に従つて根岸ともみ弁護士と清水紀夫の母親・清水志津子と、それに弁護士・助手の榎原光子の三人を接見室に案内したのである。

「係官が傍に座つて聞いていていいん？」と光子にいわれて、苦々しく井野辺巡查は退出した。

清水紀夫は中肉中背の端正な顔立ちの男だった。母親似であることは、母親の清水志津子 六〇を見ればわかる。

メガネ掛けた上品な顔立ちの清水志津子はまず息子に、「元気そうね」といった。

「まいったよ」と清水紀夫は無精ヒゲのアゴを搔いた。

着衣も胸を肌蹴たシャツと折り畳の崩れたズボンをだらしなく着込んでいる。

「IJの方々が弁護士事務所の先生方よ。色々と力になつて下さるから、何なりとお願ひしなさい」

清水志津子は一年前に夫と離婚している。それ以後は松岡の実家近くに一軒家を借りて住んでいる。

清水紀夫は根岸と光子を交互に見て「お願ひします」と頭を下げた。

「何か不足しているものはありますか?」と根岸は訊いた。

「ありません。充分です」

「取調べで不本意な所はありませんか?」

「まあ……」

「夜は何時頃まで?」

「夕食後、九時頃だつたり、一〇時までかかる」とあります
「いいたくないことはいわなくてよいですから、いいたくありませんと、はつきりいつてください。記憶があやふやな時なんか特にそうです。いったことは記録に残ります。一一いいですね」

「はい」

「亡くなつたお友達とは長い付き合いなんですか?」

「ええ。一〇年以上の付き合いです。出身地が野津原で、小・中学校も同じですしね。勿論同時期ではありませんけど。そういう関係で製鉄所に入つてから親しくなつた」

「三百万円というのはかなり高額ですけど、借用証書は?」

「勿論。返済計画も五年で、無理のないよう年六〇万円といつてで、ボーナス時に」

「それでも余程信用がないと。金融機関でも厳しく稟議される金額を、よく貸しましたね」

「そのことで警察からも色々勘織られて……でも担保といつほどでもないですけど、彼の車を、セルシオの四年落ちですけど、それをもうう」と。「一筆書いてます

「でも、沸るよになつた」

「ええ。一年分。少し厳しくいつたこともあります。でも、殺した
りは、絶対してません」

「わかりました。その意思を貫き通してください」根岸ともみは少
し考えてから訊いた。「亡くなつたお友達は——これはいいにい
ことかも知れませんけれど——顔に赤い色を塗つたり、そういうた
変わつた様子は前にありましたか？」

「……いえ。でも……」

「でも何です？」

清水紀夫は周りを見回す素振りをしてから、声を落としていう。

「足の指を赤く塗つっていたのは見たことがあります」

「そのことは警察には？」

「まだ、いつてません」

「どうしていわないのです？」

何か隠してゐるなど、根岸も光子も思つた。母親が傍にいることも
あるし、この「」とほ日を改めて説くことにした。

前に続く

翌日の朝、一〇時の休憩の時、根岸ともみはいつた。

「明日から井川拓馬という若い先生が手伝ってくれることになりました。年齢は三二歳。司法修習を終えたばかりの新人の先生で、大坂暮らしが長いそうだけど、故郷に骨を埋めるつもりで帰つて来るそうです」

大きなテーブルに陣取つてコーヒー・紅茶を飲んでいた遼子も光子もトシ子も、唐突な話に啞然とした。ボス弁は弁護士会館から帰つて来たばかり。

「え～っ」と光子。

「大分の人ですか～」といつて東トシ子は席を立つ。

ボス弁にコーヒーを入れる為だ。フットワークが軽いのが取り得の女。

「中津市相原つて所らしい。県北になるのかな？」

「福岡県との県境ですよ～」

「急な話だわね」と遼子。

「急ついでで悪いけど、今晚、歓迎会を兼ねて夕食をともにしたい。みんな都合はどう？」

根岸を含めてみな相手のいない孤独な女、都合なんか訊くまでないものである。

「どこでするの？」遼子が訊く。

「都町のフグの店が近くでいいと思つ」

遼子は複雑な顔をした。（もしや？）と思う。

「机はどうすんのよう？ もういっぱいじやん

「井川先生には遼子さんの部屋に入つていただく。事務も二つに分離して、社名も『根岸・井川法律事務所』ということにする」

「それって別会社ってことなん？」

「そういうわけでもない」

「そういうの、今流行ってるんだよう」トシ子が現れて、ボス弁の前に「一ヒーカップを置きながらいう。

光子は浮かない顔をして、「それならトシちゃんの方が、年齢的にいつていいんじゃないの。 その先生、独身？」

「そう聞いている。弁護士会の福沢事務局長の紹介なんだ」

「だつたら、年齢的にも、お互い適齢期もあるし、トシちゃん相手いないし、ちょうどいいじゃん」

「どういう意味よ。それじゃわたしが相手いなくて困つてゐるようにな聞こえるじゃない。遼子さんだつてヤモメだよ」

「ふふふ」根岸は苦笑して、「じゃ、そういうことだから、夕方七時に都町の『ふく屋』に集合」といつて「一ヒー」に口をつけた。

遼子はやはりそつかと思つた。

光子はどうせなら夜桜でも見ながら平和公園辺りですればよいのにと思う。それに魚より肉の方がいいと、不満気な顔であった。

東トシ子は何着でこうかと考えてゐる風だつた。

七時には『ふく屋』の一階六畳間に設えられたロの字型の席に、遼子に光子と、東トシ子が向かい合つて座つていた。それぞれそれなりに気を配つた衣装で。

がしかし、床の間を背にして座るべき二両人がまだ姿を現さなかつた。先付けはそれぞれの前に並べられている。

東トシ子はモカブラウンの長袖シャツに明るい色合いのスカートという、意外とシンプルな衣装ですまして座つている。夜はまだ冷えるので千鳥格子のジャケットも持参、横に置いてある。

光子の方もミント色のTシャツに白っぽいパンツというカジュアルな格好で、母親の遼子だけが、何だか格式ばつた黒っぽい地味な衣装だつた。

やや暫らくして、根岸ともみと井川拓馬が入つて來た。

長身でスタイルのいい根岸のあとに続く男は、上背のあまりない風采の上がらない中年太りだつた。

けど、正面から見ると、つり上がり気味の目に信念めいた光を宿していて、軽んじられないと思わせるものがあった。

腰を下ろす前に、根岸が一人ひとりを紹介した。

「事務員さんの榎原遼子さん、そして、助手をしてくれている、その娘さんの光子ちゃん、まだ一九、来年が成人なんだよね。それから、こちらが、同じく事務員さんの、東トシ子さん」

「井川拓馬といいます。よろしくお願ひします」

両名は上座に腰を下ろした。

仲居が一人で忙しく飲み物と料理を並べる。

ヒレ酒が井川と遼子に振舞われ、ほかの者は——根岸ともみは酒を飲まないからジンジャエール、トシ子と光子はウーロン茶で、乾杯した。

この場所は、かつて夫の城島竜一とともに、今日のようだ根岸ともみと初顔合わせしたところである。年老いた方の仲居はその時の仲居だった。遼子は感慨深気に見回す。

仲居も覚えていて、根岸ともみと遼子を、親しみをこめて見た。根岸ともみは、そんなことは忘れてしまったかのように、知らん顔で、誰もいない正面を向いて、ジンジャエールを飲んでいる。

「大学はどちら?」と、遼子が仲居に会釈してから、井川拓馬に訊いた。

「関学です。卒業して商社に勤めてましたんですけど、何んかしつくり来なくて。急に思い立つて、司法試験の勉強を始めたゆうわけですわ。いやあ、苦労しましたわ」

「何回目で合格されたんですかあ?」トシ子が横から質問した。

「三回目でようやくですわ。もし、それで駄目ならもう中津に帰つて、百姓でもしようか思つてましたんやけど、運よく引っ掛かりましてん」

「それから、どなたにも付かずに?」遼子が訊いた。

「いえ、吹田の矢田恒之先生の事務所で半年ほど働かせてもらいましたんやけど、どうもしつくり来なくて」

チャランポランな男でなければよいがと、遼子は思った。顔はそんな風な顔はしていないけど。

光子は急に心配になつて根岸に訊いた。「見晴台案件はどうなるの?」「

ボーと前を向いて空ひな根岸は、魂を呼び戻されて「何?」と訊く。「何かいつた?」

「もう一、「

「見晴台はびつちがやるのか——つてことだよね、光子ちゃん」

「あれは——引き続き光子と、井川君でやつてもいいわ」

「先生は?」

「わたしは来週からちよつと名古屋で出張してくれる

「何しに?」

「ちょっと、光子、何で」と訊くの。先生は先生でお忙しいんだ

から「遼子が奢めた。

(どうだか) 光子は心の中で毒づいた。

「見晴台案件つて、今騒いでる事件のこと?」と井川拓馬が訊く。

「そう」「トシ子が答える。

「へえー。面白そうな事件じゃないですか。あれをぼくにもやらせてもらえるんですか。やつたあ!」

やはりどつか軽いところがあるなと遼子は思つた。

そしてまたしても根岸ともみは、清水紀夫の勾留期限が切れるギリギリまで、帰つて来ないことになるのである。

その一四 イソ弁・井川拓馬

週の頭から光子は井川拓馬と行動を共にすることになった。残された日にちを考えるとぼやぼやはられない。

いつもやきもきさせられて、損な役回り——ばかり！

と、光子は朝からご機嫌斜めであった。そのせいばかりでもなく、家から出がけに母親とひと悶着あつたのである。来年の成人式に何を着て出席するか、着物にするか洋服にするかというバカバカしいことで。

いや、それ以前に、胸に妙なざわめきがあつて、やきもきしているのは、そのすり替えにほかならなかつた。

「どしたんですね？　えらい機嫌悪そうですね。アメ食べますか？」
といって井川が助手席からアメを差し出した。「いらっしゃった時はこれが一番ですねん。黒砂糖アメ」

事務所で事件の仔細を説明したのち、これからどうするかを協議した結果、井川の発案で、死亡した守山孝明の人物像を掘り下げてみようということになつて、彼の家の周辺の聞き込みに向かつているのである。

井川は勢家町の春日神社の裏手にアパートに見つけて——実際は根岸ともみが前もつて探しておいたものだつた——日曜日に光子らも動員されて引越をすませている。男の独り身、驚くほど荷物は少なかつた。軽トラ一台で運ばれて来ていた。

「ありがとう」

光子はアメを受け取つて、口に放り込んだ。

「ね？ 黒砂糖の甘さはひと味違いますやろ？ 学生時代にあつちこち放浪して歩いて、沖縄でサトウキビ畑も見たんやけど、ざわわ、ざわわ つて歌、ありますやろ。人間の愚かな嘗みなんかに関係なく、太古の昔から、風は吹いてんねやなつて氣イしましたわ

初めて見た時は眼がつり上がりついていて、やはり司法試験に合格するような頭のいい人は顔つきからして違うなあーーと思つたけど、あれは精一杯眼を見開いていたからだらうか。今は眠たそうにマツゲだけの線になつてゐる。

「井川さんつて、弁護士会の事務局長たとどりこつ関係なんですか？」

「何も関係あらじません」

「え、でも？　じゃあ、どうしていつの事務所に来るようになつたの？」

「ああ、それは、県の弁護士会に登録したい伝えた時、事務局長の黒田氏が、根岸ともみ事務所から若手の弁護士の募集が出ているけど、びづへ、といわはるから」

「え？　募集が？」

「だいぶ以前から出てたみたいでっせ」

そんなに自分はあてにされてないのだらうかと、光子は思つた。それとも自分がもつと自由に出歩く時間が欲しかつたのか。そんなに仕事が多くあるわけでもないのに。

「ぼくとしては地元の中津の方がよかつたんでっけどね」

光子はアメ玉をガリガリと噛み砕いた。

「あつ、光子ちゃん！　噛んだらあきませんがな。アメは口の中で転がすように舐めるもんぢやせ。噛んだらこちどきになくなつてしまます。学生時代のぼくなんか、アメ玉一つで、一日空腹を紛らわせたことがありますんやで」

(ほつといてよー)と光子は乱暴にアクセルを踏み込んだ。

前に続く

見晴台から眺める景色に井川拓馬は子供のように歓声を上げた。

「いやあ、ええ景色ですね……」

「じみこみした都会に住んでいたから、特別に感慨深いものがあるのだろう。晴れの日ならもつとよいのだが、生憎薄日がさす程度の天氣で、おまけに黄砂でけぶつてもいた。

車は崖っぷちに停めて、そこからは歩いて向かうこととした。車でも行けるけど、団地の中は道が狭く、急勾配もあり、駐車するスペースがない。まさか、子安觀音の駐車場に停めるわけにもいくまい。守山孝明の家はそのすぐ下にあるのだが。

「おお、あれですか？」息切れしながら井川がいう。「独身の家には勿体ないような家ですなあ。あれが一五〇〇万とはまた、中古とはいえ、えらい安いなあ——大阪なら一、三倍はしますよ。ここはまた一番高い所にあるだけあって、素晴らしい眺めやないですか……」

門にはまだ黄色い規制線が張られてあった。家は洋館風の一階建ての造りである。庭の手入れはしていないので、庭木はのびのびと枝葉を広げている。ガレージにはシルバーグレーのセルシオが駐車されてあつた。

一人が家屋敷を眺めまわしていると、右下の家から老婆が出て来て不審そうに見る。

そうこうしているうちに下からぞろぞろと年寄り子供が集まつて來た。

「あんたどう、何事な？ そこん氏はおらんで」と老婆の一人が訊く。右下の家の老婆である。

「ええ、わかつてます」井川が答えた。「何や事件に遭われたそうですねえ」

「そうじゃ、殺されたんで」

「犯人は捕まつたそうですが、よくここに来てたんですねやろか?」

「ああ、よう見かけたで。 でん、あん氏がのひ……」

「そんな感じには見えんかったですか?」

「うん。 一人とも仲がいいかった、何時間もソレジ、夕涼みしながら、楽しそうに話しあつた」

「うんにゃ」といつて別の老婆が割り込んで来た。左下の一階家の老婆である。「わしゃあ、見たで。 一人が観音様の駐車場じ、ケンカ腰じ話しょんのを」

「ほかにも来客はあつたんですやろか?」

「そうじやなあ、家に上がり込むような者は見んかつたなあ。 玄関先じ話すよつな客なら何遍か見かけたけど」右下の老婆。

「うんにゃ、わしゃあ、見たで。 若いオナゴが家に入つて行くのを左下の老婆がいつそしあしゃり出た。「そちかり、一人の女が一緒に出ち行くのを」

「若い女性の客は二人連れだつたんですねか?」

「いんねとなあ、一人ちゃ」

「でも今一人出て行つたと」

「——うてあいなんなぢや。 こんバアはそげんこついうんぢや。 あることないこといふらしち歩くんぢや」右下の老婆がチャチを入れた。「大方、そこん氏んハアジヨ 母親 と娘ん子んこつう、いよんのじやう」

「また、オサキがすもしれんこつう。 こん田じしつかり見たわい」「何時頃のことですやろ?」

「決まつちゃんじやねえか。 丑三つ時じや」

「丑三つ時じやと、夜中の一時頃ですやう。 そんな真夜中ですか?

?」

「ああそうじや。 決まつてそうじや」

「といつと、何度も見たといつことですか?」

「三回見た」

「やうすると、おバアさんはそんな時間に、この一段と高い所で何

してはつたんですね?」

「家ん一階の窓から見張つとつたんじやがね」
老婆は自分の家の一階窓を指していつ。

「何をですか?」

「そん女が出て来るとこひれをじや」

「なるほど。」「へへん」

右下の家の老婆が近づいて来て、井川に耳打ちした。「痴呆が入
つちよるけん、まともに聞いたらいけん」

近所の聞き込みからは、それ以上の情報は得られなかつた。夫婦共稼ぎがあたり前の時代である。やはり夜でないと、毎日中はどこでも老人と子供しかいない。というか、子供でさえ、今や日曜祭日以外は学校や幼稚園や保育園に行つていて見当たらぬのが現状である。団地内の公園にも入つ子ひとりいなかつた。

「どう思います？」と車に戻りながら井川が訊いた。「ぼくらはいきなり大変な手掛かりを掴んだのと違つやろか」

浮かぬ顔で光子は、「だといいけど……認知症のお婆ちゃんのいうことだから」と、いつになく悲観的だつた。（そんなに甘いもんじゃないわよ、タツの時はあんなに苦労したんだから）といつ思ひがある。けど、それにもまして、黄砂にけぶつた景色のように、気持ちがブルーなのだ。

しかししふと、清水紀夫の言葉を思い出した。

「……そういうえば守山孝明が足の指を赤く塗つているのを見たつて、この前の面会で清水紀夫がいつてた」

「え？ ほんまに。それやつたら、もつ決まりでっしゃる」

「女装趣味つてこと？」

「それ以外に考えられますか？ 顔を赤く塗るやうのはどういうわけか知りませへんけど」

「でも、指ついてた……けど、爪のことにつたのか。……若い女性というのも、女装した男？」

「そういふことになりますな。もしかして、それが清水だつたりして」

「それはないわ。だとしたら自分からそんなことい出す筈ないもの。それに、どう扮装を凝らしたつて、あの四一歳の清水紀夫が若い女性には見えないと思つ」

「それやつたら、もしかして清水は守山の秘密をもつと知つてゐる

と違いますか

あの様子から光子もそんな気がした。友達の名前のために口をつけ
んでいるのかも知れない。

「それに——ひょっとして、清水に訊けば、その若い女性——じゃ
なかつた女装の男のこと、思い当たる者がいてるかも知れません
よ。それほど親しい間柄なら、これから面会に行つて確かめましょ
う」

「ちょっと待つて」といつて光子は肩に掛けたショルダーバックか
らケータイを取り出した。

今日は春めいたカジュアルな格好である。スカートを穿かないのは
はいつもと同じ。白いブラウスに、ジーンズも卒業してカーキ色の
スラックス。その上から薄緑色のカーディガンを羽織つている。
井川拓馬の方は野暮つたシャツとズボンにジャケット。色はほ
ぼウグイス色に統一している。

地検の番号は登録してあるので、すぐに係りの者が出た。

「根岸ともみ法律事務所の者ですけど、東浜検事お願いします」と
いうと、一分と待たずに検事が出た。

「あ、検事さん、光子です」と、馴れ馴れしい。

指揮書を貰いに行つた時から打ち解けて、そうなると体躯会系の
図々しさが前面に出る。

「今日これから清水紀夫の接見できいかなあ

井川は、検事にそんなタメ口を利いていいのかという顔を寄せて
聞いている。

「ええ、そうなのう。じゃあ、それでいいから、お願ひ」カチャ
リとケータイを閉じて光子は澄ましていう。「取調べが午後三時で
休憩に入るから、そのあと一五分間ならいいって」

「凄いなあ、光子ちゃん」井川はえらく感心した。

そうなると、それまでの時間をどうするかである。お昼まではあ
と一時間半あるし、午後からも一時間ばかり空く。

そこで思い立つたのが、変態学の教授。早速、ぶんたい分大に電話して野

島教授にアポを取る。

これも午後から一時間くらいなら空くところで約束を取り付けた。地検に寄つて指揮書をもらい、事務所で弁当を食べて、それから旦の原に向かえばちょうどよい時間になる。

「へー。大学の先生がねえ。うふふふ。でも案外そうなんと違いますか。人間十人十色ですさかいに。そら色々ありますよ。女装趣味にしたつて、大阪にはそれ専門のクラブが幾つもありますからねえ」

「それって変態なの？」

「まあ、変態つちゃ変態やけど、そのほかは全然ノーマルですからねえ。男装趣味の女性クラブもありますよ」

「えー そうなの」

「都会はそういうの多いんですけど、やはりどこにでもいるんですね。まさか都町にそんなクラブはないやろね」

オスカルモードの根岸先生はほとんど男のようだけど、先生も男装趣味だらうかと光子は思つた。でも、そんな筈はない。それじゃあ、オハラモードの、あのイヤラシイほどに妖美な先生は何なのか——ということになる。

今は旦の原の大分大学に向けて国道10号線を走っているところだった。運転しながら、母の遼子がこの間ふと漏らした言葉を思い出した。

先生はいうにいわれない問題を抱えているのよ。

そういうえば、ずっと以前にも、母が「先生も、女なんだから」といつたことがある。先生が女なのはあたり前である。なのにわざわざそんないい方をしたのは、今考えればおかしい。もーーというのは、うちちらと一緒にという意味と取れる。わざわざそんな言い回しをする必要がどこにあるう?

「どうしました?」

「え?」

「えろう考え込んで」

「別に」

光子は気付いていないけど、今回妙に胸がざわめくのは、かつて、父親の法律事務所に見習いとして根岸ともみがやつて来た時と、今回井川がやつて来たのとが、状況が似ているからである。

そして同じように、根岸は慌ただしくどこかへ出掛け行つた。父親と同じように。きっとこれからもちょくちょく出掛けでは——そうしてしまいには帰つて来ないことになるのではないか——もう何も失いたくない——という無意識の恐れ、深層心理の表れだつたのだ。

それから光子は押し黙つたまま大学の守衛がいる門の所までやつて來た。そこにはこの前のニキビ面の学生が待ち構えていて、教授が待つ学舎に彼らを案内した。

野島教授は今回は白衣ではなく、グレーの背広姿でスチール机に向かつっていた。肘掛け回転椅子をあぐらさせて、入つて来た二人を相変わらず長い顔で、アゴを引いて上目使いに見た。

「こちらは事務所の井川弁護士です」光子が井川を紹介した。

「井川と申します。お世話になります」

「まあ、掛けなさい」と野島教授はいった。

一人はそこらにあるパイプ椅子に腰掛けた。六畳くらいの広さの部屋に、書架や、ゴチャゴチャと色々なものがあつて、スチール机もほかに三つばかりあるけど、誰も座つていなかつた。

「何か、掴んだのかね？」

「はい」

「あ、そう。早いね」

「それでまた、先生のお考えを——」

野島教授はじつと光子を見つめた。

「あのう……死んだ守山孝明さんですけど、どうやら女装の趣味があつたらしいんです」

「ほう」

「殺人容疑で取り調べられている清水紀夫がいうにはですね、守山さんが足の爪を赤く塗っているのを見たことがあるって。近所のお

婆さんも、女装した男と一緒に女装した守山さんが深夜に出掛けるのを見たつていいます。でもこのお婆ちゃんは少し痴呆の気があるらしいですから、信じてよいものかどうかわかりません。三回見たといつております。自宅の一階からです。しかも決まって丑三つ時に——ずっと見張っていたというんです」

野島教授は上目蓋に押し潰された垂れ眼から光子を見つめて、「君、旧姓は城島だね」といった。

「ええ、そうですけど?」光子は怪訝な顔をした。

「ちょっと調べさせてもらつたんだ。やはりそうだったね。初めて君を見た時、その眼差しがね——」

「父をご存知なんですか?」

「ああ、知つてゐる。広島地検におられた時が最初だつたかな? それから各地で三、四度ばかり一緒に仕事したことがある——といつても、ぼくは検死が専門だから、言葉を交わすことは滅多になかつたけどね。 そうか、それで、司法試験の勉強をしてるんだね」

「いえ。わたし、頭悪いから、それは無理。警察官志望でしたけど、父や叔母のことがあつて、何度も挑戦しましたけど、駄目でした。だから今は根岸先生のお手伝いをさせていただいています」

「あ、そう……」

「それで先生、それだけの情報なんですけど——あ、それから清水紀夫に面会した時の様子では、ほかにも何か知つていて、隠していられるみたいでした。死んだお友達の名誉の為に。」

——ですからこれから、三時に面会して、このことをぶつけてみようかと。その前に先生の「こ意見をお聞きしたくて。このままでは、清水紀夫は殺人容疑で起訴されてしまいます」

野島教授は、「その一緒に出掛けた女装の男というのが清水紀夫ということは考へられないのかね」と、当然の疑問を口にした。

「ええ。それは考へにくいくらい思います。自分からお友達が足の爪を赤く塗つてたことを漏らしてますし……」

「あ、そうか。そうだなあ。大したもんだ。ウジャウジャいた警察

官でさえ掴めなかつたことを、よく掴んだね。いやぼくもね、顔を赤く塗つてゐるところから、何があるなとは思つていたんだ——うむ」と教授は腕を組んで考え込んだ。

眠そうな顔で五分は考えてから口を開いた。

「ぼくは心理学については門外漢なんだ。それを前提にいわせてもらえば、顔を赤く塗つてゐるところから当初ぼくは、とある小説の模倣ではないかと思つたがね……そうか。あれは物質化だったのかな？」

「物質化？」井川が繰り返した。

「うん。突き詰めると人間生命も物質に還元される。炭素元素と化してしまふんだが——その先がまだあるということは置いておいてだよ。哲学や宗教も門外漢でね。タバコモザイクウイルスのように、生物と無生物 鉱物 の間を、行つたり来たりする厄介なのがいるからねえ。

顔を赤く塗つたのは物質化の象徴かも知れないね。お面を被ると同じ。そして、タバコモザイクウイルスじゃないけど、生死の項目を行つたり来たりしながら、禁断の、ドーパミンなどの快感物質を不法に享受していくんだねえ」

「はあ～？」と井川。

光子は、（ああ、駄目だわ、来るんじやなかつた）と後悔した。この先生も痴呆が入りかけている。

「それはさておき、君らのいう女装趣味だがね。それは、まず受精卵にまで遡るるにしょうか。それが子宮に着床して、細胞分裂しながら胎児に育つてゆくんだが、初期の胎児の性器は——いや、これからは純粹に学問だから、若い女性の前でも憚らざいわせてもらうよ。だからその初期の胎児の性器は未分化でね、どういうわけか、女性器然としているんだな、これが。そこから遺伝子の作用によつて男性ホルモンのアンドロゲン、女性ホルモンのエストロゲンが放出されて、男性化、女性化が生物学的に始まるんだ。

そして出産。分化した性器に従つて心理的にも男性化、女性化が

進み、第二次性兆期を経て、男女に成るつてわけさ。発達心理学についてもぼくは門外漢だけどね。憚らずにいわせてもらえば、女装趣味は心理的未分化への回帰じゃなかろうかと思うんだ。フェチズムの観点から、色々論ずる者もいるけどね。捨て去りしものへの郷愁というか。

未分化への回帰といえば、カリブ海のある島では、第二次性兆期に入った少女たちが軒並み、それまではどこから見ても女だった少女たちに、春になると雪を割つてツクシが頭をもたげるよう、ペニスがニヨキニヨキ生えて来て、雨後のタケノコのようにあれよあれよと生長し、島の女の子がまる」と男の子になってしまうらしんだ。亀なんかだと、砂の中の温度で性別が決まるらしいけど、印度にもなんかそんなところがあるらしい。

その道のタイトがいうからウソではないとは思うんだけどね。ぼくはこの眼で見たことしか信じないタチだからさ、信じる信じないは君らに任せるけどね。ぼくは生きた人間のいうことより、死んだ人間のいうことを信じる方だからさ」

光子と井川はあきれて顔を見合せた。もうこれ以上何も訊くことはない。一刻も早くこの先生から離れないと、頭がおかしくなりそうだった。

丁重にお礼をいって立ち去ろうとすると。

「ああ、君ねえ。九月にまた警察官募集がある筈だから、もう一度受けてみなさい」と光子にいう。

「でも、また、どうせ駄目だと思ひます」と光子は力なくいう。
「いいから、騙されたと思って受けてみなさい。願いが強ければ、時の氏神というやつが必ず現れてね。願いは叶つものなんだよ」
「はい」と光子は適当に答えた。

この教授がかつて、父・城島竜一と叔母・城島民子を窮地に陥れた事件の検死をし、そして、父によって遺棄された謀殺人・青山姪臣おみ根岸ともみの一覧性双生児の弟てつの白骨死体を検死したことも、無論、知る由もなかつた。

あの時教授は警察庁に籍を置く警視長だった。青山姪臣を検死した時に、その骨の形狀に疑義を抱き、遺伝子検査まで試みたけど、
××男性という結果が出たので、それ以上深くは追求しなかった。
(インチキ教授!) と、いう思いをまた強くした光子だが、野島教授
の方は、(血脉というのは悔れないなあ……風貌はそうでもないけ
ど、あの眼差しは城島検事そのものではないか) と思いながら戸口
の所までついて行つて、ラボから見送つたのである。

そして、また頭をもたげた疑義を晴らすべく、一覧性双生児の姉、
根岸ともみに一度会つてみようと思つ——。

その一五 容疑者・滝田学

接見時間はわずか一五分しかない。光子は慌ただしく清水紀夫に井川弁護士を紹介した。

「井川拓馬いいます。まだ新米弁護士ですけど、ぼく信じてぼくのいう通りにしてください。まず最初にこれだけはいっておきます。自分の身は自分で守るやうことです。ぼくらはお手伝いすることしかできません。よろしいですね」

「はい」

清水紀夫は今回は身だしなみを整えていた。ヒゲもちゃんと剃つてある。井川の顔を不安の色を滲ませて見る。

「ゆうときますけど、検察に起訴されたらおしまいだと思ってください。日本の刑事裁判は、結果からいえば、検察官が裁いているようなものですよ。検察が起訴した被疑事件の九九・九パーセントは有罪になってしまいます。求刑の一・二割落ちゆうところで量刑が決まります。検察官も裁判官も法律のプロでっさかいに、お互の力量を信じてます。手続きを遅滞なくスムーズに運ぶことが、彼らの最大の眼目であり、職務であり、それが人事考課につながります。無罪判決を出されたり、逆に検察に控訴されたりしたら、人事考課が下がり、両者の出世や俸給に即響くわけです。裁判官はわかつてくれるだらうなんて思つたら、大間違いですよ。眞実なんて、当事者以外誰もわかりやしません。有罪にするために集めた証拠から、推量するしかないんですね。よろしいですね？」

「は、はい」清水は井川をまじまじと見つめた。

「ではお訊きします。守山孝明氏には女装趣味がありましたね？」

「は……はい」

「それで、その手の同好の士が集まるクラブかサロンのやうなものがあつて、真夜中に出掛けていた」

「……そこまでは知りません」

「そうですか。では彼の交友関係の中にそれらしき者はいませんか？」彼の家に来て上り込む程度に親密な関係の友達

「……」清水は眼を細め、半ば口を開けて考えた。

「いいですか、人のことを考へてる余裕なんてありませんよ。このままだと間違いなく起訴されます」

清水は上を向いたり下を向いたりして考へている。時間がないのにと、光子はじれつたく思つ。

やがて決心したように清水紀夫はいった。

「滝田という若い男が、多分そつだと思う。守山は、人付き合いはよい方ではないので、家に上がらせるほど親しいのは、ぼくをおいて、そいつぐらいなものだと思う。彼の家で一度だけその男と顔を合わせたことがある」

「滝田は滝の田んぼですね。下は？」

「わかりません。彼がそつ呼んでたのを聞いただけで、名字もそんな字だかどうだか。でも、住んでる所は多分、大在の文理大の近くだと思います。もしかして文理大の学生かも知れない。ケータイで話している時、よく大在とか文理大とかいう言葉が出た」

「どういう容姿です？」

「小柄で顔も小さく女にしたら可愛いだろうなといつような感じでした」

「そうですか。ほかに何か参考になるようなこと、ありますか？」

「車　　そいつの車はセレナのホワイトだった」

「セレナのホワイトですね。ほかには？」

「言葉は沖縄弁じゃないかと思う。サーーという語がやたら語尾に付いてた」

「なるほど。これは参考になります。ほかには？」

「まあ、そんなとこです」

清水は重い荷物を下ろしたのか、気付かれないよう」「ほーっ」と安堵の息をついた。額に汗が光っているのを、光子はハンカチで拭いてやれるものなら拭いてやりたいと思つた。

だが、井川にとつてはこれからが肝心だった。

「ところで、守山氏はああゆう死に方をしましたんですが、あれについてはどう思ひりますか？」

「詳しい事情がよく飲み込めないんだけじ、ぼくが殺してないといふことは、ほかに誰か真犯人がいるということですね」

「自殺か事故ではないかゆう話もあるんですよ」

「自殺はないでしょ。まずないと思ひますよ。だって、ぼくに借金があるんだから。あこつはそんなやつじゃないですよ。それに事故？」　とはどうこうことかな？」

「それは話が長くなります。その話は今度にしましょう。では殺人だとして——実際、警察があなたに対する殺人容疑の根拠の一つとしているのんが、ワープロ文字で印刷された“ロシアより愛を込めて”という置き文ですよね

「ええ、そのことで随分変な風に勘織られて——でも、ぼくのパソコンから打ち込まれ、ぼくのプリンターで印刷されているらしいからね」

「そうなんですかね。どうこうことですやろ」

「ぼくもわけがわからぬ」

「あなたのパソコンはどこに置いてあつたんです？」

「母と同居している松岡の家。母が離婚したので、ぼくが転がり込む形で、五年前に同居するようになつた。放つとけませんからね。母は病弱だし。父はぼくを忌み嫌つてた。ぼくも父が嫌いでしたから、その点はよかつた」

「あなたもバツ一でしたね」

「ぼくは一五で結婚して三〇で離婚した。子供はいません」

「じゃあ、松岡の家でお母さんと同居するまでは、五年前まではどこにいらっしゃいました？」

「明野のマンションに。されば売りました。それで守山に貰すお金があつたんですね」

「そのマンションに守山さんは出入りしたことがありますか？」

「そりやもづ、しょひちゅう。彼も両親と近くのマンションに住んでましたからね」

「はいはい。なるほどね」

ここで時間が来てしまった。係官が「はい、時間ですよ～」といつて部屋に入つて來たのだ。これが一般的の面会者だと、係官も横に着座してメモを取つたりする。

中島4条の事務所に帰つて昼食。

六畳の休憩室は賑やかだつた。真ん中に一メートル×三メートルの木製テーブルがあつて、背もたれのある椅子が左右に六脚あり、それに事務員の遼子とトシ子、反対側に井川と光子が座り、左斜め前方 純湯室への入り口左 の棚の上にある21インチのテレビを観ながら弁当を食べる。

遼子と光子は手製の弁当。井川とトシ子の独身組は配達の弁当だった。

「それで、うまくいきそつなの？」と遼子が井川に訊いた。

「鬼が出るか蛇が出るか。まずは滝田という男に会つてみるしかありません」

「偉い先生が事故つていつてるんだからあ、それを証明する方が早いんじゃないのかなあ」トシ子がいう。

「そんなのどうやって証明します。確かにその手の事故は何件か起きてますよう。けどね、そんなの本人しかわからないじゃないですか。石部金吉の裁判官がですよ、そんな特異なことを考慮するわけないじゃないですか。その前に検察官に笑われてしまりますわ」

「じゃあ、井川先生は真犯人がほかにいるっていうんですか？」あくまでトシ子は納得しない。

「ええ、勿論です。滝田という男がカギを握つてるような気がします。その男に会えば何らかの手掛けかりが得られる思いますわ」

「光子ちゃん、どう思う？」トシ子が光子に同意を求める。

「わかんない」光子はあっさり答えた。「でも、あのワープロ文字の件はどうなるわけ？」井川に訊く。

「あれは清水紀夫がいつてましたやう、五年前のマンション時代には、しおりちゅう守山孝明が遊びに来てたつて。その隙を見てー」というか、清水がない時にパソコンのワードに打ち込んで印刷

したゆうことでしゃらなあ……」「何の為に？」トシ子。

「そらわかりまへん。それを何者か——といつても守山の家に遊びに来てたんは清水と滝田くらいなものでさかいに——滝田が見つけて」

「清水紀夫に罪を着せる為に——ってゆうの?」トシ子は今度は遼子の方を見る。

弁当を食べ終わつてお茶を飲んでる遼子は、「その滝田つて子を見つけられるといいけどね」という。

「午後から大在に捜しに行きましょう」「井川が光子にいづ。

「手掛かりはあるの?」遼子。

「ええ、幾つかあります。まず、文理大学の事務局に電話して、沖縄出身の滝田ゆう学生がいてへんか訊ねますわ。いてへんようだつたら、その辺のアパートに聞き込みをかけ、それでもつかめないようであれば、国道197号線沿いから、セレナのホワイトが通りかかるのんを待つ」「何だか大変そうねえ」と遼子。

「そら大変ですよ。いつたん嫌疑をかけられたら、巨大な国家権力の物量作戦を相手に、被疑者には捜査権を持たない我々弁護人しか味方はいてへんわけですから。予算もありませんしね」

「夜中までかかるのう」トシ子が心配そうに訊く。

それは母親の遼子としても心配である。

「徹夜になるかも知れまへん。車の中で食べるもの用意していただけないと助かりまっけど」

「それはちよとねえ」とトシ子が遼子を見ていづ。「嫁入り前の娘と、独身の井川先生が車の中で夜を過ごすなんて」

「あははは。そんな心配いりませんて。人畜無害の井川で通つてしまさかいに」井川はいよいよマツゲだけの眼を細くして笑つた。「アメちゃん食べますか?」

と、黒い包み紙に包まれた黒砂糖アメを一人の前に投げてよこし

た。

物事がうまく行く時というのは万事が思い通りに運ぶものである。文理大の事務局に電話すると、確かに滝田という苗字の学生はいた。しかも沖縄県出身というからほぼ間違いないものと思われる。

井川が包み隠さず事務所の名前を出して、真っ向から問い合わせたので、事務局員も個人情報に配慮することなく、工学部一回生の滝田学であることを明白したのである。「呼び出してもえませんか」と厚かましくいう井川に、ちょっとと待ってください」といつて間を置き、「今、ゼミの最中ですから、一〇分後にもう一度かけ直してください」といった。

そしてきつかり二〇分後に電話すると、滝田学本人が電話に出た。悪びれた様子はない。そこで、夕方五時に滝田が指定する喫茶店で待ち合わせる約束を取り付けた。

何というあざやかなことであろう。オフィスにいて何億もの商品を売り買いして、3パーセントのペーパーマージンを稼ぐ商社マンの手際よ。

風采の上がらないとぼけた顔の井川拓馬であるが、遼子もトシ子も見直したようである。性格も悪くはなさそうだし、これは存外頼りになる先生かも知れない。とりあえず今日の夜の心配がなくなつて、二人とも安堵したようである。

光子の方は違った。アメ一つで騙されではない。細めたマツゲだけの眼から母・遼子を見る眼が気に入らない。三歳まで独身というのがどうも一癖ありそうで油断ならない。母もトシ子もアメ玉一個ですっかり無防備になつてているけど、友達の親は仕事仲間に缶コーヒー一個奢つてもらつただけで、三〇万もする健康器具を買わされる破目になつたというのだ。

「さて、それでは光子ちゃん、時間調節に中央署にでも行ってみますか」

「また接見？」

「違いますがな。滝田に会う前に、滝田に関する情報を刑事から仕入れておくんです」

「え？ なに？ 警察は滝田のことも取り調べてるってこと？」

「あたり前ですがな。当然ガイシャの交友関係は全部調べてますよ。その中から清水紀夫が有力な容疑者として捜査線上に浮上したわけです。滝田学が容疑者にならなかつた理由がある筈ですからね」

「それはそうだわねえ」と遼子が「コピー機のところから口を出した。考えてみれば、滝田は一度警察に洗われているわけだから、下手な小細工なんか必要なかつたわけだ。手っ取り早く警察に訊けばもつと早かつたのでは——と思う。

「でも中央署の権藤つてゆう警部は、気が荒いから、気をつけた方がいいわよ」トシ子が執務机からいう。

「ははは。そういうのはかえつて扱い易いんです。そういうのに限つて単純だつたりして、怒らせたら本音が出ますさかいに」「じゃ行こう」と光子はバカにされたような気がして、せっかちにいった。

「何や？ 滝田？」滝田学がびごえしたちや」と、短髪凸凹頭の権藤警部は濁声でいった。

ちょうど刑事部屋から出て来たところを掴まえたのである。当然井川は面識ないけど、光子はボス弁と清水紀夫に初めて接見した時に一度会っている。

向こうも覚えていて、「ねえちゃん、今日は何事かえ？」と向こうから声をかけてきたのだ。一人連れだつたけど、井川が名刺を出して、「滝田学について少々お伺いしたいことがあるんですが」といつたものだから、連れを先に行かせて、刑事部屋の応接室に案内されたのである。

「滝田学については何の嫌疑もなかつたんでしょうか？」と標準語で井川が訊く。

「ああ、何も？」と怪訝な顔で権藤警部。

「アリバイはどうでした？」

「アリバイ？ どげえしちそげんこつ訊く？」

「ええ。それが、依頼人のいうにはですね。自分は事件に関係してない、無実だというんです」

「そらみなそういう。自分から、やつたちゅう者はおらん」

「滝田学について調べてほしい、いいりますから」

「ふうん。まだそげんこついよんのか。往生際の悪いやつちやなあ、あいつも」

「ですから、わたしらも」

「わかつた。わかつた。滝田にアリバイはちゃんとある」

井川も光子も落胆の色で権藤を見つめた。アリバイがあれば万事休すである。

「死亡推定時刻は、四月一四日の、午前五時から九時の間、その時間には滝田は大在一木の学生アパート『日南荘』105号室にちゃんとおつた。同じ一階の107号室の桜井ちゅう学生が、日雇いのバイト仕事に五時過ぎに滝田を誘いに行き、それから二人は牧の五高建設まで滝田の車で行つた。そこから高速道路の補修工事に湯布院まで出かけとるんじや」

「……」

井川に返す言葉はなかつた。

「そのかわり、清水紀夫にはアリバイはなかつたんですね」と光子が訊いた。

「ああ、清水紀夫は前の晩から夜釣りに行くといって松岡の家を出たまんま、あくる日、一四の午前八時二五分に坂ノ市のスタンドで給油するまでのアリバイがない。本人は関 佐賀関 の岸壁で夜釣りして、それから朝まで車の中で寝ていたちゅうが、証明する者は誰もおらん。それに一〇時頃にはガイシヤの家の近くで近所の住人に目撃されちよる。本人は金の催促に行つたけんが留守だつたらいよるが」

井川はもう気持ちを立て直していた。

「あの“ロシアより愛を込めて”いう置き文ですけど、あの「ペーパー用紙の指紋は調べはったんですね？」

「勿論じゃ」

「どうでした？ 清水紀夫以外の指紋はありませんでしたか？」

「それはおまえ、ガイシャの守山孝明のもあつたわさ」

「えつ？ それはしかしおかしいのと違いますか？」

「何がおかしい。清水がそれを見せ、守山が手に取つて見た。それだけのこつちや」

「あ、そうか。なるほど。そういうことも考えられますね。滝田学の指紋はありましたか？」

「おまえもしつこいやつちやなあ。そんなもんあるわけないだろつが」

「やうですか。やうでしたら、滝田に守山殺しの動機は全くないやうになりますか」

「いや、動機はねえことはねえ」

「え？ ほんまですか。そり向でつしゃろ？」

「滝田は守山から借金してた」

「ええーっ？ 守山は清水紀夫から借金して家を買いましたんやろ。なのに一一向べらへりこですか？」

「三〇〇万」

「えええーっ！ 何んですのん。それつやつたら、清水から借りた金と同じ金額じゃありませんか」

「そうじゅ。そつくりそれを又貸ししたつうじやうつくな」

井川と光子は顔を見合わせた。それなら家は自己資金だけで買ったということではないか。

反論を見越して権藤警部は先回りしてこういふ。

「資産状況からこつちもそんなことはわかつていた。けど、それでも清水紀夫の動機に変わりはねえ。アリバイもねえ。置き文も清水のもの。滝田にも動機はねえことはねえけど、ちゃんとアリバイが

ある。三〇〇万円くらいで人を殺すかちゅう問題もある

「でも返済が一年分遅れただけですよ」

「清水にはそれ以外の動機の方が大きかつたんじや。約束を破つたところ」とより、自分が貸した金が、そつくり滝田に渡つていたことを知つて激怒した。それに、滝田の存在自体が許せなかつた。置き文がそれを雄弁に物語つちよるじやろうが

清水紀夫はなぜそのことを隠していたのだろうか。いや、それは警察の勘織りではないか。

「又貸しれていることを清水紀夫が知つたゆうのは、ほんまですやろか?」

「ああ、滝田がそういう。守山がそういうたちな

「清水は?」

「清水が自分から重大な動機を喋るわけねえだろが!」

権藤警部は太い眼を剥いた。やはり、迫力のある顔だつた。

井川はすぐに話しの方向を変えた。

「滝田は三〇〇万円もの大金を何に用立てたんでっしゃる?」

「さあ、そこじゅ。そこが今一はつきりせん

「それがはつきりせんでいいん?」光子が口を出した。

「何んぢや

ギロリと警部は光子を睨んだ。

「まあ、その辺はこれから滝田に会う予定になつてますから、訊いてみましよう。いやあ、参考になりましたわ。助かりました」といつて井川は席を立つた。

刑事部屋を振り返りながら井川のあとを出て行こうとする光子に、
権藤警部はいった。

「おまえ、城島元検事の娘らしいな

中央署から事務所に帰り、少し早めの一六時にエブリイで大在に向かった。

「……どこにいっても、お父さんのことが出りますなあ」つぶやくように井川がいう。

「ほんと。検察庁ならわかるけど、こんな地方警察の警部がどうしてパパのこと知つてんだろ」

「そら、みんな知つてますよ、公安職なら」

「井川先生も知つてたん？」

「あたり前ですがな。城島元東京地検特捜部検事のこと知らない者なんて、法曹界に唯の一人もいてません」

光子は驚いた。と同時に、悪を取り締まる検事が殺人を犯したからだろうか、それとも、最期があんな風に衝撃的だったからだろうか、と思った。

「じゃあ、井川先生も、パパを軽蔑するの……」

「何ゆうてますのや、誰が軽蔑しますかいな。城島検事はぼくらの英雄ですがな」

「え？ ほんとに？」

「今でも法曹界に信奉者はいっぱいいますよう」

光子は井川の顔を何度も見た。いつものマツゲだけの眼ではなく、ちゃんと見開いている。そういう顔は賢そうで、そして信念がこもつたような瞳をしていて、少しだけイケている。

「どうして？」と光子は嬉しそうに訊いた。

井川はじつと前を向いたまま、それについては何も答えなかつた。

滝田が指定した喫茶店には三〇分前に着いた。

国道197号線を一直線に大在まで行って、大在駅を過ぎ、文理大入り口の交差点も過ぎて、三〇〇メートルくらい行ったとこの左側

とこうことだつた。

いつた通り、本屋やビデオ屋などが入つてゐる一階建ての建物があり、二階部分の片隅に『ガロ』という純喫茶の看板があつた。

「じんまりした店で、中に入るとジャズ音楽が静かに流れしており、ヤギ髪を生やした店長と思しき男が、カウンターでスポーツ新聞を読んでいた。ふいの来客に店長はあわてて新聞をたたみ、カウンターを潜つて中に入った。

ざつと見、先客は誰もいない。一人は一番奥のブースに陣取つて待つことにした。

すぐに店長はオシボリと水が入つたコップを掲げてやつて來た。若いのか中年なのかわからない細い指をした瘦せた男だつた。

「いらっしゃいませ」

井川も光子もホットコーヒーを頼んだ。

訊きもしないのに「女の子に休まれちゃつて」といつて店長は去つた。

マンガ本や雑誌類がラックや書架にふんだんに置いてある。若い客、特に学生客を当て込んでいるのだろうけど、この様子だと思惑通りにいつていないので、マンガ喫茶という規模でもないから、すぐに読み尽くされてしまうだろう——時間的にこれからなのか、でも、恋人同士が語り合つにはよい雰囲気の店だつた。

やがてコーヒーが来て、大人ぶつてそれを飲みながら光子は、先ほどの話に戻した。

「パパが英雄つて、どういうこと?」

「誰にもできなかつたことをやらはりましたからね」と井川はいつた。

光子はどこかで聞いたような言葉だと思った。

それはかつて根岸ともみ弁護士が、生前の城島元検事に——その時は辞任して弁護士になつていた——いつたのと同じ意味の言葉だつた。おそらく母親の遼子から聞いたものだろ。

「誰にもできなかつたことつて?」

「それは——」といったところで井川の言葉が途切れた。

井川は店の入り口を見つめて口をつぐんだのである。小柄な若い男が入って来たからだ。

「いらっしゃい！」と店長が威勢のいい声を出した。

光子も振り返って見る。滝田だと思った。

向こうもそう思ったのか、一直線に向かつて来て、「井川さんですか？」といった。赤いシャツにジーンズ姿の美形だった。

「まあどうぞ」と井川は光子の隣に座るよう手で奨めた。

滝田はチラリと光子を見て、赤みを帯びた緊張した顔で応じた。

そこへマスターが「お連れさんですか」といつて、オシボリとコップの水を持って來た。

「ぼくもコーヒー」と滝田はいつ。

どうやら滝田も初めての店のようだ。その方が気兼ねなく話せるからそうしたのだろう。

「早かつたですね」と井川がいえ、「ええ」と滝田はいつて、コップの水を飲んだ。

「大学の寮にお住まいで？」

「いえ。近くのアパートに」

「そうですか……」

店長がコーヒーを持つて来るまではそういうたわいのない会話をして、店長が去ると、井川は名刺を取り出して滝田の前に置いた。光子もそれに倣う。

そして单刀直入に切り出した。

「あなたが守山孝明氏から借りられた三〇〇万円ですけど、差し支えなかつたら、その使用目的を教えてもらえませんか。何しろ三〇〇万といえば大金ですからね、それを又貸された依頼人の清水氏としては、是非とも知りたいわけですよ。しかも、そのせいで殺人容疑までかけられておるわけですからね」

のつけから意表を突く質問をする井川の手法は、相手を動搖させる効果はてき面だった。

「や、それは……こえません」

「そうですか。警察にもいえなことのよひですね。それやつたら仕方ありません。では——」といつて一段と声を落として、「女装趣味についてはどうですかやろ?」といつた。

滝田は眼を泳がせてざわめきしている。

追い討ちをかけるように井川はいう。

「守山氏の家から、女装しようたお一人が夜中に出てゆかはるのを、三度も田撃された方がいてはるんですね」そこで思はずハッタリもかませた。「事件のあつた夜も、でっせ

赤いシャツが反映して顔が赤みを帯びていたのではなかつた。今顏色が蒼白になつたからだ。

「……じょ、女装趣味ぢやないですよ」と滝田は小さな声でいった。

「ほひ。じゃあ、何でつしやろ?」

「……『コスプレ』からに声を落としていう。

「コスプレ? 何ですのん? それ「知らない言葉ではなかつたけど、井川はマツゲだけの眼でとほけた。女装とコスプレとどう違つのかという思いもある。

「アニメのキャラクターに変身するやつじやん」と光子が真に受けて反応した。

「ああ、あれね。あははは。そやつたんですか。でーー守山氏は誰のコスプレを?」

「セーラームーン」

「ええつーー」(氣色悪う)と光子も井川も思つた。さすがに「あなたは?」とは詫びなかつた。

「ウソだと思つたら、週末に都町ナイトタウンビル地階の『?』を覗いて見るといいセア」と滝田はいつた。

その一六 クラブ『？』

広い階段を地階に下りて行くに従つて、色んな扮装を凝らした怪しげな男女が、そこここに屯^{たむら}していて、ノーマルな格好をした三人をジロジロ見た。見るからに不良少年・少女の不純異性交遊を思わせるような連中である。おおむねパンクファッショն。男は黒々、女は原色の赤や黄色。

土曜日の午前一時過ぎ。よい子は夢の中の時刻である。

さすがに未成年の光子を、深夜にそんなところに行かせるわけにはいかないという遼子のいうことを、光子がきかなかつた。そこでトシ子も一緒に——ということになつたのである。

退廃的なムードの中を少し歩いた所に、『？』といづ金色の文字看板がかかつた黒川張りのドアがあつた。

ドアを開けると、暗闇からビートの利いたロックが溢れ出た。稻光のような閃光が断続的に光つていて、眼暗ましのようになつた。中は薄暗い。

入つてすぐ横に受付カウンターがあつて——そこだけ淡い光がある——魔法使いのような格好をした女がいて、「お一人様、セット料金が千円になっております」という。

井川がズボンの後ろポケットから茶色い革サイフを取り出して三千円払う。

閃光と、ディスコーボールが輝く中、ホテルのドアマンの格好をしたギャルソンに案内されて、奥の方の丸テーブルへ。ステージには生バンドが入つていて、喧しいロツクをかき鳴らしている。

ビールの小瓶三本とお摘みの小皿が三つ並べられた。それがセット料金の内で、新たな注文については、新たな料金が掛かる仕掛けらしい。光子は未成年なので、井川がジンジャエールをオーダーした。

眼が慣れるに従つて、店内の様子が少しづつ見えて来た。扇のよ

うになつたホールの要の部分に舞台があつて、右端に生バンドが入つてゐる。舞台から客席までかなりの空間があつて、そこに色んな衣装を凝らしたコスプレが、ポーズを取つたり、踊つたり、抱き合つたりしている。

それを取り囲むように、木製の丸テーブルが並んでいる。

そして一番外側の暗がりには、一人・二人客用の小さな長四角のテーブルと、長い革張りのソファーが壁に沿つていくつも並んでゐる。意気投合したにわかカツプルなどが、そのソファーで密やかに語らうのだろう、実際そういうカツプルの影が何組もあつた。

光子のすぐ傍に柳腰の風雅な花魁人形が立つてゐる——と思つて見ていると、ジンジャエールを持つて来たギャルソンが、「コスプレですよ」と、光子に耳打ちした。「えつ？」と光子は驚いた。顔が人間とは思えないほど小さいし、身体も華奢で、しかもさつきから柳のようなポーズのまま、微動だにしないのだ。危うく手で触つてみるとこだつた。

体験会系で、お嬢さん育ちの光子には、何もかもが驚くような光景だつた。トシ子もそうだつた。ディスコもない街に育ち、都町には歓送迎会などで來たことはあるけど、居酒屋かカラオケ、飲み屋といえばせいぜいスナックくらいで——それも人気俳優の某サンタマリアの母親が経営している店というので一度行つたきり——こういう怪しげな店に足を踏み入れたことはない。ここには魅惑的な退廃があつた。

指を鳴らしてギャルソンを呼び、ハイボールをオーダーした井川拓馬は三十男だけあつて、さすがにこういう雰囲気には慣れている。大阪南の夜を、キャバクラやオッパイパブなどで鳴らした口だろう。マッゲだけの眼で、おどおど見まわしている一人のレディーを見るとはなしに見てグラスを傾けている。

というか、二人は入つて來た時から注目の的だつた。暗がりの四方八方から熱い視線が新顔の二人に注がれていたのである。殊に、すつと背が高く、きりつとした顔立ちの若い娘、光子には粘りつく

ような視線が集中していた。

とりわけ右手の一つ向こうのテーブル、華奢なイケ面三人に囲まれた髭面の親父とはよく視線がぶつかった。小さいけど固太りの、いかにも土建屋の親父といった風情だが、用心しなければならない暴漢かも知れないという思いが、ちらりと光子の頭を掠めた。

実はそうではなく、彼らは隣のビルの三階に店を構えるスナック『わしの城』のママとホステスたちだった。別にコスプレしているわけではなく、店がハネてからそのまま飲みに来た、オナベの店の連中だった。

勿論そんなことはつゆ知らない光子である。きっと表のどこかで、じっと自分らが出て来るのを待っているタツのことを思つた。自分が家に帰つてベットに入るまで絶対に眠らないし、何かあれば体を張つて守ろうとする、松つあんの一代目。

ウザイと思うことがあるし、愛おしく思うこともある。

そんなことを考えていたら、いつの間にか静かになつた。

と思う間もなく、舞台に煌びやかな証明が放たれた。そしてすくと立ち上がったトランペッターが、二二・ロッソの「夜空のトランペット』を吹き鳴らした。

見事なトランペットソロのあとは、『真珠取りのタンゴ』の曲になり、舞台の左袖からアニメのキャラクターが続々と登場して來た。光子は思わず「何あれ？」と興奮した声を出す。トシ子も、「きもい！」と娘のような黄色い声を上げた。

それもその筈、男も女もあつたものではない。好き勝手に、キャラクターになりきっているから、エロいのもあればグロいのもある。男なのか女なのかの判別もつかない。

メーテル、デビルマン、ラムちゃん、乱太郎、まる子、オスカル、ピンクパンサー、峰不二子、筋肉マンなどのアニメキャラに加えて、メイドコスチュームや、チアガール、ランゼリーなどのキワモノも登場して、舞台いっぱいに歌い踊る。

いや、いつの間にか、舞台の下にもウジャウジャいる。さつき階

段や通路に屯していたパンクファッシュョンと毒キノコのよつな女たちである。

「」はそういうた趣味の社交場であった。日頃の憂さを晴らすのには安上がりでよいけど、それだけではなく、やはり男女の危険な出会いの場でもあるようだつた。

見ると年齢的にも様々で、二十代から四十代、いや五十代までいるかも知れない。女性の場合、中には小遣い稼ぎの十代も混じつてゐるのではないか。

五時閉店ということであつたが、四時前に店を出た。

「頭がどうかなりそつ」と、光子がいえば、「具合が悪くなつた」とトシ子がいつ。

「あははは。人生色々ですがな」と井川は笑い、そぞろ歩きながら、「どうでした?」と訊く。

「何が?」と、トシ子は本当に具合が悪そうだ。「楽しめたかつて訊いてるのなら、冗談じゃないわつて感じだわね」

光子は辺りを見まわしている。案の定、列をつくつている客待ちタクシーの陰から、タツオの姿が見え隠れしている。

「そんなこと訊いてません。事件との関係を訊いてるんです」

「あの店と事件と何か関係があるとゆつの?」

「か、どうかはわかりませんけどね。ぼくには犯罪の一オイがブンブンしましたよ」

「ほんとに?」

「光子ちゃんはどうでした?」

「知へらない。てゆうか、あんなの何が楽しいんだろう?」

「そうだわねえ。あんなとこで出会つたカップルなんて、ろくなことにはならないわねえ」

もう飲み客の姿はちらほらしか歩いていない。錢のない若者がうろつき歩いているだけだ。それでも中国人のホステ女たちは四つ角ごとに一~三人いるから不思議だ。

タクシーも客はないのにアイドリング状態で十重二十重と並んでいる。果報は寝て待て、首が折れたようになつて眠り込んでいる運ちゃんもいる。その中の「よく運のよい者だけが、遅仕舞いの店からホステスをお客を連れて出て来て乗り込む幸運に与る。

バブルが弾けて失われた一〇年が過ぎ、なお不況は底なしに低迷している。飲み屋街はもろにその影響を蒙つて喘いでいる。

(三〇〇万円か……)と井川はつぶやいた。

「もしかして、滝田と殺された守山が出会いたのもあの店?」光子が唐突にいった。

「そう。ぼくもそう思いますねん」

「なに、そうすると、守山が親友の清水を騙してまで借りて滝田に又貸した原因が、元を質せばあの店にあるゆうのつ?」とトシ子。「まわりくどくいえばそういうことになりますなあ。そこで出会わなんなら、そういうことはなかつたんですさかい」

「でも、そういう同じ趣味の出会いぐらいで、三〇〇万ものお金を貸す?——しかもないお金借りてまで——いつのはじめと異常じゃない?」光子。

「異常ですよう。脅し取られたといつた方がしつくづくへる」「ほんとだねえ

「でも滝田はそんな風に見えなかつたじゃん」「裏で誰かかんでたらどうです」

井川はその二オイをクラブ「?」で嗅ぎ取つたのだった。でもそのことは何もいわなかつた。

ちょうどそこにイエロー・キヤブがあり、海坊主のような運ちゃんが仰向けに首を折つて眠りこけていたので、ドアをコンコンと叩いて起こして乗り込んだ。

上野ヶ丘の光子の家から中島東のトシ子のアパートへ、そして勢家の自分のアパートという道順で帰つた。

おかげで思わぬほど料金が出たので運ちゃんは大喜びであった。

月曜日に、早速井川は清水紀夫に面会して、滝田の件を問い合わせ質しだ。光子を連れて行かなかつたのは、清水から気兼ねなく本音を訊き出せると思つてのこと。

「率直に訊きますけど、あなた、あなたが貸した三百万が滝田に又貸しされていたんを、ご存知でしたか？」

「いえ。それは警察にも訊かれましたけど、知らなかつた。本当です」

清水の表情に偽りめいたものは読み取れなかつた。

「じゃあ、どうしてそのことを、そんな重大なことを、前回いつてくれなかつたんです？ 警察は頭から信じないですよ」

「ですから、滝田の名前を出すのを迷いました。先生方にも余計な迷いをして欲しくなかつたからです」

「なるほど」スジは通つている。「じゃあ訊きますが、その事實を知つてどう思はりました」

「そりやあ、心外ですよ。傍にいたら怒鳴りつけてたでしよう。だつて、相当な決心で貸した金ですからね」

「ふうむ」井川は考え込んだ。

そして、クラブ『』のことを話して聞かせた。

「今井氏が、誰かに脅されているような様子はなかつたですか？」

今度は清水が考え込んだ。
「……そういうば、何だか切羽詰つたような顔でした。様子も落ち着かない様子でしたね」

「それはお金を貸した前ですか、あとですか？」

「前もあともです。何だか人が変つたようになつて、顔色も悪かつた」

これで決まりだと井川は思った。今井は誰かに脅されていたに違いない。それなら三百万円以外に、もつと脅し取られている可能性

がある。

面会後に権藤警部に会つて、その点を質した。

「今井氏の資産状況ですけど、一五〇〇万の家を買った資金は自己資金で間に合つてたんですね」

「ああ、そうじゃ」

「その内訳は？」

「内訳か——内訳は、預貯金が約五百万、銀行スジからの借入金が合わせて一千万ちゅうとこじやな」

「そうですかあ、それぐらいやつたらその時点では、まだ生活に余裕ありますよねえ。それ以後借金は増えてませんか？ 清水氏からの三百万以外に」

警部の気色が悪くなつて来ている。

「何が訊きたいんじや？」

「ええ、ですから、生活に余裕があるのに、ウソいつて清水氏から三百万もの大金を借りるぐらいでさかいに」

「おい吉田！」と警部はつしろを振り向いて呼んだ。「ちよつと、

清水の資料持つて来いや」

メガネをかけた吉田刑事が捜査資料の綴りを持って来て警部に渡した。警部はそれをパラパラ捲つていう。

「信金から一百万、おお、消費者金融からも借りとるな。ひいふうみいの四社から合わせち二百万 つうとこだな。……うん？ 生命保険も解約しとるな。これが三二万か。まあそんなどこじや

井川は驚いた。

「ええーっ。それやつたら借金まみれじゃないですかあ

「そうじや。そじやけん、清水に払えんようになつた

「その原因は何だつたんです？」

「それがようわからんのじや」

光子を連れてなくてよかつた。光子なりきつと「それでいいん？」

といつて警部を怒らせていただろう。

「それでいいんでつしゃらか？」この、でつしゃらか、が大事なのだ。

「よくあるかい。それがわからんけん、今までヒマかかっちゃるじやうりうが。検事がしゃつち、それがハツキリせんと起訴できんぢゅうんじゅ」

「そらわうでつしゃる」

「なにつー」

「いえ、血殺説の根拠はその辺にあつたんやないかと」

「そうじゅ、そこが恼ましことじゅ」

「事故説の方はもう無視してこですやろか」

「あん屁の舞うたよつなこつこづジイさんのはたあ、気にすんなちや」

そのジイさんが井川の留守中に事務所を訪れていた。

女が一人つくねんとしているところく、野島教授がのつそり現れたのである。

「そこまで来たものだから」といつて。

トシ子は教授を応接室ではなく、ボス弁が来客をもてなすソファーの方に案内してお茶を出す。クライアントからのいただきものである高級な緑茶である。光子も同席した。

「今日は何か？」トシ子が訊く。

「いやなこ、その後どうなったかと想つてね。そろそろ送検の時期じゃないのかね？」

「そりなんですよつ。このまだとねえ」

「でも、手掛けりが掴めそつ」と光子が口を出す。

「おや、そうかい」

「真犯人がいたとして、でも、^{ゆべ}昨夜考えただけど、どうしてあんな状態にして殺したんだろうって。自殺に見せかける為かなあ……」

「お説通りでなくて先生には氣の毒だけど」と、トシ子がいえば「……」

そんなことはないさ」と教授はいった。

まだあんなバカバカしいことを考へてるんだうづかと光子はあきれた。

「たとえそうであつても、最期にエクスタシーを感じて死んだのは間違いないよ」と教授は確信を持つていう。「ところで、君らのボスは? 根岸ともみ先生は留守かね」

「なあんだ、根岸先生に用があつたのかあ

「根岸先生をご存知なのう?」

「いや、直接知ってるわけじゃないけどね、ちょっととした因縁がつて。……それは残念だなあ。今どちらに?」

「名古屋なの」と光子。

「名古屋?」

「何か?」トシ子が怪訝な顔で。

そこへ奥の井川の部屋から事務員の遼子が出て來た。

「あら、お客様?」

野島教授は、元城島検事の別れた妻をまじまじと見た。勿論遼子は一面識もないから会釈だけで済ませた。

午後になつて井川は帰還した。昼食はもう外食で済ませていた。光子が野島教授が立ち寄ったことを告げる。相変わらず変な考えに凝り固まっていることも。

「そうですかあ……」とこつて井川はホームワイドの白いポリ袋を応接セツトのテーブルの上に置いた。「どうですやう、同じ条件で実験してみよう思つねんけど」

中から白い化纖のロープと、化纖の荷造り紐と、滑車と、フックと、ドライバーにビスなどを取り出した。

「えつ、マジで？」

「ここでやるの？」といつてトシ子が結湯室からコーヒーをやわげて現れた。

「いや、ここはクライアントがいつ来るかわかれしまへんやう。ぼくらの部屋でやりますわ」といつ。「遼子さんいてはるんですか？」
「今銀行に行つてゐる」と光子。「根岸先生の許可なしにそんなもの取り付けていいん」

「ほんのちょっとビスの穴が開くぐらいやから」

三人はソファーに腰を下ろしてコーヒーを飲む。光子もいつの間にかホットコーヒーを飲むようになつていた。

「で、実験台には井川先生が？」とトシ子が訊く。

「うへん、ぼく、体が硬いねんけどなあ……」

「トシちゃんがやればいいじゃん。やりたがつてたんだから」「ちよつと光子ちゃん！」

その場面を想像して井川は「んふふ」と笑つた。それはちよつと見物だらうなと光子も含み笑いをする。

「光子ちゃんこそスポーツウーマンで体が柔らかいんだからーーでも遼子さんが帰つて来たら大変だわね。うちの娘に何てことするのよ、嫁入り前の娘にーーつて」

「トシちゃんだつて嫁入り前じやん、ずうーと」

「こら！ 調子に乗つてると、チチクリまわされるわよ」

「いや～ん、こわ～い！」

チチクリまわすとは、殴るの意だから誤解してはならない。

「ははは。ぼくがやりますがな」

というわけで、奥のイソ弁先生の部屋に舞台を設えて——丸椅子はないので、回転椅子で間に合わせた——実験は始められた。スースの上着だけ脱いで。

「あいたたた！」

やはり小太りで体の硬い井川はほとんびりにはならない。回転椅子で体を支え、首に投げ縄のよつな輪を掛けて、天井の梁に取り付けた滑車を通して、適當と思われる長さの所で小さな輪を作ったのに右足を通した。両手はフックに掛けた荷造り紐を握らせる。それでどうにかムササビが滑空するような格好にはなつた。といふか口に玉を咥えさせたらほんぢの世界である。腹が出てるしロープが少し短過ぎたのか相当に苦ししそうだ。

「あひたた……」これはシャレにな、なりまへんで、むむむ……と、そこへ、遼子が帰つて来て、「ちょっとあなた達何やつてんのよつ！」という。

「実験してるんだから、ママは黙つて見てて」光子がいう。「先生、首を絞めてみて」

「これ以上し、絞めたら死んでしまいますがな」

といいながら井川は足を伸ばそうとする。ズボンの裾から山芋自然薯じねんじやのよつな白いフクラハギが現れた。足を伸ばせば当然首が絞まつて頭が持ち上がるわけである。

「どうう？」トシ子が覗き込んで訊く。

「わ、わかりましたさかい、お、下ろして……」

遼子はあきれた顔で自分のデスクに向かう。女が一人掛けりで井川の足からロープの輪を外そうとするも——。

「あいたたた」

「本当に井川先生の体つて、硬いのねえ」とトシ子。

「メタボだからじゃない」と光子。

「ほ、ほつといでください——あいたた

「ちょっとこれ外れないわねえ」

「ママ、手伝つてよう」

遼子もやつて来て、三人掛けでよしやすく足から輪を外して井川を解放した。井川は腰を押さえたり叩いたりして歩き回り、そして椅子にへたり込んだ。

「ちょっとは運動した方がいいわよつ」とトシ子がいつ。

「ぼくもそう思いました」

「で、どうなの?」と遼子が訊く。「何の実験なのか知らないけど」「いや、ようわかりましたわ」と井川はいつて、「先生には内緒でつせ」と、天井の梁に取り付けた滑車とフックを仰ぎ見る。そこには当然、ビスの穴が残ることになる。

何がわかったのかについては勿体ぶつていわなかつた。が、「あんな状態で何時間も置かれたら人間どうなるんだろう」と光子がいつたのに反応して、「そんなんたまりませんよ。少なくともぼくはMでないことは確かです」といつた。

世の中には痛みを快樂に変えるMもいれば、それを見て、あるいは痛めつけて、快樂を得るMもいることを光子も知らないではない。でももうその心理については野島教授には訊くまいと思つた。

「あの紐だけど、あれば手に括り付けられていたわけじゃないのう。自分で握つてたの?」とトシ子が訊く。

「そうらしいですわ。今わかつたんやけど、あの紐がなかつたら、バランスが取れないばかりか、足と首にモロに圧が掛かるから、そらあ、苦しあまつせ」

「死後四、五日も経つていたのに、どうして死亡推定時刻が朝の五時から九時なんて狭い範囲でわかるんだう? まるで滝田のアリバイを証明する為のようじやん」

その辺のことは検死のエキスパートの野島教授に聞くしかない。
さつき訊いとけばよかつたと光子は思った。

一段落してから井川がいった。

「今晚からぼく、クラブ？に張り込もうと思つねんけど、でもぼく滝
田に面が割れてるからなあ……」

「あたしだつてそう」といつて光子はトシ子を見た。

「何よつ?」井川も見たので、「ちよつとやめてよ」と遼子に助け

を求める。「嫁入り前の娘に——ねえ」

「ははは。ぼくが変装して行きますがな。どうせコブアレの集まり
やねんから、趣向を凝らせば誤魔化せますやろ」「

「女装すんの?」と氣色悪そうにトシ子がいった。

その17 モスクワの夜は更けて

しかし、井川拓馬は女装も変装もせずに一人でクラブ『?』に乗り込んだ。そのかわり目いつぱいリッヂな中年を演出した格好をして、午前二時過ぎになるべく滝田学と顔を合わることがないようにな、醉客が迷い込んだような素振りで。

店員の方はちゃんと覚えていて井川を一人掛けの席に案内した。もうピークを過ぎていて客もまばらだった。ステージの上やホールのパフォーマーの数も少ない。

物欲しそうな顔をしてビールを飲んでいると、暗がりからすーと人影が近づいて来て、「いらっしゃ、座つていいかしら」といつて微笑んだ。一日でそれとわかる女はバスした どうせ売り専の女だろうが歳がいってる。何百万も脅し取るのはこういう類の者ではない。その日は空振りに終わった。

次の日も、空振りだった。

そして三日目、もう滝田のことなんか気にせずにピーク時の午前零時に乗り込んで飲んでいると、ホールで踊っていた少女戦士の衣装を着た女が、「ああ、疲れた。おじさんコックハイ一杯おじつてよ」といつてしなだれかかって來た。

マツゲだけの眼で觀察すると、肌の色艶やキメの細やかさ、髪の生え際、ウナジから肩にかけての曲線、そして小さな顔立ちなど、どう見ても未成年、（ヒットしたな）と井川は、手を上げて指を鳴らした。

ギャルソンがやつて来る。

「コードハイにビール追加、それから適当にシマミも持つて来てんか

「かしこまりました」

女は酔った振りをしている。こんなのに手を出したらえらいこと

になる。

さてこれからが大変だ。下手するとミーラ取りがミーラになり兼
ねない。いや、それくらいの分別はある。

けど、恐いお兄さんが現れる間際までいかなければならないのが
なんとも。現れてからでは遅いのだ。ガイシャの守山孝明の一の舞
になつてしまふ。腕つ節はないし、逃げ足も遅い。

でも、現れてもらわなければ人定ができるない。そいつと滝田学と
の繋がりが掴めれば、事件の真相に一気に迫れる。滝田を張つてい
ればいすれは接触するだろうけど、そんな時間的余裕はないのだ。
井川は前もって色々なシチュエーションを考えて望んでいたのだ
が、いざとなると何にも考えてなかつたように思い迷つた。ギャル
ソンが運んで来た「一クハイを女に飲ませながら、これからすべき
ことを頭の中でなぞつた。

舞台では「モスクワの夜は更けて」の演奏に合わせてコスプレ集
団が派手なパフォーマンスをしていた。

その中の美少女が滝田学であることに井川は気付きもしなかつた。

なんとしても誘いはの方からさせなければならない。相手次第ではそんなのは気休めにもならないけど、警察沙汰になつた時のいい訳にはなる。

だけどこの手の女はその辺は心得ていて、ちゃんと言質を取つておこうとする。電車内でチカンをでつちあげて大金をふんだくろうとする女子高生など、今日日の若いチーマーは、大人顔負けの狡猾さで情け容赦がないのだ。

媚惑的な姿態で、お小遣い次第ではどこにでもついて行くという素振りを見せて、なかなか乗つて来ない井川に、しづれをきらせたのは女の方だった。

「なんだか気分が悪くなっちゃつた」と誘い水をかけて来る。それでも乗つて来ないものだから、「どこか静かなところで休みたいな」という。

こんなことをいわれて平然としていられる親父はいない。鼻の下を伸ばして、二、三万くらいはくれてやつてもいいかと胸算用をして「それはいかんな。じゃあ静かな所に行こつか」ということになる。

ところが井川拓馬は、そんな小娘ごときに手玉に取られるような玉ではない。イソ弁風情でありながら大阪ミナミの夜を鳴らした男である。見下るすよ^{シテ}うなマツゲだけの眼で「アメちゃん食べますか？」と、飴玉一つで売れつ子キヤバ嬢をものにしたこともある。ゼニを使つてモテるのは百姓である。

「さよか、ほな、送つてあげましょか？」といつ。

女は当然、下心があつてのことだと思うから、精一杯の媚^{ハラハラ}とシナを作つてしまだれかかる。井川は家に送つてあげるといつてゐるのである。

酔つたふりした女を抱き抱えて井川は店を出た。そしてそこへ

並んだタクシーに女を押し込んで乗る。

「どちらまで行かれますか？」と運ちゃんが訊く。

井川は答えない。

「末広……」と女がいう。

末広町はホテル街だ。

「末広町はどちらまで？」運ちゃんは心得ている。（おいおい大丈夫かい？）と思う。女は素人のようだし、しかも、若い！

「……陸橋の下」女は答えた。

店の前からもう一台タクシーが付いて来ていた。

大道陸橋の左側道そくじょうを入つて最初の信号のない交差点でタクシーは停まつた。右手に陸橋のトンネルをくぐれば新町、左手が末広町である。一帯にはラブホテルが乱立している。その暗がりでタクシーを降りた。

女を抱きかかえた井川は、辺りを見回しながら「

「こんなとこに、お家があるのんか？」

と、そこへーー。

「何いよんのか、オッサン」

トンネルの暗がりから声がして、ゾロゾロと人影が現れた。予想していたこととはいえ、お早いお出ましに、井川はビビくつた。案の定、クラブ『』への階段や通路に屯していたパンクファッシュョンの連中 少年？ だつた。ざつと見、四、五人はいる。

甲冑のような黒革ジャンパーに、鉢を打った黒革ズボンの男が、クチャクチャガムを噛みながら井川の前に立つた。リーゼントの黒髪を一部紫色に染めて青いサングラスを掛けている。

「俺のスケに何するつもりな？」

「何するって、い、家に送つて来たつもりなんやけど……彼女がいう通りに」

女はぐつたりして井川に体をあずけている。

「こんなとこに連れ込んでおいて、それはないやろオッサン」

そういうわれても仕方がなかつた、ラブホテルの真ん前なのだ。道路を隔てた隣もそつだつた。左は陸橋の側壁とトンネルである。

「彼女やと？ ほつ。何いよる。その子はまだ一五歳やぞ、オッサン。これは、立派な淫行未遂じや。俺らがたまたま通りがかつたらよかつたものの」 男は薄ら笑いを浮かべて、後ろの連中を振り返つた。「——のや

「タ力ちゃん」「めん……」と女が小声でいう。「オッチャンがウチ

に無理やり飲ませて……ホテルで明け方まで休もう……なんちうんよ」といつて助けを求めるように井川から離れて、その男に縋り付いた。

「何かされたんか?」

「あつちこつち触られた」

（よついわんわ。こないにして守山孝明はこいつらの罠にかかったんやな）と井川は確信した。

守山の場合はしかし、ことが終わってホテルから出たところを押さえられたのかも知れない。脅し取られた金額がハンパではない。法律で処罰されるのはもとより、職場や社会からも糾弾されることを思えば、無理からぬことだ。

「わ、わかりました」といつて井川は名刺を取り出し、「ぼくはこういう者ですね。逃げも隠れもしまへん。明日一一いやもう今日ですか、事務所に来てもらえませんか。彼女が素面しづめの時に、事情をはつきりさせて、ケリをつけましょう」

こういう事案では相手が未成年なだけに勝算は薄いと思つ。下手すれば弁護士免許剥奪の懲戒処分ということになる。でも、彼らに前があれば別だ。守山孝明の事件と一緒に解決できる。井川の作戦は身を棄て実を取る、瀬戸際作戦だった。

男達は名刺をして鼻白んだ。根岸法律事務所の名刺である。弁護士・井川拓馬一とある。何と相手は法律の専門家ではないか、既遂ならともかく、未遂では藪蛇になり兼ねない といつところまで思慮が及んだのがどうか。

「こんやたあ！」

いきなりタカと呼ばれる男が井川の胸倉を掴んだ。脅しの最終手段に出た。少々痛めつけても被害届は出せないだろうと高を括つている。

「何様じや思つちよるんじやワレ！ ワレこそ事務所に来いや！」
と、ヤクザ者のよつて喰いた。

その様子を、追随して来て一通の入り口から四、五メートルくらい入った所で、ヘッドライトなどのライト類を消して待機していたタクシーが、パッと点灯して、スーと近づいて来た。

そして井川を取り巻いた男達の所まで来ると、ひとりの男を吐き出して走り去つた。

タクシーを降りた男は、胸倉を掴まれた井川とリーゼントのタ力の所にやつて来て、仁王立ちした。

「なんか、お前は？」

タ力に劣らぬタツパパと、それ以上のガツシリした体格をしたその男は、顎を引き、胸を張つて、無言で立つたままである。顔は色白で、ウサギのような目をした優しい顔立ちであるが、堂々とした立ち姿から発散される何かが、チーマーの彼らを威圧した。

井川はこの若い男が、付かず離れずいつも光子に影のように張り付いているボディーガードのような男であることに、すぐさま気付いた。そして理解した。光子か遼子の差し金であることを。

しかしそれは余計な差し金だった。少々痛い目を見るかも知れないけど、警察沙汰になつてくれないと困るのだ。

と思う間もなく、後ろのひとりがドモリのタツにちよつかいを出した。途端にその者は腹を抱えてうずくまつた。振り返り様の膝蹴りを食らつたのだ。

ほかの連中は殺氣立つて、手に手に刃物を取り出して構える。だがタツの敵ではなかつた。ひとり、ふたりと、挑みかかつては刃物を叩き落され、もぎ取られて、打ち倒された。

とうとうリーゼントのタ力だけになつて、逃げようとするところを、襟首を？まれて、陸橋の壁に押し付けられた。

そこへ、タクシーから通報を受けた中央署のパトカーが三台、赤色灯を回転させ、唸り声を上げて、一通に連なつてすべり込んで來た。

かくして全員が中央署に連行されることになつた。それは井川の望むところだつた。

取調べ室や、大部屋の中の衝立で仕切られた幾つかのブースや、応接室、会議室のような所でも、一人ひとり単独で事情聴取を受けることになった。

井川は応接室で受けた。村上タツオと金谷高光は取調室で、池辺沙織は会議室、その外の少年らは大部屋のブースにわかれ。それらの供述を突き合せれば、大体の事情がわかる。誰がウソをいつているのかも。そして、食い違うところや矛盾点を突いて責めるのだ。

井川の取調べは当直の巡査部長が当たつた。

「どういうことですか、先生？」

井川はすべての事情を話した。権藤警部あたりでないと話にならないけど、とりあえず偏見を持たれては困るのだ。

そこへ入れ替わり立ち代り当直の者が現れでは巡査部長に耳打ちした。

「あ、ほつか。よし、そうしてくれ」といつて、巡査部長は井川に向き直り、「とりあえず、先生はこれでお引き取りください。担当の者が出勤して来てから、またご足労願うかも知れませんけど、その時はよろしく」といった。

井川が腕時計を見ると、五時一五分を指していた。

ドモリのタツこと村上タツオはそういうわけにはいかなかつた。何しろ傷害事件の当事者なのだ。しかも相手は少年だつた。一番年長のリーゼントのタ力にしてもまだ一九歳。少年の中にはケガをした者もいた。訥弁とつべんなのも災いする。

「なんじゃ、あんた、弁当持ちかいな。いら、まずいことになるでえ」

その通りだつた。事と次第によつては、執行猶予が取り消される

ようことに。

「しし仕方ないです」

と、しおらしくタツオは頭を下げたけど、留め置かれることになつた。留置場行きである。

一五歳の少女・池辺沙織は涙ながらに事情を説明した。しかしどういい縛つても無理があった。少年達との関係は知らぬ存ぜぬでは通らない。少年達の供述からすぐに馬脚を現した。警察沙汰になつた時点で、彼らの幼稚な美人局計画は見え透いたのである。

しかし未成年ということで、彼女も少年達も ひとりを除いて引き取りに来た家の者に引き渡された。

リーゼントのタカだけはそういうわけにはいかなかつた。引き取り手がなかつたせいもあるが、過去に傷害や恐喝の前科が山とあり、札付きの悪で、暴力団の準構成員というレッテルを四課で貼られさえいた。証拠隠滅——少年達を脅して口車を合わせるなど——の恐れが充分あつたから、留め置かれたのである。

井川拓馬は寝ぼけ顔で一〇時過ぎに出勤して來た。

「うとうとしただけや思つたけど、目え醒めたらもう一〇時前ですわ。こらいかんわ思つて、- - 中央署から何かいつて来ましたか？」と訊く。

ひと通りの事情はメールで遼子に報せておいたから、遼子・トシ子・光子の三人がエレベーターの開閉する音を聞きつけて、受付力ウンターに顔を揃えていた。

「うつん、まだ」と光子が答え、「タツは?」と鋭く訊く。

「……といふことは、やはり、留め置かれましたか……」

「それより、先生、朝食まだなのでは?」と遼子が心配する。

「パンをかじつて来ましたから」

「それじゃあ、コーヒーでも」といつた時にはもう、トシ子は給湯室に向かっていた。本当にフットワークの軽い女だ。

休憩室のテーブルでコーヒーを飲みながら女達は井川の話に耳を傾ける。

「いや、驚きましたわ。いきなり正義の味方が登場して。いや、強いのなんのって。おかげで、か弱いぼくは痛い目を見ないで済みましたけどな」

「タツはどうなるの?」と光子が訊く。

「まあ、大丈夫でっしゃる。相手の少年達は刃物を持つてたさかいに」

「これからどうなるのかしら? 井川先生の方は大丈夫なんでしょうね」と遼子。

「うーん。ぼくの方はちょっと厄介ですわ。何しろ未成年の女の子に飲ませて、あんなとこまで連れて行つたことになりますさいに。タクシーの運ちゃんがどういう証言をしてくれるか。店の従業員の心証は悪い思いますよ」

「身柄拘束なんてことは?」

「そこまでは行かないと思つねんけど。まあ、そうなつたらそうなつたで。連中には余罪があるでしょうし、何より殺人事件に関係する余罪が出て来てはーーそうなるとしかし、警察のメンツもありますから、生意気な新米弁護士を少し懲らしめてやるつべくらこのことはーーははは」

「笑い事じやありませんよ、先生。裁判を控えた案件もあつて、岸先生とは連絡がつかないんですから」

遼子の懸念はそつちにもあつた。ボス弁の今回の外出は長引いている。連絡も途切れている。

「どこでなにしてんだか」光子も毒づいた。

「でも仕事を忘れたことはないから、そのうち帰つて来るわよ。芳^{かぐわ}しい匂いをさせて帰つて来るわよー」とトシ子。

そこへ、事務所の方で電話がなつた。トシ子が飛んで行く。中央署からの呼び出しだった。

その18 事件の結末

「井川先生よい。あんた、何を企んでるんか知らんが、立派な淫行未遂じゃ。バカなことをしたもんじやな。署長は立件せいや、いふるんど」と権藤警部が取調室に入つて来るなりいった。

「お騒がせしてすいません」と井川は頭を搔く。

権藤警部は井川の前の椅子にどつかり腰を下ろして、スチール机に左肘を突いて体を斜に構えた。ガラの悪い彼のクセだ。そうやってケンカ腰で相手を見る。

「あいつらがガイシヤの守山を脅しちょつたやうんか?」

井川はしおらしさを装おつていづ。

「はい。たぶんあの少女を餌にして淫行を仕掛けた。調べてもうえばはつきります」

「ほなら、なんで殺されたんじや。脅し取ろうと思えばまだ家がある。食いついたら骨までしゃぶるんが、ヤクザ者」

「タ力とこう男はヤクザですのん?」

「まだ未成年じやけど、これが体一面に墨を入れち、イッパシのヤクザを気取つちよる。兄貴分がいて、これはパリパリのヤクザ、食いついたら骨までしゃぶらにやおかん。それが金ズルをどうして殺すんじや」

「そうですかあ……もつとこまで。さすがですねえ」

「滝田学も連中の仲間いうんか?」

「いえ。多分、滝田は——滝田も、脅されてるんと違いますか。守山と一緒にコスプレクラブに通つていて、守山は罠に嵌ました。それを助けようとして因縁を受けられたか、まあその辺はわかりませんけど。警部さんのがいわはるよう、守山をしゃぶり死くしたら、次は滝田の番——滝田もそれを感じていたから、クラブ『』の存在をわたしらに教えてくれた思つんです」

「ほう、滝田が」

「ええ。その時点では、わたしらは、滝田も何者かの手先という認識でしたけど。滝田にしたら、警察に密告すれば組織からの報復が恐いし、わたちらのような弁護士サイドが調査して発覚したのなら——と、今思えば、あの時滝田は切実な気持ちだったんだでしょう」「連中は滝田をパシリに、隠れ蓑にしち、脅し取つた金を手にしていたちゅうわけか……」

実際に三百万円という大金が、容疑者の清水紀夫からガイシャの守山孝明へ、そして滝田学へと渡つて、連中が捜査線上に上ることはなかつた。

権藤警部は斜めに構えていた体を正面に向けた。マツゲだけの眼をした、とぼけた顔の新米弁護士を見直したようである。

しかしメンツがあるから素直には喜べない。

「ほなら、連中が守山を殺したかどうかちゅう問題はどうなるんじや」

「それはどうですやろ、美人局恐喝事件の実態を明らかにする過程で、見えて来るのと違いますか」

権藤警部はゴブシを握り締めて、忌々しそうに顔を左右に振つた。

その日のうちに関係者全員の事情聴取を終え、井川は不問に付された。村上タツオも正当防衛が認められて解放された。

そして警察は、土木作業員の金谷高光と、その兄貴分の川島組幹部・大野貢みつぐを、別件の恐喝容疑で身柄拘束し、そして池辺沙織と滝田学は任意で、連日厳しく追及した。

それによつて、クラブ『?』を舞台にした美人局の実態は明らかになつた。金谷と大野が、守山から一千万円以上脅し取つたことを認めた。滝田学もやはり脅されて、彼らのいうがままに仲介をしていたのだ。

しかし本件の守山殺害については彼らは頑強に否認した。守山孝明の死亡推定日時の彼らのアリバイは明白にあつた。四月一四日は二人とも県外にいた。金谷は宮崎県都城市の建設現場にて、大野

は福岡県朝倉市の上部団体『橘組』の葬儀に参列していたのだ。

清水紀夫の勾留期限はあと二日に迫っている。警察も検察も、そして弁護士サイドの井川らも大いに焦った。

そういう時にふらりとボス弁の根岸ともみが帰つて來たのである。光子はオハラモードの根岸を睨み付けた。

井川と光子が見晴台案件のこれまでの調査と、警察の捜査の進捗状況を、順々と話すのを、根岸ともみは執務机で腕を組んでじっと聞いていた。

そしていった。

「よくやつたわね」

（何それ）と光子は腹立たしい思いを露わに、「そんなこといつていいの？ もう時間がないじゃん。あと一回だよ」

「あとは警察に任せましょ」

「警察だつてお手上げなんだから」

「そつバカにしたもんじゃないわ。警察の組織力をもつてすれば一日あれば充分。警察にだつてメンツがあるから。それに、否認事件というのは不気味なものなのよ。検察だつて、スッキリした形で起訴したいだらうし、今頃必死なのでは」

「ぼくもそう思こます」と井川」。

「じゃあこのまま黙つて見てればいいんだ」

光子はぶすぐれた。

「野島教授はなんていつてるのかしら」

「相変わらず変な考えに凝り固まつてゐる。相手にしないほうがいいよ。じつちまでおかしくなる」

「井川君。事故か自殺か——この線でもう一度考えてみて」

そういうともうふたりには眼もくれないで、根岸ともみは机の上で決済待ちの書類に手をかけた。

井川と光子は原点に立ち返る意味で、事件現場を訪れた。

天気はよいし、新緑の季節で、そこから眺めるロケーションは相変わらず抜群だった。

三四歳の守山孝明が満を持して手に入れた家は、主がいないまま

廃屋のようになつて、黄色い規制線が張られたままになつていた。

棄てられたかした子猫が三匹屋敷の中をうろちよろしていた。

「」の家を手に入れた時は、どんなに得意だったことか——ようわかりますわ。ぼくももうそうこの歳やさかいに。さしあたつて結婚する相手もないし

「どうして？」

「どうしてつて、そら縁がないことにほだないもなりませんがな」「縁なんて、作ればいいじゃん」

「そないな簡単なものじや、——それやつたら光子ちゃん、ぼくと結婚してくれますかあ」

「そ・そんなこといわれても」

「それみなはれ。他人同士が結婚までいくのは、簡単なようで、大変なことですよ。ましてぼくみたいにモテない男は縁があつても——孔雀のように、声の大きいのんがモテるんなら、国東半島にまで届く声で喚きますけどね、ははは」

「トシちゃん、まんざらでもないみたいだけど」

それは井川も感じていた。でも人間というものは、得難いものを望むものである といつて光子を望んでいるわけではない。そこにすれ違ひが生じて、悲喜交々（ひきこもごも）の恋愛模様を織り成す。

「そんな得意絶頂から、ちよつとした氣の緩みから、思わぬ落とし穴に落ちて、一転地獄へ、一千万以上も脅し取られて、その上まだまだ……となると、自殺の動機なら充分ですわな」

「でも、開き直つて、これ以上は応じられない、警察に被害届を出す、といって殺されたとも。金谷・大野の動機も充分だと思つよ」

「そやね。まあ、ボスのいわるよに、そこは権藤警部に任せて、ぼくらは自殺に決め込んで考えてみましょ」

井川と光子は家から道を隔てた擁壁^{よつけ}の上にある、落下防止柵にもたれ掛つて——ちょうどそこは桜の木の木陰だつた——事件発生時からの経緯を振り返つた。

「ちょっと待つて。そうすると、清水紀夫が無断欠勤が続く守山孝明のことが心配になつてここに来たのが、四月一四日の午後だつた。けど玄関は施錠されていた。だから明野北町のマンションに母親を呼びに行つて、一緒に合鍵で家に入つたのよね」

「そうですう。犯人が持ち去つたのか、どこにもマスターキーはなかつた。事故や自殺なら鍵はある筈。ないのはおかしい。そうでっしゃる。そんなことからも、清水氏に容疑がかかつた」

「じゃあ、マスターキーが見つかれば、容疑のひとつが崩れるんだ」「でも警察が入念に捜索して出て来ないのでから。そんな見つからぬいようなとこに置く必要もないやろうしね」

「あたし、そういうの探すの得意なんだ。探してみよ」

「そらできませんよう。規制線を越えたらえらいこつですがな。まして部屋に入り込むなんて。第一鍵もないのにどないして入りますのや。それやつたらドロボウですがな。もうバッヂが危うくなることなんか、淫行未遂で懲りてます」

「じゃあ、未成年で初犯のあたしなら、どうつてことないわ」

といつて光子は井川の制止を振り切つて規制線を越えた。

黒い門扉には鍵は掛けられてなかつた。光子は扉越しに門を外して中に入つて行つた。屋敷の中をうろうろしていたが、ものの一〇分としないうちに、玄関に続く植え込みから姿を現した。

何やら鍵らしきものを目の所にかざして、チャラチャライわせながら。

「何です、それ？」

「玄関の鍵だと思うけど」

ハンカチ越しに掴んだそれを、井川の目の前でハンドベルのようにチャラチャラ振つた。

「ほんまですか！」井川は精一杯目を見開いて驚愕した。それでもイノシシくらいの目だつた。「ビ、ビ！」で見つけましたんや？

「玄関の鍵だから玄関でだよ」

玄関に続く石畳は湾曲していて、表からほほゴノキやモッコクなどの植え込みに遮られて見えないのだ。

「玄関のどこで？」

「郵便受けの中」と思つたけど裏をかかれて、その辺の植木鉢の下——とも思もつたけどまた裏をかかれて、信楽焼きのタヌキの置物が横にあつたから、それも動かしてみたけどなかつた

「それで？」井川はイライラしている。

「でも微かに擦れる音がした」

「それで？」

「タヌキが提げている徳利を振つてみたら、擦れる音はそこからしていた。だからそれを逆さまにしてみたら、小さな小口からぽろりと」

「凄いな、光子ちゃん！ どないして鍵が玄関前にあるなんて思いましたんや。守山は部屋の中で死んでいたんでつせ」

「知らぬ。だって、戸締りが嚴重で中に入れないのでじゃん。だか

ら外で捜すしかなかつた。出かける時、うちのママなんかい加減に郵便受けに入れる。ドロボウさんがまず最初に目をつけただといふのにや」

井川は頭を振つた。

「警察の家宅捜索も——まさか外にあるなんて思いもよらなかつただろからね。勿論、鑑識が屋敷まわりの遺留品の捜索は緻密にやつたやううけど」

井川はしきりに感心した。

タツの事件の時も小刀を見つけたし、自分は刑事向きなのかなあと光子は思つてゐる。

「といふことは、どうこうことになんだら?」

「そうですね……どうこうことでっしゃる。——あつ! 光子ちゃん! 誰か来る。早く門から出で!」

やつて来たのは下の家の老婆らだった。

「あんたどう、また何事な?」

「また事件現場を見に來たんですね」

「お前、門を開けち中に入つたな」と少し痴呆が入つた老婆が光子を睨み付けていった。「わしゃあ、ちゃんと見ちよつたでえ」この老婆が騒ぎ立てて、隣の老婆を連れて來たのだろう。一階から見ていたのか。

「あん時のお前か」

「あん時のつて?」と光子。

「でん、お前いつの間にそげえ大きくなつたんじや?」
(何いつてんだろ?)

「そして女が一人出て行つたんでつしゃる」と、笑いながら井川がいう。

「いんねとなあ、出て行つたのは男じや」

「えつ? 女じやなかつた? 女が一人で」と光子も前に聞いた話を思い出しついた。

「男が一人ちや、お前らもわからんやつちやなあ……」

「それはいつのこと?」

「警察がいつぱい来た日じやあ」

清水紀夫と今井孝明の母親のことについてこじてこじてはおかしい。何時頃のことですやろ?」

「丑三つ時ちや」

井川と光子は顔を見合させた。女といえば女装した滝田しかいない。滝田がその日の夜中に来たのだろうか。でも出て行つたのは男だった?

一人が考え込んでくると、もう一人の老婆がやって来てさわやーた。

「うへあいなんなちや、もう息子の名前もわからんようになつちよるんじやけん」

帰りの車中でもそれぞれ考え方をめぐらせて考え込んだ。

光子がつぶやく。

「夜中に滝田が来た。今井孝明は当然死んでいた。死後四日経つていた。だから、玄関は施錠されてなかつたか、滝田が鍵を持つていたか……滝田はビックリして逃げ出す。その時は男の格好で?」

「バアさんのいうことを信じたらそうなりますなあ……でも、ややこしいから、バアさんの話は置いといて考えましょうや」

よろしいかといって、井川は新たな状況から考えられることを、羅列して見せた。

「まずでつせ、玄関前に鍵があつたゆつ」とは、ガイシャの今井孝明は出掛けていることになりますなあ、普通は、それが部屋の中での死んでいた。これが疑問の第一点。

第一点は、なのに発見時には玄関は施錠されていた。第一発見者は清水紀夫容疑者と今井の母親だつた。誰がどの鍵で施錠したのか?

第二点は、やはりあの死に方ですわ。あんな自殺の仕方はないやうつ。あくまでも自殺と仮定した場合でつせ。顔をポスターカラー

で赤く塗つたり、エビゾリは結構辛いものでつせ。それに一人でできるものやろか。実験ではトシちゃんと光子ちゃんでもてこすりましたやる。下ろす時は三人掛けだつた。

第四点は、“ロシアより愛をこめて”といつメツセージじみたものをベットの上に置いたのは誰か？自殺の遺書とは思えない。それにどんなメツセージがこめられていたのか？

まあ、そんなとこですか？光子ちゃん、どない思います？

やはり司法試験に合格するよつな人は違うなあと光子は思った。物事の要点を掴んで、単純化するのがうまい。

でも父は、「司法試験なんか、基本書を何度も何度も徹底的に読み込み、過去の例題を繰り返しやる熱意があれば——」といつていった。皮肉にも、法学部の秀才の母が通らなくて、ほかの学部から来た凡才の父が通つてしまつたのだ。

父の熱意は母に対するもので、母の注意を引くためのものだつた。「要するに、やりたい一心の口けの一念の成せるワザだつた」と、幼い自分の傍で他人にいついていた。大人は子供だと安心してそんなエツチなことを子供の前で平氣でいう。でも、子供はいつまでも子供ではない。そういうことはちゃんと覚えていて、あとで理解する。「どないしました？」

「えつ？ああ、そうだね。あたしもそつぱつ。自殺とするのは無理があると思うよ」

「そやつたら、事故ゆうことになりますなあ。どうです、これから野島教授のご意見を伺いに行きませんか？」

「ええ／＼」といいながらも、光子は教授に電話してアポを取る。自分が新たな大発見をしたことを自慢したくてしうがなかつたのだ。

この際、エツチな講釈は甘んじて受けよう。

「ほひ……」といつて野島教授は光子を見つめた。

「何だか変な具合でしそう? どうなつてんだろと思つて」

「そうだなあ……確かに」

「先生のお知恵を拝借したくてまたやつて来ました」と井川。

「まあ、掛けたまえ」

教授は今日は普通のスーツ姿で、研究生に接するような態度でテスクの回転肘掛け椅子に座つていた。

井川と光子はそこらにあつたパイプ椅子を広げて座る。

「そんなのよく見つけたもんだね。しかしまずいな。曲がりなりにも規制線が張られてあるんだからね。いや、そうでなくとも、無断で他人の屋敷に足を踏み入れたら、これは立派な住居侵入罪になる。弁護士先生を前にしていうことでもないけど」

「はい、はい、そなんです。ぼくもそういうつて止めましたんやけど」

「聞く耳もたずか。まあ、そだらうね、父君がそつだつたから。本部長は誰だつたつけ?」

「捜査本部長は……」

「いやそうではなく、県警の親玉は?」

「あ? あー? すみません、ぼくまだこっちに帰つて來たばかりですかかいに」

「塚本本部長じゃん」

「塚本? 塚本か。ああ、何かそんな名前だつたな……」

「あたしまだ未成年だし、初犯だし、大した罪にはならないんじやないの?」

「それに窃盗罪が加わるけど——まあいいか。それくらいは何とかなる。でも、そだなあ……連中の顔も立ててやらねば……その鍵は、もとの所に戻しておきなさい」

「え～」と光子は口を尖らせた。

「捜査員の誰かに知恵を授けて、そこを捜索させればいいわ」

「なるほど」と井川が手を打った。

「さて、それはよしとして、そつなると「ればばうこづけ」とになるんだね？」

「そうなんですか？」

三人は首を傾げて考え込んだ。

そこへ、女子学生がコーヒーを捧げて現われた。

「コーヒータイムが終わると、教授はいった。

「これはやはり自殺かも知れないな」

「ええ～、自殺う～？」

「――ですやろか？」

「うん。こう考えたらどうだろう。元々彼にはそういう趣味があった。ああゆう仕掛けをして、危ない遊戯をしていた。ポスターから一を顔に塗つたりしてね。それは彼独特のものだらうけど、そういうのは結構いると思うなあ」

そちらまた始まつたと、井川と光子は顔を見合わせる。

「いつからか、そうだなあ、昔は木の枝に縄を掛けて下がるのが主流で、田舎に行けばそんな首吊りの話はどこでも一つやふたつはあった。ぼくの田舎は鹿児島の指宿いぶすきだ。いわゆるカゴツマだけどね。子供の頃、そういう場所を通るのが恐くてさあ。堤つつみなどへの入水自殺も結構あつたなあ……。

それが今日日は、部屋の中で、ドアノブなんかに紐を掛けたりして、簡単に死ねるようになつた。困つたことに――だから、昔の謀殺人なんかは、人目を気にしながら、何人もで、嫌がるのを抱え上げて吊るしていたものなんだけど、今や、ホテルの部屋とか、自宅なんかで、誰にも見られず、簡単に締めて殺せるようになつた。そうして自殺を偽装する。家人の留守の時などにね。

自分の家で死んでるんだから、警察も検察も国民もマスコミもみ

んな納得しちまつ。

こんなことを元警察官のぼくがいつことじやないけどね。疑獄事件の関係者の死は日常茶飯事だけど、どれが謀殺で、どれが本物の自殺なのか、見分けつきやしないのか。きっと、事件の鍵を握るキーパーソンが死んで、事件追及はそこでストップ、幕が引かれてわけさ。異論はどこからも出ない。

その先に突き進んで行つたのが、君の父上、城島特捜部検事だつた。ああいう不幸なことになつてしまつたがね。それを恐れるから、どこからも異論は出ないんだ。みんな我が身が可憐いし、我が身以上に愛する家族を、危険な目に遭わせたくないからね。

——神代の昔からの、この因循はなかなか断ち切れるものではない……

野島教授の顔つきが変つっていた。恍けたような顔ではない。警察庁・刑事局の警視監の顔だつた。

光子も井川も教授の顔を見つめたまま固まつてしまつている。

光子の目から大粒の涙が流れて落ちた。

そうして父は、そして叔母二人も、慘たらしく、葬り去られたのだ。

その恨みの焰は胸中に赫々（かつかく）と燃えている。シリスベルトを巻けば、いつでも父の受難の痛みを感じる。

その燃えるような瞳を、腫れぼつたく押し潰された目蓋の間から、野島元警視監はじつと見つめた。

そこに余人の入り込む余地はなかつた。井川はそつと立つて窓を開けに行つた。窓を開けると、心地よい風が吹き込んで來た。

彼らが導き出した推論は二つであった。

——守山孝明は生死の狭間を漂う遊戯から、一線を越えて死出の旅に出た。自殺の動機は充分。「最早未来を持たない者に、現実は

「嘔吐をもよおす」である シーボルト語録。

だが、ただでは死にたくなかつた。せめて一矢報いたかつた。それが、かつて清水紀夫のパソコンに打ち込んでコピーしていた「ロシアより愛を込めて」のメッセージだった。

それだとしかし、疑いが友達の清水紀夫にかかつてしまふ。彼のコピー用紙だから彼の指紋もあるだろう 現実にそつなかつた。だから、鍵を掛けずにーーでもマスターキーが部屋にあると自殺を疑われることにもなるからーー出かける時に入れておくこともあるタヌキの徳利に入れた。

やがて、滝田学が来ることを見越してであろう。滝田ならそのままセージから意味を汲み取るだろう。クラブ『？』では『モスクワの夜は更けて』の曲がよく演奏される。きっと仇を討つてくれるに違いない。

——パシリの滝田は金を要求しにやつて來た。そこで今井の自殺を発見。メッセージから今井の悔しい思いを知る。かといって警察に駆け込めば、彼の不名誉が明るみに出て、なおかつ自分は組織の報復を受けることになる。

そこで思いついたのが、玄関の鍵を閉めておくこと この場合、鍵の置き場所を滝田が知っていたことが前提。 そうしておけば、おつけ誰かが訪ねて来て、電気が点いているのに応答がない、新聞や郵便物も溜まっている、ことに不審を抱き、警察の知れるとこどとなり、自殺か殺人かということなつて、その検査の過程で、金谷孝光・大野貢らの恐喝が明るみに出る。そして自分は彼らの呪縛から解放される。

とまあ手前勝手な憶測ではあるが、何とか辻褄は合つ。認知症の老婆の証言なんか何の役にも立たないけど、所々符合する。

あとは警察の検査がどうなるか、権藤警部に会つて、鍵の在りかを示唆し、状況によつては、自らの推理を披露してみようと思う

のだった。

「教授つてけつじつ凄みのある方なんですね」

「エッチな講釈を除けばね」

「光子ちゃん」

「何?」

「アメちゃん食べますかあ」

井川と光子はとりあえず中判田経由で見晴らし台に向かった。

前に続く（前書き）

前回の家宅侵入罪は住居侵入罪の誤りです。

事件発生当初、諸般の事情からーーという大雑把な表現で、細々した伏線を敷かなかつたため、唐突感を持たれることが色々出て来ますけど、ご容赦ください。

見晴台の事件現場に戻った彼らは、認知症の婆さまのセンサーに感知されないことを祈りながら、素早く光子が玄関のタヌキに鍵を戻した。

それから一度事務所に帰つてボス弁に報告、晩かけの昼食を取つてから中央署に歩いて向かつた。

検察庁の前を通り過ぎようとして、「あ、井川先生、ちょっと待つて」と光子が腕を取つていう。「東浜検事に会つてからにしない」「え？ なんですか？」

「だつて、権藤警部つて、ヘソを曲げたら人の話、聞かないところじやん。でも検事には頭、上がらないから。検事に話を通しておいたほうが——」

「なるほどね」

井川は納得した。本当は検事に自慢したくていってることぐらいいお見通しである。
しかしいうことは正解だった。

東浜検事は彼らの話を黙つて聞き終えて、ポツリといつた。

「……よかつた」

警察が誤認逮捕を認めるのは屈辱的なことである。だから容易なことでは認めようとしない。権藤警部はいまだに清水紀夫の容疑を棄てきれず、金谷・大野の恐喝事件とは別物としているといつ。

「ていうか、恐喝事件の捜査から見晴台事件に繋がる証拠を掴みきれないでの、しかたなく、しがみついているってどこかな」

「それでしたら、ぼくらがいうより、検事さんの指揮という形のほうが、素直に対応するかも知れないです」

それもちょっと味気ない気がした。あの警部の鼻柱を折つてやりたい気もする、光子的には。

「そうね。そのほうがよいでしょう。わたしも、これから最後の頼みである、滝田学の尋問にかかるうとしていたところのよ。助かつたわ」

「今度お昼ごはんに奢ってくれてもいいんじゃないの」と光子。

「うん。そうだね。でもその前に、住居侵入罪及び窃盗罪、それに公務失効妨害罪もあるわね、それらの併合罪を見逃す代わりに、スイーツを奢つてもうることになるけど、いいかしら?」

「あははは。検事さんは甘党ですか。それやつたらぼくに奢らせてくれださい。ぼくも甘党ですねん」

(どうなんだろ、この抜け目のなさ。よくこれで彼女ができるものだわ)

「検事さん、この先生、三二歳でまだ独身なんだよ、彼女もいないし」

「まあ、そうなの」

「東浜検事さんも三〇歳で、独身で、カレシがいないんだって」

「ちょっと!」

横の席の黒縁メガネの男性事務官が思わず笑った。

滝田学の検面調書が事件の真相を表していた。

それによると。

——私、滝田学は事実をありのままに包み隠さず申し述べます。確かに、私、滝田学は守山孝明さんと、よくクラブ『?』に出かけました。だいたいいつも午前零時過ぎに、守山さんの家に女装したまま行き、女装した守山さんと一時か一時頃に家を出て、タクシーで都町の店に行きました。

実は私は、クラブ『?』で一年前に三ヶ月間だけバイトしたことがあります。守山さんとはそこで知り合ったのです。その頃、守山さんは週末だけストレス解消にやって来ていました。

そして、大学の先輩ということだけで、親しくしていただくよう

になりました。バイト先の紹介などもしていただいたり、本当にようい先輩がありました。

その先輩が、クラブ『?』で悪い女に引っ掛けてしまって、困ったことになつたというので、ぼくも一緒に女——池辺沙織（一五歳）の男友達——金谷孝光——の事務所 三川上——に行きました。

そこには大野貢というヤクザの幹部——川島組——もいて、三百万円で話がつきました。そのお金を滝田——つまり私に渡して、クラブ『?』まで持つて来いというのでした。

私は守山さんから預かつた三百万円を持ってクラブ『?』に行き、そこで池辺沙織に手渡しました。家を買つたばかりで余裕のない守山さんは、友達——清水紀夫——からとりあえず借りたといつていました。その方とは守山さんの家で一度お会いしただけです。

その後、私、滝田学を通して、私の携帯電話に指示があり、二度三度と守山さんはお金を要求されました——？五〇万円、？八〇万円、？一一〇万円——守山さんは、いわれるままにズルズルと応じて、私は守山さんから受け取つたお金を運び続けました。クラブ『?』で、池辺沙織に手渡しました。

そして、四月一三日午後五時三五分に——携帯の電源を切つていたものですから——大学の門前で金谷らに待ち伏せを受けました。

金谷のほかに二名いて、電源を切つていたことを激しく責められ、携帯電話を取り上げられて、個人情報を全部吸い出されましたので、もう逃げられないと思いました。

金谷がいうには、今度こそ最後にしてやるから五百万円用意するよびに守山にいえというのです。

その場で守山さんに電話しましたけど、守山さんも電源を切つているらしく、通じませんでした。会社に掛けたら無断欠勤しているということでした。家に行つて見て来いといわれました。

深夜に——午前一時頃 守山さんの家に行きました。電気は点いていて、玄関の施錠はされておりませんでした。

でも、声をかけても、呼び鈴を押しても、返事がないのです。嫌な予感がしました。

恐る恐る上^{じょう}がり込んで——エアコンも作動しておりました——そして寝室で、首を吊つて死んでいる守山さんを発見しました。おかしな格好で死んでおりましたけど、何となくわかるような気がしました。ベットの上にコピー用紙があり、「ロシアより愛を込めて」という文字が打たれておりました。その意味もよくわかりました。玄関に鍵が掛けてないのも、私が来ることを予期したこと、私にある思い託しているのだとわかりました。

でも、警察に通報して、ありのままを話す勇氣は私にはありませんでした。ヤクザが恐かっ^{いた}し、恐かっ^たたので、守山さんの名誉のためにもど、自分を納得させて、そのままにしておくことにしました。発見者は私ではなく、ほかの人に——という想いでした。

そして金谷には守山さんは自殺しているのかも知れないと報告しました。電気が付いているのに玄関には鍵が掛かっていて、新聞や郵便物がいっぱい溜まっていると。

金谷から大野に代わって、大野貢は、俺らのことを一言でも漏らしたらわかっているなといつて、携帯電話は棄てる、新しいのに買^{い替える}、もうこれから一切関係ないからな、といいました。正直助かった！と思^{いました}。

どうしてそんなウソをいえたかというと、玄関の鍵を見つけて施錠して來たからです。

鍵は必死で探しました。どうしてそんな考えになつたのか、あとで考えたらおかしなことですけど、その時は玄関の施錠をしなければと、一途に考えてしまつたのです。

私以外であれば発見者は誰でもよかつたわけです。施錠をしていようがいまいが、いざ^{いぢ}れば発見されるだろ^ううに。恐らく、友達とはいえ人の家に上がり込んだ後ろめたさと、守山さんの死に様を人に見せたくなかつたという心理が働いたのでしょうか。

そして、殺人事件ともなれば、交友関係から真つ先に私も疑われ

ることになる。その時に鍵がかかっていたほうがよいという考え方もあつたのかも知れません。とにかく、動搖していたのです。

玄関の鍵をどうして見つけたかといいますと——几帳面な守山さんは玄関の靴脱ぎ場の所の壁に、靴べらと、乗用車のキーと、家の鍵を掛ける三連のフックを取り付けていて、きっとそこに掛けていました。けど、そこになかったし、部屋のどこにもありませんでしたから、一度は諦めたのですが。

ふと思い出したのは、前に一度、玄関の鍵を施錠しないで出掛けたことがあり、勿論、日中のことでしたけど、どうして施錠しないのか聞いたら、妹が来ることになつていてるからといつていました。その時に玄関前のタヌキの置物の所で立ち止まつたような気配を後ろに感じたので、その置物を調べたら、徳利の中でかすかな音がありました。小口は本当に狭いのですが、逆さまに振つたら中から鍵が出て來たのです。

その鍵を持ち去ろうかどうじょうかで迷いました。そうすれば完全に殺人事件が疑わされることになるだろうし、でもあの様態でも充分に殺人が疑われる——そう思つて守山さんも恥を忍んでそうしたのだろうと思います——結局もとに戻しておきました。

「コピー用紙のメッセージもどうしようか迷いました。もう用は済んだのだし、変に勘織られても嫌だから持ち去ろうかとも思いましたけど、やはり人の物を持ち去るのは勇気がいるもので、結局手を付けませんでした。

清水紀夫さんが容疑者として逮捕されたのは意外でした。驚きました。私が守山さんから受け取つた三百万円の出所が——友達の清水から借りたと守山さんから聞いたことを、警察で供述したからだろうかと、心を痛めました。

でもきっと恐喝事件が明るみになつて助かるだろうと、それまで辛抱して欲しいと思いました。でもなかなか、警察の捜査はそこまで及びませんでした。彼らが巧妙に私を間に噛ませて、ワンクッシュヨンおいでいるからだろうと、焦りました。

そういう時に、弁護士さん——根岸法律事務所の、井川弁護士と榎原光子助手——が現れて、守山さんの女装趣味のことを訊きました。ですからこれ幸いと、コスプレクラブ『?』のことを漏らしたのでした。

警察ではなく弁護士さんですから、弁護士さんから恐喝事件が明るみになつたのなら、彼らも私の責任だとは考へないだろつと思つたからです。

その19 転機

容疑者・清水紀夫は容疑事実なし——で、釈放となつた。

根岸ともみ弁護士と光子、そして清水志津子とで、中央署に迎えに行く。

天気のよい、『ゴールデンウイーク開けの、爽やかな風が吹く日だつた。

待合室に、権藤警部と若い刑事に伴なられて、清水紀夫は右腕をさすりながら「まいつたよ」とつて現れた。

「滅多にない体験をさせてもらったわね」と志津子。

「休業補償があるといいんだけど」

権藤警部は少しも悪びれた様子はない。日本国民である以上は、いつ何時、思わぬ嫌疑を掛けられて、吟味の俎上そじょうにのせられることになるかわからない、（そんなものあるか！）といわんばかりだ。

「金谷と大野はどうなるの？」と光子が警部に訊く。

「あいつらにはたんまり罪科を背負わせち、長^うい監獄暮らしにしちゃるわい。池辺沙織にもケツにお灸をすえちやらな、ならん」

「滝田学は？」

「滝田か、あいつがもつとシャキッとしたりや、こんな手間隙かけることにはならんかつた。あいつにモーー」

「野島教授のいうこと聞いてれば、もつと早かつたんと違うん」「なにや！」

根岸弁護士があわてて光子の腕を取つて、「じゃあ、わたしたちはこれで」とつて一行を促して部屋を出た。

イタ高のゴンタクレで鳴らした権藤警部は、出て行く光子の後姿をじつと見ていた。

その日の夕方、事務所でちょっとした慰労会をやつた。

といつても、トシ子が、近くのコンビニで、缶ビールにダイエツ

ト「コーク、ウーロン茶のペットボトル、それに裂きイカなどのシマニ類を買つて来て——検察官や裁判官などが仕事が一段落した時に冷酒を立ち飲みして締めるように——休憩室の大きなテーブルを囲んで、飲み食いしただけである。

「結局、野島教授のいう通りになつたじやん」と光子がダイエットコーラを飲みながらいう。

「野島教授といえば、ここにも来たんだよつ」と、トシ子がシマニア類を銀紙の皿に移しながらいつた。「根岸先生に用があつたんだって」

「わたしに?」

アルコール類を飲まない根岸ともみ弁護士は、ウーロン茶を遼子と分け合つて飲んでいる。井川とトシ子が缶ビールである。

「先生は教授のこと知つてんだよね?」と光子。「そんでもつて、教授も先生のことを知つてている。でも面識はない。どうこうなんだろ?

「光子! 変なこといわないの」

遼子がたしなめた。

根岸ともみは浮かない顔をした。考えをめぐらせるように瞳を中に泳がせた。

「でも、ぼく、いまだに解せないですよう。ひとりで、丸椅子の上で、あんな曲芸師みたいなマネができるもんやろか」

井川がずっと拘つ^{じだつ}っていたことだ。

「それは、井川先生がメタボで、お腹が出ていて、体が硬いからじゃない」とトシ子。

「そうですやろか。じゃあ、東さん、体柔らかそつだから、いつ佩ん、試してみますかあ

「しつつ!」光子が口に人差し指を当てた。

家に帰つたらもう九時を過ぎていた。

夕食後、久々に母娘が居間のテーブルに向かい合つ。

「井川先生つて、本当に願つてもない人だわね。よい先生が来てくれた……」

お茶を啜りながらしみじみ遼子がいう。

「どうだか」

光子はOBSの歌番組を観ながら氣のない素振りでいう。

「トシちゃんとお似合いだと思わない？」

「でも井川先生、そんな氣ないみたい……」

「ホントに？」

「きっと、理想が高すぎるんだよ。東浜検事なんて、イノシシが孔雀に恋するみたいじゃん」

「えっ？ そうなの？ 井川先生、東浜検事さんに氣があるので？」

「わかんないけど、なんだかね……」

「そう…… そうなの……」

いつの間にか光子がじっと母親の顔を見ていた。

その19 転機（後書き）

あと少しで光子は兄・竜平に主役の座を譲ることになります。

いよいよ、「リュウヘイ記」に取つて代わります。

お名残惜しゆいざいますが、光子の出番はぐつと減ります。

”朝に虚し、タベに哀し、夜は樂し”

田川の侠客・城島竜一の長男・竜平は、大学生の分際で女色に溺れ、
夜のネオン街を彷徨う…。

それから井川・光子コンビは国選弁護人として傷害事件を手がけ、光子はその最中に、ダメ元で七月に警察官採用試験の願書を提出し、九月に一次試験を受け、一〇月に二次試験を受けた。

そして何と、岩のように聳えていた壁を突き破つて、見事に合格したのだった。

野島教授がいつた通りだった。時の氏神が誰だったのかはさておき、殺人者の親を持つ者が警察官に採用されるなんて、天地が逆さまになつても有り得ないことだった。

田川の侠客の息子が検察官になれた以上に驚天動地のことで、権藤警部などは、「世も末じやあ」とつぶやいたものだった。

その頃はすでに光子は警察内でも有名になつていた。只者でない青嵐の氣を放つようになつていて、薰^{くん}するビヤクダンの香氣に魅せられて、彼女のもとに一人ふたりと、人が寄つて来るようになつた。東浜明美検事でさえ、何くれとなく光子の傍にいた。

光子は野島教授と頻繁に交流し、薩摩隼人の訓育を受けて、政治・経済・文化・歴史等、万般に渡るエッセンスを享受した。若い生命は、それらを千天の慈雨の如くに吸収した。

その一方で武芸に励むことも怠らなかつた。主に柔道であるが、警察官になつてからは剣道も始めた。だが、射撃のほうはどうも苦手で、鉄砲の弾より速くに敵を倒す修練をした。

一時は田川の衆も一一五の姫が警察官になつたつぱい、何? そげんとか、ああ……何ということを一一と嘆いていたけど、そのうち諦めて、産土^{うぶすな}の神や、テキヤの守り神である神農様に一一どうか姫のご武運を一一と祈るようになった。

博多の大御所も、何度も榎原家を訪れて、翻意を促したようであるが、頑として光子は譲らなかつた。

そのうち、叔母の竜子は、光子の瞳の中の光に気付いて、慄然と

したようである。早速故郷に帰つていざという時の備えをした。

母親の遼子は、胸騒ぎがしてならなかつた。どんどん娘が遠い所へ行つてしまつ。危険な所に。元夫の魂に引き寄せられるようになかつてこう胸の内で叫んだことがある。

——この国がどうなると知つたことですか。

あれから十数年、また同じことが起ることではないか。

今や、政治は世論調査の人気投票の場となり、その時々の民意で右に左に振幅して、その都度、ご機嫌取りのばら撒き政治が行われ、株価は乱高下、財政赤字はギリシャの比ではない、百兆円を超えようとしており、最早破産状態、年替わりに首相が変わるこの国に最早屋台骨はない、衆愚を満載した龍骨のない舟である。

国営放送は、誰彼の失言を朝から夜中まで繰り返して報道、顔に絆創膏を張つて登場した大臣に、大臣たるものパンツの中味まで明らかにすべしとばかりに、それを剥がして見せると、マスクミニも国民も迫る、中国の文化大革命以上の愚かで破廉恥な集団バッシングで、失言者や、過失を犯した企業などを、完膚なきまでに叩き潰し、次々に葬り去つた。

最早ジョークついえ。国民に苦言を呈す者は誰もいない。

政権の取り合いだけの政治となつた。

元夫の目指した正義など、初めからなかつたのだ。その幻想を受け継ぐようなことだけは——。

娘には綺麗な着物を着せて成人式を迎へ、女として幸せな結婚をして欲しい。可愛い孫を沢山産んで欲しい。

成人式前の正月に、博多から振袖と博多帯が届けられた。レンタルで済まそうと話していた矢先である（光子はスーツを望んだけど、それは母親としては譲れないところだつた）。

それがまた地味で、生地はそれなりに上等なのだろうけど、女やクザが着るような銀ネズ色の振袖だつた。帯びも黒っぽい博多帯び。親としては一生に一度しか見られない晴れ姿だから、もつと色合い

のよい娘らしいものにしたかった。

けど、致し方ない。写真を撮つて送る手前、誤魔化しは利かない。病院から正月帰りしている父・史郎とともに写真を撮つた。タツオにデジカメで撮つてもらつたのであるが、親子孫のそれが最後の写真となつた（三ヶ月後に史郎が肺炎で死んだからだ）。

着替えを手伝つていて、長襦袢ながじゅばんの下に黒い帯のようなものを発見して遼子は怪訝な顔をした。

「腕に何か巻いてるの？」

「何でもないよ」

遼子は袖を捲つて見た。

「何これ？」

「何でもないって」

光子は袖を下ろそうとする。けど、遼子は一の腕をしつかり掴んで、ベルトをずらして声を上げた。

「あつ、こんなに赤い点々が！ 何これ、トゲトゲがいっぱい付いてるじゃない。何でこんなの巻いてるの？」

それが何であるか見当もつかない。光子が正義のためではなく、父親の復讐に燃えていることなど、知りもしない遼子であった。

後年、それがイエスの受難の痛みを思い起こすために、聖職者が腕や太腿に巻くベルトだと人伝に聞いて、ようやく理解し、「親から貰つた大事な体に何てことするの。あんたの体はあんただけのものじゃないのよ！」と叱つた。

ともあれ、成人式での光子の着物姿は衆目を浴びた。着流しだつたらもつと目を引いただろう。一八〇センチの女の着物姿なんて滅多にお目にかかるものではない。

遼子にはもう一人、竜平といつ息子がいた。

あの子は親思いの優しい子だ。

きっと、沢山の可愛い孫をこしらえて、榎原家の家系を守つてくれるに違いない……。

前に続く（後書き）

史郎がまだ生きていたかどうかあやふやです。
死んでいたら、「めんなさい。」

これにて、「ミシコ記」「リコウヘイ記」は終わります。
次回からは「リコウヘイ記」です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9380o/>

続・テーミスの像「ダークマター」

2011年10月10日03時21分発行